

日本言語学会第 171 回大会 要旨集

会長 定延 利之
大会運営委員長 小町 将之
大会実行委員長 栗林 裕

期日：2025 年 11 月 22 日（土）・23 日（日）

会場：岡山大学津島キャンパス

目次

*各題目をクリックするとその頁に移動し、要旨頁右下「▲」をクリックすると目次先頭に戻ります。詳細はプログラムをご参照ください。

はしがき

ワークショップ・公開シンポジウム(11月23日(日) 10:00-12:00, 13:00-16:00)

10:00-12:00	ワークショップ	D・E棟1,2階
13:00-16:00	公開シンポジウム「アジアの諸言語の「ナル」と「ナル的」表現」 <企画・司会>栗林 裕(岡山大学教授) <基調講演> 池上 嘉彦(東京大学名誉教授) 「‘copula’としての「ナル」とその周辺」 <登壇者> 栗林 裕(岡山大学教授) 「チュルク諸語」 角道 正佳(大阪大学名誉教授) 「モンゴル諸語」 宮岸 哲也(安田女子大学教授) 「シンハラ語・ゾゾ語」 岡 智之(東京学芸大学教授) 「朝鮮語・アイヌ語」 守屋 三千代(創価大学名誉教授) 「日本語：通言語的研究から見た日本語の「ナル」」	共育共創 コモンズ

口頭発表(11月22日(土) 13:00-15:55)

	A会場 D棟1階 D13 司会：[A-1~5] 北田 伸一	B会場 D棟1階 D12 司会：[B-1~5] 吉田 健二
13:00-13:30	[A-1] 杉崎 鉦司, 岡崎 亜美, 藤原 有沙 日本語のスルーシングの統語構造：母語獲得の視点から	[B-1] 久保 圭 現代日本語の同語反復構文「X も X」にみられる程度性と典型性
13:35-14:05	[A-2] 加藤 慎之祐, 藤井 友比呂, 小野 創 日本語空目的語構文における無音付加詞読みについて：予備的実験結果	[B-2] 船越 さやか 焦点化演算子の機能を持つ「だけ」と持たない「だけ」
14:10-14:40	[A-3] 嶋村 貢志 日本語における対格付与に関して	[B-3] 西牧 和也 右側主要部の規則から見た「お-」派生語：再登録アプローチに基づく転換分析
14:40-14:50	(休憩)	(休憩)
14:50-15:20	[A-4] 森田 千草 日本語の二項形容詞の統語構造に関する考察	[B-4] 山口 洋輝 「好きになりやすい」を述語とする文の格付与について
15:25-15:55	[A-5] 遠藤 歩華 場所目的語構文における未完了事態の意味解釈と遊離数量詞への応用	[B-5] 野島 本泰, 横林 美祝 ブヌン語の一人称単数代名詞 <i>zaku</i> は「斜格」なのか—3 方言対照からみるその機能と制限—

	C会場 E棟1階 E11 司会：[C-1~3] 浅尾 仁彦, [C-4~5] 久保蘭 愛	D会場 D棟2階 D23 司会：[D-1~5] 李 林静
13:00–13:30	[C-1] 渡部 直也 漢語数詞＋助数詞における促音化のゆれとハ行子音の交替	[D-1] Abdul-Razak SULEMANA, Ken HIRAIWA Syntax of Modification in Büli: Adjective Incorporation and Light Noun
13:35–14:05	[C-2] 那須川 訓也, 木山 幸子 日本語における喉頭音源対立の音韻表示と東日本地域内の変異	[D-2] Dagnew Mache ASGEDE, So MIYAGAWA Case Marking in Koygu, a Surmic Language in Southwest Ethiopia
14:10–14:40	[C-3] 濱岡 佑帆 自発発話における尻上がりイントネーションの生成	[D-3] Ting-Chi WEI The syntax of adverbial clauses in Isbukun Bunun
14:40–14:50	(休憩)	(休憩)
14:50–15:20	[C-4] 篠原 日菜子 日本語大阪方言における補文標識「の」「ん」「のん」がかかわるモダリティ表現について—共通語との対照の観点から—	[D-4] 伊藤 港 ドイツ語の不在構文 (Absentiv) の背景的機能 am-Progressiv との対照分析
15:25–15:55	[C-5] 吉居 知真 日本語小説の会話文における丁寧語の役割語的使用の実態—語用論の観点から—	[D-5] Todor Ivanov VASILEV Relative Pronouns and Present Participles in Bulgarian Romani: A Case of Contact-Induced Change

	E会場 D棟2階 D25 司会：[E-1~5] 甲斐 ますみ	F会場 E棟2階 E21 司会：[F-1~3] 久保蘭 愛, [F-4~5] 小野 智香子
13:00–13:30	[E-1] Jo-Wang LIN Unifying Mandarin <i>De</i> : Polymorphic Linker for Nominal and Discourse Roles	[F-1] 小木曾 智信, 王 竣磊, 尹 熙洙, 岡田 純子 短単位版関西弁コーパスと関西方言 UniDic の構築—関西方言書き起こしテキストの形態素解析—
13:35–14:05	[E-2] Katsumasa ITO, Heiko SEELIGER Non-canonical response particles in German? Toward a formal semantics of <i>Und ob!</i> and <i>Als ob!</i>	[F-2] 松岡 葵 九州方言と北琉球語における「歩く」を表す動詞の補助動詞用法：複数行為性の観点から
14:10–14:40	[E-3] 網谷 晃樹 トルコ語の過去時制接語 $=(\text{y})DI$ と間接証拠性接語 $=(\text{y})mİş$ の共起制限の分析	[F-3] 尹 熙洙 琉球諸語の語彙に残る強勢言語の痕跡とその示唆
14:40–14:50	(休憩)	(休憩)
14:50–15:20	[E-4] 坂本 遊野 ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ	[F-4] Anna BRANETS Language Attitudes and Communication in Receptive Multilingualism
15:25–15:55	[E-5] 高橋 翼 インドネシア語における与格交替の要因	[F-5] 古川 智康 シメーク語の音韻

	G会場 E棟2階 E23 司会：[G-1~3] 平山 真奈美
13:00–13:30	[G-1] Michael Patrick MANSBRIDGE Animacy Agreement Violations in Japanese Existential Predicates オンライン発表
13:35–14:05	[G-2] Kazuhiro KAWACHI, Maho NAITO, Tatjana ILIC Unexpected patterns of genitives across languages in the context of Shibatani's nominalization theory オンライン発表
14:10–14:40	[G-3] 水野 庄吾 相対的場所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて
14:40–14:50	---
14:50–15:20	---
15:25–15:55	---

■ポスター発表（11月22日(土) 16:00-17:15）於・一般教育棟D棟

P1 会場 D棟 3階 D35	[P-1] Yosuke SATO, Risa KAIBUKI Speaker Variability on Argument Ellipsis in Japanese with -Sika NPIs	[P-2] 春日 勇人 宝永元年空念上人筆録アイヌ語彙「狄言葉」が記録された地域の推定
	[P-3] 阪口 慧 「悪くない」=「良い」に対し、「天才じゃない」≠「馬鹿」なのはなぜか？—評価語否定文における二価志向性の適用範囲と制約条件—	[P-4] 柯 怡廷, 高橋 康徳 台湾閩南語における日本語借用語のピッチパターンの多様性

P2 会場 D棟 3階 D34	[P-5] 安田 朱里 OED データに基づく英語 <i>un</i> -構文の通時的発達と意味制約の形成過程	[P-6] 張 倩倩, 大山 祐亮, 陳 楊鋒 中国語福安方言における受動標識の文法化
	[P-7] 榎村 輝 ペルシア語の複雑述語における語彙的緊密性の破れ	[P-8] 風間 伸次郎 他動性の低い状態述語文の格枠組みにおける階層性について
	[P-9] 石 文君 中国語の動詞コピー構文について	

P3 会場 D棟 3階 D33	[P-10] 中村 真衣佳 Serial Verb Constructions の観点からみた台湾華語「給'gei'」の統語的特性	[P-11] (発表辞退)
	[P-12] 富岡 侑央 換喩研究における概念ブレンディングの役割	[P-13] 内ヶ崎 哲 古典サンスクリット複合語の主節定動詞に対する時制・アスペクトの関係
	[P-14] 若松 史恵 自然談話における「なんか」の曖昧さに関する一考察	

P4 会場 D棟 3階 D31	[P-15] 菅谷 友亮 音声的強調による意味的プロミネンスへの影響—視覚刺激に対する視線停留を用いた実験	[P-16] 金子 真 話者の deontic status を表明するものとしての、命令的意味を表すシヨウ
	[P-17] 熊切 拓 ベルベル語ターウジュート方言（南部チュニジア）の動詞活用	[P-18] Naoki KATSUMI The Presupposition Filter “even if”
	[P-19] 小林 真緒 カレリア語トヴェリ方言における共格の機能	[P-20] 鈴木 彪真 Get-受動態の統語的ステータス:Smuggling 分析と事象構造分析の統合アプローチ
	[P-21] 丸山 莉歩 日本手話における片手脱落現象（Weak Drop）をめぐる新しい分析の提案	[P-22] 谷 茉莉子 非標準的な形式<may/might+did>に関する一考察
	[P-23] 小林 颯 文語タミル語における相関関係節の選択の要因について	

P5 会場 D棟 2階 グローバル スタディー ラウンジ	[P-24] 大西 貴也 初期新デンマーク語における代名詞目的語の語順	[P-25] 村山 友里枝 北海道方言「ラサル」の非意図用法と責任性との関わりについて
	[P-26] 尹 聖樂 モダリティ表現「ものだ」の使用条件	[P-27] スコットディクレメンテ マルコ 鹿児島県南九州市頴娃町方言における語末内破音の音韻解釈
	[P-28] 田中 伶音 コロケーションによるダジャレの定型化性・意外性の客観的抽出方法と類型化—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いた表現効果の計量的測定—	[P-29] Thomas SCHOEKLER From CEC to CCC: on the emergence of new modal markers in Japanese
	[P-30] 山田 智大 線文字 A の言語の形態素分析	

■ワークショップ（11月23日(日) 10:00-12:00）於・一般教育棟D・E棟

A会場 D棟 1階 D13	[W-1] 語形成とプロソディーの関係 企画者・司会：沈 力 コメンテーター：窪蘭 晴夫
	[W-1-1] 日本語の語形成におけるプロソディーの役割 窪蘭 晴夫
	[W-1-2] 伊良部島方言における2種類の複合形式 下地 理則
	[W-1-3] 中国語灌雲方言における語形成とプロソディーの相互構成 沈 力
B会場 D棟 1階 D12	[W-2] 接合要素から考える複合名詞と統語的名詞句 企画者・司会：野元 裕樹
	[W-2-1] ドイツ語の「名詞+名詞」複合語における接合要素：第一要素の名詞語幹に注目して 池田 裕行
	[W-2-2] タガログ語における複合名詞 清水 智也
	[W-2-3] 中国語における複合名詞の接合要素 伊藤 さとみ
	[W-2-4] スペイン語におけるN1 de N2型複合名詞の統語論・意味論 喜多田 敏嵩 野元 裕樹
C会場 E棟 1階 E11	[W-3] The cognitive science of space, time, and modality Organizer & Chair: Yukinori TAKUBO
	[W-3-1] Frames of reference in spatial construals of time: Variations and universals Rafael NÚÑEZ
	[W-3-2] Tagalog demonstratives in interaction: Space, time, and beyond Naonori NAGAYA
	[W-3-3] A referential approach to conditional clauses Setsuko ARITA
	[W-3-4] How transmission delays affect turn-taking in online conversation Hiromichi HOSOMA
D会場 D棟 2階 D23	[W-4] 主観性/subjectivityの言語学 企画者：佐藤 らな 司会：西村 義樹 コメンテーター：長谷川 明香
	[W-4-1] subjectivityとは何か：2つの解釈 西村 義樹 長谷川 明香
	[W-4-2] 〈私〉はどこにいるのか：川端文法と認知文法の接点を探る 佐藤 らな
	[W-4-3] 日本語受身文の視点と主観性 田中 太一
	[W-4-4] ドイツ語のいわゆる関心の与格と主観性 城山 月花
E会場 D棟 2階 D25	[W-5] 日本語から見た世界の言語のアスペクト表現—テイルに相当する概念の表出に関わる形式に着目して— 企画者・司会：江口 清子
	[W-5-1] 現代口語ビルマ語における動作継続と結果残存の表現 大塚 行誠
	[W-5-2] インドネシア語における動作継続と結果残存の表現 原 真由子
	[W-5-3] スワヒリ語における動作継続と結果残存の表現 宮崎 久美子
	[W-5-4] ペルシア語における動作継続と結果残存の表現 ジェイ・ベヘナム
	[W-5-5] デンマーク語における動作継続と結果残存の表現 大辺 理恵
F会場 E棟 2階 E21	[W-6] 周辺的事例と向き合う：その視座と方法 企画者・司会：岩男 考哲 コメンテーター：益岡 隆志
	[W-6-1] 周辺の連体節をどう扱うか 岩男 考哲
	[W-6-2] インターネットスラングをどう扱うか 板垣 浩正
	[W-6-3] 周辺の「ている」をどう扱うか 大神 雄一郎
	[W-6-4] 周辺のthere構文をどう扱うか 三野 貴志

次回大会のお知らせ 奥付



はしがき

日本言語学会第 171 回大会を、2025 年 11 月 22 日（土）と 23 日（日）の両日、岡山大学津島キャンパスで開催します。この大会は、岡山大学から後援をいただいています。大会の開催にご尽力くださった栗林裕先生をはじめ、岡山大学関係者の皆様ならびに大会実行委員会の先生方に厚くお礼申し上げます。周到な準備を進めてくださった小町将之委員長と大会運営委員会の方々にも心よりお礼申し上げます。

今大会も、口頭発表とポスター発表は 1 日目に行われます。発表の応募は 98 件あり、その内訳は、発表形態を口頭発表に限った応募が 15 件、ポスター発表に限った応募が 8 件、第 1 希望を口頭発表とするものが 59 件、ポスター発表とするものが 16 件でした。採択されたのは 63 件、その内訳は口頭発表 33 件、ポスター発表 30 件で、口頭発表・ポスター発表を併せた採択率は 64.3%です。口頭発表の発表者の方には、幅広い背景を持つ大勢の聴衆の興味を惹くよう、発表を工夫していただきますようお願いいたします。またポスター発表の方は、口頭発表では踏み込みにくい突っ込んだ議論が聴衆と存分にできるよう、お知恵を絞っていただければと思います。

なお、ポスター発表の終了後には、参加者交流会を開催します。よろしければぜひこちらにもご参加ください。

大会 2 日目は午前にワークショップがあり、午後には学会賞授賞式や公開シンポジウムが予定されていますので、終日お楽しみいただければと思います。なお、ワークショップは応募が 6 件で、全て採択されています。

次回の第 172 回大会は、2026 年春に桜美林大学で開催されます。詳細はまだ申し上げられませんが、こちらにも奮ってご応募・ご参加ください。第 170 回大会で皆さんに投票していただいた、この学会のロゴマークについても、結果をお目にかける予定ですので、お楽しみにしておいていただければと思います。

2025 年 11 月

日本言語学会長 定延利之



アジアの諸言語の「ナル」と「ナル的」表現

企画者：栗林裕（岡山大学）

<基調講演>

「‘copula’としての「ナル」とその周辺」

池上嘉彦（東京大学名誉教授）

‘copula’としての動詞「ナル」によって言語化される出来事として次のように規定される<過程>を想定する —— <過程>(process)とは、<変化>(change(s))とその<結果>(result(s))として生じる新たな<状態>(state(s))とが、つぎつぎ連鎖状につけ加わって<進行していく>(proceed)<動態的>(dynamic)な（言うならば）<勢（いきおい）を孕んだ><出来事>(event)。最終的には、ある<状態>に至った段階で進行が止む／止まる。

そして、さらに追加考慮されるべき点が二つ。

一つは、変化していく<状態>(state)の「根底にあって、持続的、本質的なもの」として存続する<実体>(substance)ないし<基体>(substrate)と呼ばれるものが想定されうるかどうか。

もう一つは、<変化>の<結果>は‘resultant’つまり、<変化>による直接の結果として新たなモノ／コトが生じるということではなくてはならないこと。

本来<自然生起>を旨としていたところに<人為>の介入が加わることによって、この構造がどのように崩れて行ったか —— 「なれの果て」の一端を探ってみる。

「アジアの諸言語の「ナル」と「ナル的」表現」

「チュルク諸語」

栗林裕（岡山大学）

チュルク諸語はユーラシア大陸一体に分布するアルタイ型(OV 語順、膠着的形態法等)の類型論的特徴を共有する諸言語とその方言を指す名称である。トルコ語はチュルク諸語の中で最大の話者数を有し、エーゲ海、黒海、地中海に面して欧州側とアジア側に領土を持つ政治・経済的にも最も有力なトルコ共和国の公用語である。本発表では、トルコ語を中心にチュルク諸語でみられるナル的表現について、導入としての概説的な内容と、新しい見解を交えながら、対照的・類型論的観点からチュルク諸語から見たナル的表現研究の一端を紹介したい。チュルク語におけるナル的表現は現存する最古の文献記録である7世紀の古代トルコ語（オルホン碑文）にはbol-の形式で現れている。当時は、もっぱら変化を表す形式であり、コピュラの機能には別の形式があった。その後、チュルク諸語には主に bol-/ol-として二つの形式が分布していき、トルコ語をはじめとする主な南西語群ではol-として現れ、「出来」と「変化」を表すのが主な機能であり、派生的にコピュラの機能やモーダルの機能等を持つようになった。



本発表での主張は主に 3 つである：1)ナル的表現 ol-は主動詞として機能する場合のほかに、補助動詞として機能する場合には語レベル、句レベル、文レベルに関わることが対照する際には重要になること、2)bol-/ol-の分布は同じチュルク諸語内であっても決して同一ではないことを翻訳される際の数量的比較により示すこと、3)OV 言語にナル的表現が多く見られることは補助動詞として主語に動作者をとるか被動物・者をとるかが組み込まれることに依存していること、を論じる。話者の事態把握として捉えられてきたナル的表現の現象は、特に OV 言語において文法に組み込まれる仕組みが重要な役割を果たしており、類型論的な特徴にも関連することを主張する。

「モンゴル諸語」

角道正佳（大阪大学名誉教授）

日本語の「ナル」に相当するモンゴル文語の bol-に対応する形式についてその用法を検討したところ、モンゴル語（ハルハ方言）では出来、変化、コピュラ、モダリティは表すけれども、誕生、存在は表さないことがわかった。また中華人民共和国の甘肅省、青海省、内蒙古自治区で話されている周辺言語の東部裕固語、土族語、康家語、保安語、東郷語、達斡爾語では変化は表すが誕生、コピュラ、存在は表さない。モンゴル語（ハルハ方言）の bol-は主格を要求するが、周辺言語では随意的に与位格を要求することがある。kür-「至る、到達する」がナル相当動詞と考えられるなら、モンゴル語（ハルハ方言）でも与位格を要求することがかなりあることの理由を考える必要がある。周辺言語にコピュラを表す用法がないのに関連して bol-の譲歩副動詞で逆接を表す例が見当たらないことや、bol-の条件副動詞で主題を表す例が東部裕固語と達斡爾語に例外的にわずかにしかみられない事実が重要である。周辺言語には受動態を持たない言語（土族語、康家語、保安語、東郷語）があるが「聞こえる」を表す sonosta-が土族語にあり形態的にこの動詞は受身の形式を持っているため、かつて受動態はあったけれども消失したのと考えられる。周辺言語でコピュラの用法がないのは元々なかったのものであって、モンゴル語（ハルハ方言）のほうが比較的新しい時代にその用法を獲得したもののように思われる。bol-のコピュラ用法の一部は日本語のバイト敬語を彷彿させる。

「シンハラ語・ゾゾ語」

宮岸哲也（安田女子大学）

シンハラ語は印欧語族インド・アーリア語派南インド語群で 2100 万程度の母語話者数を持つスリランカの国語の一つである。ゾゾ語（中国語名：若柔語、英語名：Zauzou）はシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派ロロ語支（彝語支，Loloish）に属し、中国雲南省怒江リス族自治州で使用される母語話者数 3000 人程度の言語である。類型論的に見ると、シンハラ語は屈折語的で、ゾゾ語は孤立語的であるが、どちらも部分的に膠着語的要素を持つ。両言語は S O V が基本語順で、格を接辞で部分的に表す点で共通するが、動詞の語形変化は、シンハラ語に見られ、ゾゾ語には見られない。またゾゾ語は声調を持つ。

シンハラ語は、ナル型の表現に対応する受動動詞を発達させた出来事志向の言語である。受動動詞の一つであるナル相当動詞は、本動詞と補助動詞のどちらにも使われ、出来、変化、存在、コピュラの用法を幅広く持つ。一方、ゾゾ語もナル相当動詞が存在するものの、変化の意味に限られ、出来、存在、コピュラはいずれも異なる語が使われる。また、変化は中国語と同様にコピュラ文の末尾に完了の助詞



を付けるだけでも表すことができる。

ナル相当動詞を除いた、出来、変化、存在、コピュラに関する両言語の共通点としては、2つの存在動詞を有生性の有無で使い分けること、コピュラ文が単純に名詞を二つ並べるだけでも作られることが挙げられる。

シンハラ語はナル相当動詞の意味・機能が幅広い言語であり、その逆がゾゾ語である。アジア諸言語の中には、ナル相当動詞の活躍する程度に差があり、ナル相当動詞だけでなく、ナル的な状態をどのように表すのかを調べ、比べることが重要である。今後は、タミル語などドラヴィダ語族の言語や、チベット・ビルマ語派の言語の中でも、インド・アーリア語派言語との接触がある言語のナル相当動詞についても調べる必要がある。

「朝鮮語・アイヌ語」

岡智之（東京学芸大学）

朝鮮語のナル相当動詞として、되다 dweoda と지다 jida があげられる。되다 Dweoda は、典型的には、主格이/가 i/ga を取り、事態の出来を表す。(봄이 되다 bom-i dweoda.lit:春がなる)。また、動詞語幹+게 되다 ge dweoda という形で、日本語の「動詞＋ようになる／ことになる」を表現する。この場合、到達点志向の事態の変化を表す。지다 jida は、本動詞としては「落ちる」などの状態変化を表すが、形容詞連用形 (아/어 a/eo 形) について、事態の漸次的状態変化を表す。(토마토가 빨개지다 tomato-ga bbarg-ai-jida. トマトが赤くなる)。また、形容詞語幹+게 되다 ge dweoda の形で、外部的作用による到達点志向の事態の変化を表す。ナル相当動詞の意味だけではなく、名詞につく助詞や、動詞・形容詞の接続形の相違により、様々な出来、変化を表しわけけることを明らかにする。

アイヌ語は、ナル専用の相当動詞が存在しないと考えられる。名詞には、存在動詞 an (ある／いる) とコピュラ動詞 ne (である) がつき、文脈により日本語のナル相当に訳される。また、アイヌ語には形容詞という品詞はなく、自動詞扱いで文脈により日本語のナル相当に訳される。an は、時の表現について、典型的には出来を表す。(kunneywa an 朝になる)。名詞はゼロ格で、一項動詞（自動詞）である。ne は、モノの変化を表す一般的な動詞として使われる。(wenkur ne 貧乏人になる)。ne はやはりゼロ格で、二項動詞（他動詞）として扱われる。ne は変成の格助詞として文法化し、ne an という形をとることがある。この場合、人間が神になったり、動物になったりする変成を表すことが多く、また、漸次的変化も表しうる。ne an と ne, an との使い分けに関しては微妙な例もあり、使い分けの詳細を考察する。

「日本語:通言語的研究から見た日本語の「ナル」」

守屋三千代（創価大学名誉教授）

ナル的表現研究会では、ユーラシアの言語において日本語のナルのように「出来」を専用に表す動詞をナル相当動詞、これを伴う表現をナル的表現、これらの動詞・表現を持つ言語をナル的言語と名付けて、通言語的にナル・ナル相当動詞の意味用法の調査を行った。その結果、日本語の場合は「実がナル」のように主格を伴う出来と、「春にナル」「氷が水にナル」のように時間幅が含意され、与格を伴う結果の出来（変化）があり、後者を主たる用法とするのに対し、ナル的言語では主格／ゼロ格を伴う出来の用法を基本とするという相違が見えた。さらに、創世記冒頭の「光、あれ。そして光があった」の新事



態の出来場面の調査では、原文のヘブライ語をはじめ多くのナル的言語では存在動詞ではなく出来を表すナル相当動詞が用いられるのに対し、日本語・朝鮮語・中国語・英語などでは存在動詞が用いられることがわかった。ここで、(1).この存在動詞アルは一般的な静的存在を意味するのか、(2).なぜ日本語（および朝鮮語・中国語・英語）ではナルではなくアルを用いるのかという疑問が生じ、本発表では未解決のこの2点の考察を試みる。(1).については、日本語ではナルの出来とは別に、アルが貴人の誕生をはじめ動的事態の存在・出来を表す例が古事記・日本書紀・萬葉集・祝詞などに見られ、現代語にもそうした用法が見られることを具体例とともに示す。(2).については、ナル相当動詞の多くが出来の意味を原義とし、存在・コピュラへと意味を拡張する現象が観察されるのに対し、日本語では出来のナルと存在・出来のアルが、古来より別の概念を表す動詞として区別されてきたことが関与すると考えられる。有効なヒントは、ナルとアル（(1).で言及）の出来の意味用法の基本的な相違、および朝鮮語・中国語・英語でも存在動詞が選ばれていることである。創世記の文章という特殊性も視野に入れながら、考察を試みたい。



A-1

日本語のスルーシングの統語構造：母語獲得の視点から

杉崎 鉦司・岡崎 亜美・藤原 有沙（関西学院大学）

キーワード：日本語・母語獲得・スルーシング

本研究は、残余 *wh* 句が格助詞を伴っていない日本語のスルーシング構文に関して、その構造には移動が含まれていないとする分析に対し、日本語獲得の観点から新たな支持を与えることを目的とする。

英語では、(1)に例示されるような、*wh* 句を残して節の他の部分を省略する現象の存在が知られており、この構文は「スルーシング」(Ross 1969)と呼ばれている。(2)に例示されるように、表面的に似た現象の存在は日本語においても観察されている (Inoue 1978, Takahashi 1994, Fukaya & Hoji 1999 など)。

(1) Ken recommended, but I don't know who.

(2) ケンは誰かを推薦したが、(a) 私は誰か知らない。/ (b) 私は誰か知らない。

英語のスルーシングに関しては、(3)に示されるように、省略部分には通常の *wh* 移動を含む完全な節構造がもともと存在しており、先行詞となる文との（意味的な）同一性に基づいて *wh* 句以外の部分が PF で削除されるという分析が広く採用されている (Merchant 2001 など)。英語と同様の分析が、(2a)のような、残余 *wh* 句が格助詞を伴っている日本語のスルーシング (Case-marked sluicing; CM sluicing) に対しては可能であると考えられている (Takahashi 1994 など)。一方、(2b)のような、残余 *wh* 句が格助詞を伴っていないスルーシング (non-CM sluicing) に対しては、別の分析が有力である。Fukaya & Hoji (1999) によると、non-CM スルーシング (2b) はその埋め込み節の主語位置に英語の *that* に相当する空代名詞を含む (4a) のような構造を持ち、それゆえ音形を持った代名詞を伴う (4b) と同様の振る舞いを示すことになる。

(3) Ken recommended someone, but I don't know who Ken recommended ~~it~~.

(4) a. ケンは誰かを推薦したが、私は[CP [NP *e*] 誰か]知らない。

b. ケンは誰かを推薦したが、私は[CP [NP *それが*] 誰か]知らない。

Non-CM スルーシングの構造 (4a) の証拠として以下の2つの現象がある (Fukaya & Hoji 1999)。まず、(5)に示されるように、CM スルーシングが言語的に表現された先行詞文を必要とするのに対し、non-CM スルーシングは文脈のみによって認可が可能であり、これは代名詞に典型的に見られる性質である。また、(6)が示すように、CM スルーシングの残余 *wh* 句は関係詞節内からの移動を禁ずる制約の効果を示すが、non-CM スルーシングの残余 *wh* 句はその効果を示さないため、後者には移動が含まれていないと考えられる。

(5) 【文脈】 ケンとハナコがよく知っている先生が明らかに誰かを叱っている声が聞こえる。

a. ケン：*僕は誰か知ってるよ。 b. ケン：僕は誰か知ってるよ。

(6) a. *ケンは[[弟に何かを送ってきた]人]を招待したらしいが、僕は何か知らない。

b. ケンは[[弟に何かを送ってきた]人]を招待したらしいが、僕は何か知らない。

母語獲得研究に目を向けると、英語を獲得中の3～5歳児にとって、(7a)のような残余 *wh* 句が主語に相当するスルーシング（主語 *wh* スルーシング）のほうが (7b) のような残余 *wh* 句が目的語に相当するスルーシング（目的語 *wh* スルーシング）よりも解釈が容易であり、後者では解釈上の誤りが見られることを Mateu & Hyams (2021) が報告している。この主語・目的語の非対称性は幼児による通常の（省略を含まない）*wh* 疑問文の解釈においても観察されるため (Tyack & Ingram 1977 など)、Mateu & Hyams (2021) は、幼児英語からの事実が英語のスルーシングの派生に *wh* 移動が含まれるとする統語分析に対して支持を与える論じている。また、同様の主語・目的語の非対称性が、中国語を母語とする5～6歳児による中国語のスルーシング（に相当する文）の解釈にも生じることが Liu, Hyams & Mateu (2020) で報告されている。

(7) a. I can see that someone is brushing Ben, can you see who?

b. I can see that Ben is brushing someone, can you see who?

本研究は、日本語を母語とする4～6歳の幼児が、日本語の non-CM スルーシングの解釈において主語・目的語の非対称性を示すか否かを実験により明らかにする。Non-CM スルーシングに対する (4a) の構造は *wh* 移動を含まないため、この分析が妥当であれば、日本語を母語とする幼児は英語や中国語を母語とする幼児とは異なり、non-CM スルーシングの解釈においては主語・目的語の間の非対称性を示さないことが予測される。この予測の妥当性を確かめるため、20名の幼児（平均年齢 5;06）を対象に、(8)のような non-CM スルーシングの解釈と、(9)のような（省略を含まない）*wh* 疑問文の解釈について調査を実施した。

(8) a. 誰かがぶたさんを捕まえたみたいだけど、誰かわかるかな？

b. ぶたさんが誰かを捕まえたみたいだけど、誰かわかるかな？

(9) a. 誰かがぶたさんを捕まえたみたいだけど、誰がぶたさんを捕まえたかわかるかな？

b. ぶたさんが誰かを捕まえたみたいだけど、ぶたさんが誰を捕まえたかわかるかな？

その結果、(10)の表に示すように、日本語を母語とする幼児は、non-CM スルーシングの解釈においても、*wh* 疑問文の解釈においても、非常に高い正答率を示し、主語・目的語の間の非対称性を示さないことが明らかとなった。この調査結果は、日本語の non-CM スルーシングの構造が (4a) のように *wh* 移動を含まないとする分析に対して日本語獲得からの証拠を提示するものである。より大きな帰結として、本研究は、母語獲得からのデータが統語分析の妥当性の検証において有益な役割を持ちうることを示したものである。

(10) 実験結果

	被験者数	主語 <i>wh</i>		目的語 <i>wh</i>	
		正答数	正答率	正答数	正答率
Non-CM スルーシング (8)	10	28/30	93.33%	28/30	93.33%
<i>Wh</i> 疑問文 (9)	10	29/30	96.67%	28/30	93.33%

参照文献：

- Fukaya, Teruhiko, and Hajime Hoji. 1999. Stripping and Sluicing in Japanese and Some Implications. In *Proceedings of the 18th West Coast Conference on Formal Linguistics (WCCFL 18)*, eds. Sonya Bird, Andrew Carnie, Jason D. Haugen and Peter Norquest, 145-158. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.
- Inoue, Kazuko. 1978. *Nihongo-no Bunpoo Kisoku* [Grammatical Rules in Japanese]. Tokyo: Taishukan.
- Liu, Minqi, Nina Hyams, and Victoria Mateu 2020. Late Intervention Effects in the Acquisition of Mandarin Sluice-like Constructions. In *Proceedings of the 44th Annual Boston University Conference on Language Development (BUCLD 44)*, eds. Megan M. Brown and Alexandra Kohut, 322-35. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press
- Mateu, Victoria, and Nina Hyams. 2021. Structural Intervention Effects in the Acquisition of Sluicing. *Language Acquisition* 28: 6-38.
- Merchant, Jason. 2001. *The Syntax of Silence*. Oxford: Oxford University Press.
- Ross, John Robert. 1969. Guess Who? In *Papers from the 5th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, eds. Robert Binnick, Alice Davison, Georgia Green, and Jerry Morgan, 252–286. Chicago, Illinois: Chicago Linguistic Society.
- Takahashi, Daiko. 1994. Sluicing in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 3: 265-300.
- Tyack, Dorothy, and David Ingram. 1977. Children's Production and Comprehension of Questions. *Journal of Child Language* 4: 211–24.



A-2

日本語空目的語構文における無音付加詞読みについて: 予備的実験結果

加藤慎之祐 (横浜国立大学[院])・藤井友比呂 (横浜国立大学)・小野創 (津田塾大学)

キーワード: 空目的語構文、無音付加詞読み、日本語、真偽値判断タスク

【概要】(1a、b)に見られるような空目的語構文における無音付加詞 [N(ull) A(djunct)] 読みの分布は、動詞残留動詞句削除分析 ([8]) の根拠とされることがある ([1]など)。(2)に示すよう、その分析では、付加詞のみの削除操作はないが、V 移動ののちに VP 削除を適用することで付加詞と目的語が省略できる。

(1) ヒロシは車を丁寧に洗ったけど、マリは {a. 洗わなかった (^{OK}NA)、b. 車を洗わなかった (*NA)}。

(2) マリは {_{VP}丁寧に車を_も洗わ_iなかった。

一方で、(1)の容認度判断パターンは、全ての先行研究で受け入れられているわけではない。空目的語文での NA 読みの可能性に話者間変異があるという主張 ([5]、[10])、目的語顕在文でも NA 読みは存在するという主張 ([5]、[7]) などが見られる。さらには、NA 読みは、述語が和語であることを要求するという観察もある ([3]、[4])。本発表は、以上のように経験的議論を呼んでいる一般化群に真偽値判断タスクを用いてアプローチする。具体的には、(3)のように「目的語要因」と「述語要因」という被験者内 2 要因を 32 名の参加者に対してテストした。

(3) 目的語要因	述語要因	例文: ブタは社長の誕生日会にスーツで ...
目的語空	和語	a. ... 来たけど、ウシは来なかったよ。
	漢語	b. ... 出席したけど、ウシは出席しなかったよ。
目的語顕在	和語	c. ... 来たけど、ウシは誕生日会に来なかったよ。
	漢語	d. ... 出席したけど、ウシは誕生日会に出席しなかったよ。

ストーリー: 暑い中、社員であるブタとウシは社長のゾウの誕生日会に呼ばれ、ブタはスーツで出たが、ウシは水着で出た。ゾウはマナーがなっていないと怒った。

【結果】図 1 の結果を一般化線形混合モデルで分析したところ、目的語要因 ($\beta=2.83$, $SE=0.48$, $z=5.867$, $p<0.001$)、述語要因 ($\beta=-1.135$, $SE=0.046$, $z=-2.44$, $p=0.015$) と主効果が有意であった。また 2 要因の交互作用も有意であった ($\beta=-2.94$, $SE=0.93$, $z=-3.17$, $p=0.002$)。下位検定を行った結果、目的語空の条件のもと、和語動詞と漢語動詞の間で NA 読みの受容率に差があった ($\beta=2.60$, $SE=0.463$, $z=5.636$, $p<0.001$)。よって以下のことが分かる。

(4) a. NA 読みは、[1]に合致して、目的語空条件(3a)で最もよく受入れられ、目的語があるとき(3c)はほぼ不可能である。

b. ただし(3a)条件でも、受容率はそれほど高くない (41.4%)。

c. 目的語空のとき、[3]に合致して、漢語は NA 読みの受容率を下げる (10.5%)

個人分析について (図 2)。和語・目的語空条件においては、NA 読みが全くできない被験者が 1/3 近くを占めた。残り 2/3 は、受容回数にほぼ均等に分布した。目的語顕在条件では、25 名が NA 読みを 8 回中全く受容せず、7 名が 1 回だけ受容した。

【考察】以上の結果は、空目的語が NA 読みの必要条件であるとする [1]の一般化を支持する。

また、目的語顕在条件における NA 読みの不可能性に個人差 ([5]、[10]) は見られないため、付加詞のみの省略 ([4]、[7]、[9]) は、当該の条件では話者に関わらず許されないと結論できる。一方、目的語空条件においては NA 読みの容易さに個人差があるように見えるが、受容しない群と容易に受容する群に 2 分されるわけではない ([2])。(1)は無音付加詞構文と付加詞を最初から伴わない空目的語構文の間で統語的に曖昧であろう。だとすると、(1)の NA 読みの難しさはそれ自体の可不可・難易ではなく、空目的語構文と比較しての難しさである可能性もある。統語的曖昧さ解消における個人差も検討する必要がある ([6]など) NA 読みに必要な表示の生成に個人差があるかどうか確定的な結論は出せない。

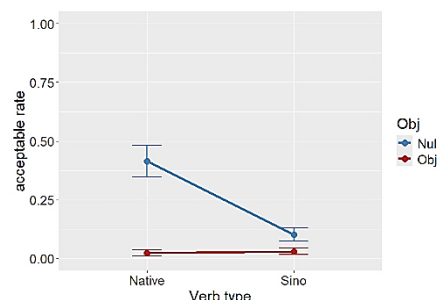


図 1: 各条件における平均受容率

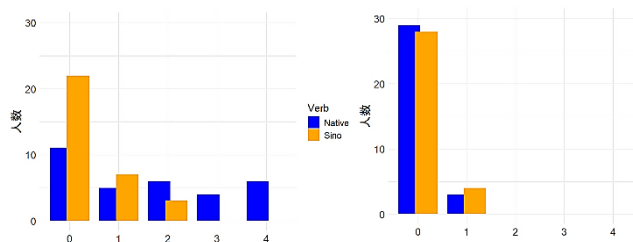


図 2: 目的語空条件(左)と目的語顕在条件(右)における受容回数と被験者数

参考文献

- [1] Funakoshi, K. (2016) Verb-stranding verb phrase ellipsis in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 25(2): 113-142.
- [2] Han, C.-H., Musolino, J. and Lidz, J. (2016) Endogenous sources of variation in language acquisition, *Proceedings of the National Academy of Sciences* 113(4): 942-947.
- [3] Hayashi, S. and Fujii, T. (2016) Predicate ellipsis, null adjuncts, and predicate raising in Japanese. *Proceedings of CLS* 51(1): 225-239.
- [4] Kobayashi, R. (2025) Null adjuncts and adjunct-inclusive interpretation in Japanese. *Glossa: a journal of general linguistics* 10(1): 1-19.
- [5] Landau, I. (2023) More doubts on verb-stranding VP ellipsis: Reply to Simpson 2023. *Syntax* 26: 449-470.
- [6] MacDonald, M. C., Pearlmuter, N. J., and Seidenberg, M. S. (1994). The lexical nature of syntactic ambiguity resolution. *Psychological Review*, 101(4), 676–703.
- [7] Oku, S. (2016) A note on ellipsis-resistant constituents. *Nanzan Linguistics* 11: 57–70
- [8] Otani, K. and Whitman, J. (1991) V-raising and VP-ellipsis. *Linguistic Inquiry* 22(2): 345-358.
- [9] Tanabe, T. and Kobayashi, R. Arguments against head-stranding ellipsis in Japanese: A reply to Funakoshi (2016). *Syntax*: 1-23.
- [10] Tanaka, H. (2023) Against verb-stranding VP-ellipsis in Japanese: reply to Funakoshi (2016). *Journal of East Asian Linguistics* 32(1): 1-28.



日本語における対格付与に関して
嶋村 貢志 (金沢星稜大学)

キーワード：日本語、統語論、格付与、Agree と依存格

Chomsky (2000) 以降、格付与は、統語操作 Agree を介して行われる。しかし、統語的に他動詞 *v* (あるいは Voice) を持っていないとされる例が対格を許容する場合がある。以下の例を観察されたい。

- (1) a. 太郎が花子 { を/?が } 好きな理由は、何ですか。
b. 太郎は、花子 { が/?を } 好きだ。

(1a)の関係詞節内において、形容動詞「好きだ」の目的語は、主格・対格どちらでも標示可能であるが、対格の方が座りがよいように思われる。一方、主節文である(1b)では、主語が話題標識で標示されており、この場合の対格目的語は、非文法的と感じられないが、若干不自然に感じられる。形容動詞の対格付与に関して、Fukuda (2023) は、他動性を持つ Voice の名詞化という分析を提出している。Fukuda は、「好く」という動詞が *-i* 接辞によって名詞化され、「好き」が派生されるという Sugioka (1984) の主張に基づき、以下の分析を提案している。

- (2) $[_{TP} \text{SUBJ}_i [_{T'} [_{VP} [_{nP} \text{t}_{SUBJ} [_{n'} [\text{VoiceP} \text{PRO}_i [\text{Voice}' [_{VP} \text{OBJ} \text{suk-}] \text{Voice}_{ACC}]] -i]] \text{cop}] \text{T}]]$

(2)において、Voice は通常他動詞文のそれと同じであり、外項の θ 役割と事象項を持っていると Fukuda は主張する。そして、目的語に主格が与えられる場合は、(2)とは異なり、VoiceP が投射されず、(3)のようになる。

- (3) $[_{TP} \text{SUBJ} [_{T'} [_{VP} [_{nP} \text{t}_{SUBJ} [_{n'} [_{VP} \text{OBJ} \text{suk-}] -i]] \text{cop}] \text{T}]]$

ということは、(2)の構造において、VoiceP の解釈は、「太郎は、花子を好いている」のような他動詞文のそれとまったく同じということになる。しかし、以下の例が問題となってくる。

- (4) a. 太郎が、気に入られるために、わざと、嫌な担任の先生 { を/*が } 好いた。
b. *太郎が、気に入られるために、わざと、嫌な担任の先生 { を/が } 好きだった。

(4a)では、VoiceP を修飾すると考えられる動作主指向性副詞「わざと」と「ために」節が用いられている。これらの要素は、目的語格助詞の選択に関わらず、(4b)が示すように形容動詞文では使うことができない。また、Fukuda (2020) は、(5)のような動詞由来の「～だ」の例文の議論しているが、ここで興味深いのは、「～だ」の形にすると、「訪問」が実現されていなくてよいということである。(6b)が表しているの、首相とアメリカの間に「訪問」という関係があるだけで、実際に起こったかどうかには関与しない。よって、通常の事象項は存在しないと考えられる。

- (5) 首相は、アメリカ { を/*が } 訪問だ。(cf. 首相は、アメリカ { を/*が } 訪問する。)
(6) a. #首相は、アメリカ { を/*が } 訪問したが、訪問しなかった。
b. 首相は、アメリカ { を/*が } 訪問だったが、訪問しなかった。

以上の事実を鑑みて、本発表では、Nishiyama (1999) に従い、(7)の構造を仮定し、(8)を主張する。

- (7) $[_{TP} \text{SUBJ} [_{T'} [_{PredP} \text{t}_{SUBJ} [_{Pred'} [_{NP} \text{OBJ} \text{suki/hoomon}] \text{cop}]] \text{T}]]$

- (8) a. T と他動詞 Voice/*v* は、Agree によって、それぞれ [Nom] と [Acc] を DP に付与する (Chomsky 2000)。
b. 依存格 (dependent case) である [acc] は位相ごとに、C 統御関係を介して統語的に DP に付与される (Baker 2015, Preminger 2012)。
c. Agree による格と依存格は、一つの DP に共存してよい。
d. Baker (2015) に従い、VoiceP/*v*P は硬位相 (hard phase) であり、PredP は軟位相 (soft phase) である。

通常他動詞文の場合、(8a)により、目的語には [Acc] が付与され、(8b)により、[acc] が付与される。よって、他動詞文の目的語は [Acc] と [acc] を同時に持つ。これは、ある種の格堆積 (case-stacking) であり、「だけ」を伴う以下のような例を説明する (cf. Levin 2017)。

- (9) 太郎が次郎をだけを推薦する理由は、何ですか。

(7)においては、まず、PredP が完成すると、(8b)/(8d)により、目的語には [acc] が付与される。PredP は軟位相であるため、T と目的語との Agree を許し、目的語は [Nom] を付与されることができる。よって、(7)の構造において、目的語が [acc] と [Nom] を付与されることになる。これは、(10)を説明する。(10)の目的語は [acc] と [Nom] を具現化していると考えられる。そうすると、(5)のような例では、必ず [acc] を形態的に具現がすることになるが、格堆積すると「が」も出現してもよい：(11)。

- (10) 太郎は、花子をだけが好きだ。
(11) 首相は、アメリカをだけが訪問だ。(cf. *首相は、アメリカをだけが訪問する。)

参考文献

- Baker, Mark C. 2015. *Case: Its principles and its parameters*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: the framework. In *Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155. Cambridge, MA: MIT Press
- Fukuda, Shin. 2020. Transitive nominals in Japanese and the syntax of predication. In *Proceeding of Japanese/Korean linguistics 26*, ed. Shoichi Iwasaki, Susan Strauss, Shin Fukuda, Sun-Ah Jun, Sung-Ock Sohn, and Kie Zuraw, 129–139. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Fukuda, Shin. 2023. Deverbal psych nominals and nominative-accusative object case alternation in Japanese: An experimental study. *Journal of Japanese Linguistics* 39:169–211.
- Levin, Theodore. 2017. Successive-cyclic case assignment: Korean nominative-nominative case-stacking. *Journal of East Asian Linguistics* 35, 447–498.
- Nishiyama, Kunio. 1999. Adjectives and the copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8:183–222.
- Preminger, Omer. 2012. Agreement as a fallible operation. Doctoral Dissertation, Massachusetts Institute of Technology, Cambridge, MA.



キーワード：日本語、統語論、形態論、二項形容詞、主題役割

主旨：Baker (2003)は、動詞、名詞、形容詞という語彙範疇を区別する基準のひとつとして、その指定部を認可する能力の有無を挙げる。Bakerによると、動詞は指定部に生起する項を認可する能力を持つ一方、名詞および形容詞にはその能力がない。そのため、動詞は外項を指定部に導入することが可能であるのに対し、名詞や形容詞は指定部を認可する能力を持たず、外項は叙述を成立させるために必要な機能範疇主要部 Pred(icate)によって導入される (cf. Bowers 1993)。分散形態論において、語根は範疇中立であり、動詞や名詞、形容詞を派生する機能範疇主要部 *v*, *n*, *a* と併合することにより範疇化が行われる。この立場を採用すると、機能範疇主要部 *v* にはその指定部に外項を導入する能力があるのに対し、機能範疇主要部 *a* と *n* はその能力がないということになる。しかし、二項形容詞述語の考察をもとに、本発表は日本語の機能範疇主要部 *a* には指定部に項を導入する能力があることを提示する。また、日本語の形容詞は常に PredP を形成すると仮定したうえで(cf. Nishiyama 1999)、(1)のように主要部 Pred, *a* がそれぞれ異なる主題役割を持つ項を導入すると提案する。本発表の提案は、Baker (1988)の主題役割付与一様性仮説を部分的に支持するものである。

(1) [PredP 経験者項 [_{NP} 主題項 [_{VP} *a*]] Pred]

日本語の二項形容詞述語に関する考察と分析：英語の形容詞述語は複数の名詞句項を取ることができない。難易形容詞や心理形容詞の場合、経験者は主語名詞句として、主題は形容詞の PP 補部として現れる。

(2) a. Math is difficult for me.

b. Mary is pleased with her test results.

上記の事実は、形容詞は指定部を認可する能力を持たないため、外項は機能範疇主要部 Pred が導入するという Baker (2003)の分析によって説明を与えることが可能である。

一方、日本語の難易形容詞述語は経験者と主題を表す名詞句とともに現れ、それぞれの名詞句には二格(あるいはニトツテ)、ガ格が標示される。経験者を表す句は付加的要素ではなく形容詞により語彙的に選択された項であることから(王・竹沢 2021)、日本語の難易形容詞は二項述語である。(3b, c)が示すように、難易形容詞の経験者項は随意的である一方、主題項は義務的である。

(3) a. 留学生に(にとって)漢字が難しい(こと)

b. (留学生に(にとって))漢字が難しい

c. 留学生に(にとって)*漢字が難しい

日本語の難易形容詞の統語構造を検証するため、本発表は接辞「さ」の付加により派生した名詞の統語的特性について考察する。(4)に示すように、形容詞派生名詞の場合も、経験者項は随意的であるのに対し、主題項は義務的である。また、主題項はノだけを伴うが、経験者項はニトツテの標示を受けたうえでノを伴う。

(4) a. (留学生にとっての)漢字の難しさ

b. 留学生にとっての*(漢字の)難しさ

c. 留学生*(に(にとって))の漢字の難しさ

ノが音韻的理由により挿入されたものだとすると(Kitagawa and Ross 1982)、主題項が形態統語的に無標であるという事実は、形容詞が選択する内項であることを示す。一方、経験者は形容詞により選択される項だが、ニトツテ標示が義務的であることから有標の項である。これは、経験者項が機能範疇主要部 Pred によって外項として導入されることによると仮定する。この考察を踏まえ、(4a)は次のような統語構造を持つと提案する。

(5) [_{NP} [PredP 経験者項+ニトツテ [_{NP} 主題項 [_{VP} *a*]] Pred] *n*]

この構造はそれぞれの統語的位置が特定の主題役割と結びつくことを提示するだけでなく、日本語の形容詞は述語としての機能を持たない場合にも PredP を形成することを示唆する。

次に、日本語の心理形容詞述語について考察する。難易形容詞と同様、心理形容詞述語も経験者項、主題項を取る二項述語だが、(6)のように経験者項にはガ格、二格のいずれかが標示される。

(6) a. 太郎が/に大学合格がうれしい(こと)

b. 花子が/に愛犬の死が悲しい(こと)

また、難易形容詞と異なり、心理形容詞から派生した名詞の場合、経験者項はニトツテ標示を受ける必要がない。さらに、主題項は経験者項に先行して現れることが可能である。

(7) a. 太郎の大学合格のうれしさ

b. 大学合格の太郎のうれしさ

しかし、照応形「自分」が主題項に含まれるとき、「自分」は経験者項の対象と同一指示となる。「自分」の主語指向性から、心理形容詞の経験者項は外項として生起するといえる。

(8) a. 太郎_iの自分_iの大学合格のうれしさ

b. 自分_iの大学合格の太郎_iのうれしさ

したがって、心理形容詞から派生した名詞も(5)のような統語構造を持つと提案する。なお、(7), (8)の経験者項にニトツテ標示の必要がないのは、心理形容詞は有生の経験者項を取らなければならない、2つの項のどちらが経験者を表すかが自明なためである。経験者項、主題項がともに有生の場合、経験者項が構造的に高い位置に生起して主題項に先行するか、あるいは経験者項がニトツテ標示される必要がある。

(9) a. 太郎(にとって)の次郎のうらやましさ

b. 次郎の太郎*(に(にとって))のうらやましさ

参考文献

- Baker, Mark C. (1998) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Baker, Mark C. (2003) *Lexical Categories: Verbs, Nouns, and Adjectives*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Bowers, John (1993) “The Syntax of Predication,” *Linguistic Inquiry* 24 (4), 591-656.
- Kitagawa, Chisato and Claudia Ross (1982) “Prenominal Modification in Chinese and Japanese,” *Linguistic Analysis* 9, 19–53.
- Nishiyama, Kunio (1999) “Adjectives and the Copulas in Japanese,” *Journal of East Asian Linguistics* 8, 183-222.
- 王丹丹・竹沢幸一 (2021) 「コト節をとる難易述語とコントロールについて」, 岸本秀樹編『レキシコン研究の現代的課題』, 25-49, くろしお出版.



キーワード：日本語、統語論、意味論、場所格交替、全体的解釈、部分的解釈、遊離数量詞

【はじめに】本発表では、場所格交替(1)の場所目的語構文(以下 LV)における意味解釈について議論する。

(1) a. 壁にペンキを塗った。(材料目的語構文) b. ペンキで壁を塗った。(場所目的語構文、LV)

一般的に材料目的語構文では部分的解釈が、LV では全体的解釈が出ると言われている (Anderson 1971 他)。ここで、全体的解釈は「目的語で示された範囲(場所)」全体に影響が及ぶ状態であり、部分的解釈はそこに達していない状態であると定義する。しかし、動詞の違いや(奥津 1981)、副詞の追加、複合動詞の形成(Kageyama 1980; Kishimoto 2002; 岸本 2007)などにより、LV でも部分的解釈が出ることが指摘されてきた。本発表では、LV の部分的解釈の事例として未完了の事態(event)を表す場合について議論し、語彙概念構造を採用した先行研究とは異なる新たな分析を提案した上で、遊離数量詞分析への応用を試みる。

【主張】本発表は、全体的解釈が「場所目的語構文で状態変化が完了する出来事(事態)が起こっているときに得られ」と考える(岸本 2007: 98)。岸本は、LV の解釈が全体的解釈に限られないことを、語彙概念構造(以下 LCS)を二通り仮定することで説明した。しかし、本発表では岸本の分析と合わない例を挙げ、語彙に多義性を持たせるのではなく、修飾要素との相互作用から説明できることを示す。

岸本は、LV に使われる動詞が持つ LCS として、完了した変化を規定する演算子 BECOME に加え(2a)、未完了の(部分的な)事態の変化を指定する演算子 BECOME_{part}を導入する構造(2b)を提案した。

(2) a. [EVENT x ACT ON z] CAUSE [BECOME [STATE z BE AT-[PAINTED]]] (岸本 2007: 99)

b. [EVENT x ACT ON z] CAUSE [BECOME_{part} [STATE z BE AT-[PAINTED]]] (岸本 2007: 101)

岸本は、「塗る」を使った LV が部分的解釈と全体的解釈どちらも出せるのは、(2)の LCS を両方持つためであり、「塗り尽くす」は(2a)しか持たないために、解釈が全体的解釈に限られると説明した。しかし、(3)は「塗り尽くす」でも部分的解釈を出すことができる例であるため、岸本の分析では扱えない。

(3) a. ペンキで壁を塗り尽くし始めた。 b. これからペンキで壁を塗り尽くす。

また、他にも動詞修飾要素(副詞・アスペクト表現・複合動詞の後半など)を加えることで、未完了の事態を表し、部分的解釈を出す例が多数存在する((4)下線は筆者が加筆)。他方、(1b)で全体的解釈が出るのは、動詞が完了/過去形で、上記のような修飾要素がなく、完了した事態を表すからだと言える。

(4) a. ジョンは、一時間ペンキで壁を塗った。(岸本 2007: 100) b. ペンキで壁を塗っているところだ。

c. ジョンは壁を塗り忘れた。(Kishimoto 2002: 76)

加えて、部分的解釈を持つ LV においても、全体的解釈は事態の着点として存在する。(5)は、壁が半分しか塗られていない状況(以下状況 S)の許容度が構文によって異なることを示す。状況 S は(5b)の LV にとって、事態の着点にまだ達していない状況であるから、「～おうとする」との共起が可能であると言える。

(5) a. #壁にペンキを塗ろうとしているところだ。 b. ペンキで壁を塗ろうとしているところだ。

以上より、本発表では、事態の進行度合いは本動詞ではなく、動詞修飾要素が決めると主張する。動詞に多義性を求めないため、前述の例文が捉えられ、事態の未/完了に関わらない着点の存在もより扱いやすくなる。また、この分析は「塗る」以外の場所格交替動詞(「飾る」「巻く」「括る」など)にも適応できる。

【遊離数量詞】日本語の数量詞の表出位置が多様であることは広く議論されており、場所格交替にも挿入できる。(6)は、数量詞の位置によって状況 S の許容度が異なる例である。

(6) a. 一時間、壁一枚をペンキで塗った。 b. #一時間、壁をペンキで一枚塗った。

遊離数量詞分析には、数量詞が、名詞句内に基底生成されとする分析と、副詞のように動詞領域に付加する要素として基底生成されとする分析の少なくとも二つが存在する(Nakanishi 2008)。本発表は後者(副詞分析)を支持する。前者の分析では(6b)においても「壁一枚」という基底構造をなすことになり、(6)の意味の違いを説明しにくい(cf. Nakanishi 2007, 2008)。一方副詞分析では、「一枚」が(6a)では名詞修飾要素、(6b)では動詞修飾要素として機能することが容易に予測される。(6a)で着点は「壁一枚」を全体的に塗ることになるが、時間副詞「一時間」は未完了の事態を表せるため、状況 S の解釈が可能である。一方、(6b)の数量詞「一枚」は事態の進行度合いを指定することになる。このため、状況 S が許容されないことを正しく予測する。このように、本発表の主張は遊離数量詞の分析における議論にも貢献する。

参考文献：

- Anderson, Stephen R (1971) On the Role of Deep Structure in Semantic Interpretation. *Foundations of Language* 7: 387–396.
- Kageyama, Taro (1980) The Role of Thematic Relations in the Spray Paint Hypallage. *Journal of Japanese Linguistics* 7(1–2): 35–64.
- Kishimoto, Hideki (2002) Locative alternation in Japanese: a case study in the interaction between syntax and lexical semantics. *Journal of Japanese Linguistics* 17(1): 59–82.
- 岸本秀樹 (2007) 「場所格交替動詞の多義性と語彙概念構造」 『日本語文法』 7(1): 87–108.
- Nakanishi, Kimiko (2007) Measurement in the nominal and verbal domains. *Linguistics and Philosophy* 30(2): 235–276.
- Nakanishi, Kimiko (2008) The Syntax and Semantics of Floating Numeral Quantifiers. In: Miyagawa, Shigeru (ed.) *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 287–319. New York: Oxford University Press.
- 奥津敬一郎 (1981) 「移動変化動詞文」 『国語学』 (127): 60–48.



B-1

現代日本語の同語反復構文「X も X」にみられる程度性と典型性

久保 圭（早稲田大学）

キーワード：現代日本語、日本語学、反復構文、程度性、典型性、評価的意味

本文

本研究では、現代日本語の同語反復構文「X も X」について分析し、その意味的特徴と用法を分類する。「X も X」は、「1つの文の中で同じ語句が繰り返される表現」のひとつであり、このような表現を野呂 (2016) は「反復構文」と呼んでいる。反復構文の特徴として、「医者という医者」という表現が「すべての医者」を意味するように、構成要素の意味の総和から全体の意味を導き出すことができないということが知られている（国広 1998, 野呂 2016）。

本研究の分析対象である「X も X」は、グループ・ジャマシイ (2023) でも取り上げられており、その解説には「同じ名詞を繰り返して、その程度が普通でないことを強調するのに用いる」とある。以下にその例文を挙げる。

- (1) あいつは、うそつきもうそつき、大うそつきだ。
- (2) 彼の両親の家は、山奥も山奥、一番近い駅から車で3時間もかかるところにある。

この「X も X」の使用事例をさらに調査したところ、(1-2)とは異なる特徴をもつ、(3-4)のような使用例がみられた。

- (3) こんな日の美術館はね、静かも静か、さらにもう一つくらい静かって感じで...とにかく静かなのであります。
- (4) 保育園の節分イベントというから、もっとかわいらしい見た目の鬼が来るのかと思っていたんだけど、鬼も鬼だったので驚いたよ。

(3) は、表現の意味としては (1-2) と同様と考えられるが、X に入っているのが名詞ではなく形容動詞語幹の例である。先行研究で述べられている反復構文を含め、管見の限り、形容動詞語幹を扱う反復構文に関する記述はほぼ見られない。また、(4) は (1-2) のように程度の甚だしさを表す用法ではなく、典型性を表す用法であると考えられる。「あいつはとてもうそつきだ」「今日の美術館はとても静かだ」という文は容認されるが、(4) の状況で「あの鬼はとても鬼だ」とは言えないことから、(4) が程度に関わる用法ではないことがわかる。この (4) の用法に近いものとして、野呂 (2016) が分析している「N らしい N」が挙げられる。同構文の第1の用法の意味は、〈N カテゴリーに属する成員の中で、理想例・ステレオタイプ・典型例に当てはまると、話者が認めるもの〉と記述されており、典型例に該当する事例においては評価的意味が感じられないと結論づけられている。しかし、「X も X」の (4) の用法においては、典型例を表すものの評価的意味が確認できる。

以上において、「X も X」は (i) 名詞以外にも拡張し得る反復構文であり、(ii) 程度の強調と典型性の二つの用法を持ち、(iii) 典型性を表す用法において評価的意味を付与するという点で〈N らしい N〉と弁別されることを示した。

参考文献：

- 国広哲弥（1998）『理想の国語辞典』大修館書店。
グループ・ジャマシイ編著（2023）『改訂版日本語文型辞典』くろしお出版，p. 498.
堤良一ほか（2021）「評価的意味と文法現象」『第163回日本言語学会大会予稿集』pp. 302-303.
野呂健一（2016）『現代日本語の反復構文：構文文法と類像性の観点から』くろしお出版。



キーワード：日本語、形式意味論、「だけ」、焦点化演算子、作用域

日本語のとりたて詞「だけ」には、それによって取り立てられた要素以外のものを全て否定するという排他的読みを出す機能がある。「だけ」は伝統的に英語の *only* と同じように焦点化演算子として扱われ、作用域をもつ他の要素との共起により曖昧性が生じることが観察されている。本発表では「だけ」について、焦点化演算子として作用するもののほかに、焦点化演算子の機能を全く持たないものが語彙として存在するというを示す。

(1)の文脈のもとで(2)の例文を見てみる。例文(2)は曖昧で、(3a-b)に示される2通りの解釈が可能である。従来の分析(Rooth 1985, 1992 他)に従うと、焦点化演算子である「だけ」が(4a-b)のような異なる *alternative set* に作用し、「太郎がウォッカを飲んだ」こと以外を排除することで2通りの意味が捉えられる。

(1) パーティーで、焼酎、ジン、ウイスキー、ウォッカの4種類の酒がそれぞれ、水割り、ソーダ割り、ストレートで用意された。

(2) 太郎はウォッカだけを飲んだ。

(3) a. 太郎はウォッカを飲み、他の酒は何も飲まなかった。(一種類読み)

b. 太郎がウォッカを他のものと混ぜずに飲んだ。(ストレート読み)

(4) a. {太郎がウォッカを飲んだ, 太郎が焼酎を飲んだ, 太郎がジンを飲んだ, 太郎がウイスキーを飲んだ}

b. {太郎がウォッカを飲んだ, 太郎がウォッカの水割りを飲んだ, 太郎がウォッカのソーダ割りを飲んだ}

しかし以下に示すように、ストレート読みを出す「だけ」は、他の作用域を持つ要素と共起しても曖昧性を示さない。一種類読みの元、例文(5)は(6a-b)に示される2通りの解釈を持つのにに対し、(7)-(8)に示されるように、ストレート読みの元、「だけ」は「-える」よりも広い作用域を取る解釈を持たない。

(5) 太郎は(4種類の酒の中で)ウォッカだけが飲める。(一種類読み)

(6) a. 太郎が飲めるのは(4種類の酒の中で)ウォッカだけだ。その他の酒は飲めない。(only > can)

b. 太郎は他の酒を飲まずにウォッカだけ飲む、ということが出来る。(can > only)

(7) 太郎は(酒に強いので)ウォッカだけが飲める。(ストレート読み)

(8) a.*太郎が飲めるのはウォッカのストレートで、何かで割ったものは飲めない。(only > can)

b. 太郎はウォッカをストレートで飲む、ということが出来る。(can > only)

同様に一種類読みでは「だけ」が否定語「ない」よりも広い作用域を持ち排他的な解釈が出るのに対し、ストレート読みでは「だけ」が「ない」よりも広い作用域を持つ解釈が存在せず、排他的読みが出ない。

(9) a. 太郎は4種類の酒の中でウォッカだけを飲まなかった(*し、ウイスキーも飲まなかった)。

b. 太郎はソーダ割りは飲んだがウォッカだけを飲まなかった(し、ウォッカの水割りも飲まなかった)。

このように、ストレート読みを出す「だけ」は他の作用域を持つ要素との間に作用域の相互作用を示さず、これはストレート読みの「だけ」が焦点化演算子ではないと考えれば、当然の帰結として説明できる。

また、(10)のように分裂文の焦点位置に「だけ」句がくると(11b)のようなストレート読みが出なくなり、これもストレート読みを出す「だけ」は焦点化演算子ではないことを示唆している。

(10) 太郎が飲んだのはウォッカだけだ。

(11) a. 太郎が飲んだのはウォッカだけで、他の酒は飲んでいない。(一種類読み)

b.*太郎が飲んだのはウォッカ単独で、何かで割ったものは飲んでいない。(ストレート読み)

分裂文の焦点位置にくる要素は焦点化が強制され、「だけ」句が焦点位置にくると排他的意味が強く出るようになる(Tomioka 2017)。ストレート読みが焦点化演算子「だけ」により(4b)で示される *alternative set* をつくることで得られるのであれば、例文(10)が(11b)の排他的意味を持たないことが説明できない。例文(10)にストレート読みがないということは、ストレート読みを出す「だけ」は *alternative set* に作用する焦点化演算子として機能している訳ではないということを示している。本発表では後者は名詞句を項にとり名詞句によって表されているものが「最大限」であるという意味を表す語であると分析する(Tomioka 2017 を参照)。

本論文の分析が正しければ、「だけ」には2種類あり、焦点化演算子であり排他的意味を出す「だけ」のほかに焦点化演算子の機能を持たないものも存在することになる。焦点化演算子としての特徴から、伝統的に統語論の分野で、「だけ」は任意の要素の統語構造上の位置や振る舞いを調べるために使われてきたが、研究に用いる際には両者の違いを念頭に置き、適切に区別して使っていく必要がある。



参考文献：

- Rooth, Mats (1985) *Association with Focus*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Rooth, Mats (1992) “A theory of focus interpretation” *Natural Language Semantics* 1, 75–116.
- Tomioka, Satoshi (2017) “Maximality mimics exhaustivity: A case study of *dake* ‘only’ in Japanese” Poster presented at GLOW in Asia XI, University of Singapore, Singapore.



B-3

右側主要部の規則から見た「お-」派生語:再登録アプローチに基づく転換分析

西牧和也

キーワード:

【対象言語】日本語 【分野・研究方法】形態論

【その他】接頭辞; 意味変化; 右側主要部の規則; 品詞転換; 再登録アプローチ

接頭辞「お-」は、一般的に、丁寧語や美化語を派生するとされている。しかし、三喜田 (2003) によると、その添加が、基体の意味変化をもたらす場合があるという。例えば、「しゃれ」は、言葉遊びを意味するが、「お-」が添加し、「おしゃれ」になると、身なりなどによく気を使う様子というような意味に変化する。更に、興味深いのは、その意味変化に合わせて、統語範疇も変化している場合が見られることである。つまり、一見すると、「お-」が、派生語全体の統語範疇を決定しているような事例が存在するのである。例えば、(1a) では、「お-」が、名詞に添加した結果、名詞修飾の環境で、接尾辞「-な」を伴う形容名詞が派生されている (影山 1993)。

(1) a. シャベリ→おしゃべりな人; シャレ→おしゃれな人; 荷物→お荷物な人

b. *(お)しゃべりな人; *(お)しゃれな人; *(お)荷物な人

(1b) にある通り、(1a) の基体は、「お-」がないと、形容名詞として機能することはできない。このことからわかるように、(1a) では、「お-」が、統語範疇の決定に与していることが伺える。

しかし、このような分析は、右側主要部の規則 (Williams 1981; Righthand Head Rule) にとって、問題となる。この規則は、右側要素が、形態的に複雑な語の主要部になるという語構造の一般的特性を捉えたものである。この一般化は、派生語の左側要素となる接頭辞は、主要部にはならず、その帰結として、派生語全体の統語範疇を決定することはないという含意を持つ (Scalise 1988)。しかし、接頭辞のなかには、例外的に、その決定に関与するとされるものがあり、このような例外的事例を、どのように扱うべきかが、問題とされてきた (Nagano 2011, Namiki and Kageyama 2016)。

以上の考察を踏まえ、本発表では、品詞転換に対する再登録アプローチ (Lieber 1992; relisting approach) に基づく分析を提案し、(1a) のような事例は、右側主要部の規則に対する反例とはならないことを示す。より具体的には、(1a) のような場合、「お-」を含む派生語全体が、品詞転換の適用を受け、基体とは異なる統語範疇を付与されていると考えられるのである。再登録アプローチによると、品詞転換とは、ある表現が、異なる統語範疇としてレキシコンに再登録される現象ということになる (Lieber (1992: 159))。従って、このアプローチでは、レキシコンへの再登録が、品詞転換の必要条件となる。ここで重要なのが、「お-」の添加は、基体の意味変化を伴う場合があるという点である。まず、この意味変化が、レキシコンへの再登録を引き起こすと考えられる。つまり、「お-」の添加により、新たな意味を帯びると、その派生語は、そのようなものとして、レキシコンに再登録されることになる。この意味的な再登録と同時に、当該の派生語は、新たな統語範疇として、レキシコンでの再登録を受けるものと分析することができる。この分析によれば、(1a) のような事例において、「お-」は、範疇決定を担うものではなく、品詞転換の必要条件となるレキシコンへの再登録を引き起こす要因として捉えることができる。従って、当該の事例は、右側主要部の規則に対する反例とはならないと結論されることになる。



参考文献：

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房, 東京.

Lieber, Rochelle (1992) *Deconstructing Morphology: Word Formation in Syntactic Theory*, University of Chicago Press, Chicago.

三喜田光次 (2003) 「語の意味に関わる接頭辞「お(ご)」について」『外国語教育: 理論と実践』 第29巻, 21-35, 天理大学.

Nagano, Akiko (2011) “The Right-Headedness of Morphology and the Status and Development of Category-Determining Prefixes in English,” *English Language and Linguistics* 15, 61-83.

Namiki, Takayasu and Taro Kageyama (2016) “Word Structure and Headedness,” *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*, ed.by Taro Kageyama and Hideki Kishimoto, 201-235, De Gruyter Mouton, Berlin.

Scalise, Sergio (1988) “The Notion of ‘Head’ in Morphology,” *Yearbook of Morphology 1988*, ed. by Geert Booij and Jaap Marle, 229-245, Foris, Dordrecht, Holland.

Williams, Edwin (1981) “On the Notions “Lexically Related” and “Head of a Word”,” *Linguistic Inquiry* 12, 245-274.



B-4

「好きになりやすい」を述語とする文の格付与について

山口洋輝(学習院大学大学院)

a.日本語、b.理論言語学、c.格付与

1. 問題提起 本研究では、(1)のような「好きになりやすい」を述語とする文の格標示について論じる。

(1) a. 太郎が留学生{??が/を}好きになりやすい。

b. *太郎に留学生{が/を}好きになりやすい。

本研究では主に2つの問題点について論じる。

第一に、「好きだ」を述語とする単文における目的語は(2)のように主格標示が自然で対格標示は不自然となるが、(1a)では対格目的語の方が自然で、主格目的語は不自然となる。

(2) 太郎は{カレーが/??を}好きだ。

第二に、述語末尾に「やすい」を含む難易文では(3)のように与格主語が可能となるが、(1b)では不可能である。

(3) 赤ちゃんに離乳食が食べやすい。

以上の問題点について説明するため、本稿では(1)のような文の構造及び日本語の格付与理論について次のように主張する。①「好きだ」は内部にフェイズ(cf. Chomsky2001)を形成する動詞句を有する。②日本語ではTPを基本的単位として依存格理論(DCT)(cf. Marantz1991)に基づく格付与が行われるが、TP完成以前にspell-outされた領域は格付与操作から不可視となり、当該領域内で格付与が行われる。

2. 理論的前提 本研究では、統語構造においてvP及びCPがフェイズを形成し、上位のフェイズが完成した時点で下位のフェイズ全体がspell-outされその後の統語操作から不可視になると考える(cf. 斎藤 2017)。

また、本研究ではAoyagi(2004)に基づき日本語の格はDCTに則って付与されると仮定する。Aoyagiによれば、TPにおいて無標の(すなわち格を持たない)名詞句が他の無標の名詞句にc統御されるとき依存格(対格)を付与され、残る無標の名詞句はデフォルト格(主格)を付与される。また、日本語の主格、対格、与格は次のような順序で付与される。①内在格として与格が付与される。②依存格として対格が付与される。③デフォルト格として主格が付与される。

以上のような先行研究における理論的仮定を踏まえた上で分析を行う。

3. 分析 本研究では、(1)の文は(4)のような「好きだ」の内部にvPを持つ構造を成すと考えられる。

(4) [TP [AP [vP1 [VP1 [AP [vP2 太郎[VP2 留学生 好き]v]だ]なる]v]やすい]]

まず、与格主語に関する問題について論じる。2節で論じたフェイズに関する仮定を踏まえ、「なる」を主要部とするvP1が完成した時点で「好きだ」内部の動詞句フェイズvP2全体がspell-outされ、その後の統語操作から不可視になるとする。また、難易文における与格主語は述語に含まれるヤスイから内在格として与格を付与されるもので、主語がヤスイから可視でなければ適切に格付与が行われないとする。(4)の構造では、ヤスイが派生に参与した時点でvP2内の要素は既にspell-outされヤスイから不可視であるため、与格付与が適切に行われない。よって(1b)が非文となる。

他方、(3)の文は(5)のような構造を成すため与格主語及び主格目的語が容認されることが考えられる。

(5) [TP [AP [vP 子供[VP 離乳食 食べ]v]やすい]]

(5)の構造では、ヤスイが派生に参与した時点でvPがspell-outされていないため可視であり、主語への与格付与が可能である。その後TPを格付与領域とする格付与が行われる時点で「離乳食」が唯一の無標の名詞句となるため、デフォルト格として主格が付与され与格主語-主格目的語パターンが形成される。

次に、(1a)において容認される対格目的語について論じる。TPの完成以前にvP2がspell-outされるとする仮定を踏まえ、TPにおける格付与操作からvP2内の要素は不可視であるとする。本研究では、この場合vP2内でDCTに基づく格付与が生じると考える。すなわち、vP2内で「留学生」は依存格として対格を、「太郎」はデフォルト格として主格を付与される。(1a)における格付与は以上のようなプロセスで行われるため、主格目的語は不自然となる。

本研究の分析を間接的に支持する現象として、「好きだ」を他の形容詞に置き換えた文について見る。

(6) 学生がテストの結果{が/*を}気がかりになりやすい。

(7) 学生が席替え{が/*を}楽しみになりやすい。

(6)及び(7)に含まれる形容詞「気がかりだ」及び「楽しみだ」は(1)における「好きだ」とは異なり内部構造に動詞句フェイズを含まないため、対格標示が容認されないものと考えられる。

4. 今後の展望 本研究の分析によって「好きになりやすい」を述語とする文の格標示についての説明が可能となるが、「好きだ」を述語とする単文や(6)(7)のような文で二重主格構文が形成される場合の格付与については更なる考察が必要である。



参考文献

- Aoyagi, Hiroshi(2004) “Morphological Case Marking as Phoneticization,” Proceedings of the 2004 LSK International Conference vol. 1, 50-71, Linguistic Society of Korea.
- Chomsky, Noam(2001) “Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Marantz, Alec(1991) “Case and licensing,” In *Proceedings of the 8th Eastern States Conference on Linguistics (ESCOL)* eds. by German Westphal, Benjamin Ao, and Hee-Rahk Chae, 234-253. CLC Publications, Ithaka.
- 斎藤衛(2017)「フェイズと転送領域—照応形束と A 移動の局所生からの考察—」慶應言語学コロキウム資料, 慶應義塾大学.



B-5

ブヌン語の一人称単数代名詞 *zaku* は「斜格」なのか

—3 方言対照からみるその機能と制限—

野島本泰 横林美祝

nojima.motoyasu@gmail.com, minori.yokobayashi@gmail.com

キーワード：ブヌン語、オーストロネシア語族、人称代名詞、斜格、*zaku*、方言比較

ブヌン語（台湾、オーストロネシア語族）において、一人称単数代名詞 *zaku* およびその系列に属する諸形式は、「一語文の唯一の要素として現れる形」であるにもかかわらず、多くの先行研究で「斜格」と呼ばれてきた（土田 1992, 黄・施 2018, Li 2018）。本研究では、北部方言（卓社方言）、中部方言（巒社方言）、南部方言（郡社方言）における一人称単数代名詞の対照を行い、帰納的分析を用いて「斜格」の用法とその制限について再検討を行う。

本研究では、(1)民話資料を主たるデータソースとし、補完的に、(2)母語話者の内省報告、(3)(a)民話などの文字資料、(b)新約聖書の5種類の翻訳、を用いる。これにより、「斜格」の使用実態を帰納的に整理し、形態論的および統語論的観点から詳細な記述、分析を行う。これを通じて、「斜格」に関する従来の理解における不備を批判的に再評価することを目指す。

本研究は、ブヌン語の3つの方言における「斜格」の形態論および統語論上の機能として、次のものがあることを明らかにする：

- A. 一語文の唯一の要素として用いる。(3方言共通)
- B. 述語として用いる。(3方言共通)
- C. 派生語の語基として用いる。(3方言共通)
- D. (卓社方言と、巒社方言の一部に限り) 行為者として用いる。
- E. (巒社方言に限り) 対象として用いる。
- F. 場所（例「私から借りる」「私を訪ねる」）として用いることができる方言は確認されない。
- G. 所有者（例「私の母」）として用いることができる方言は確認されない。

以上の機能が観察された。3方言により多少の違いはあるものの、総合すると、「斜格」として典型的に想像されるものとはかけ離れた機能がみられる（A, B, F）。

また、「斜格」であるか否かを議論するには、他の格との関係も詳しく検討する必要がある。今後の課題としたい。

本発表は、消滅の危機に瀕する言語の貴重な記述であると同時に、一人称単数と、その他の代名詞との非対称を通言語的に考えるうえで貴重な事例研究でもある。



参考文献

- de Busser, Rik L. J. 2009. Towards a grammar of Takivatan Bunun: Selected topics. PhD dissertation, La Trobe University.
- Jeng, Heng-hsiung. 1969. A preliminary report on a Bunun dialect as spoken in Hsinyi, Naut'ou, Taiwan. Mimeo. Taipei: National Taiwan University.
- Jeng, Heng-hsiung. 1977. Topic and Focus in Bunun (Institute of History and Philosophy Special publication 72). Taipei: Academia Sinica.
- 何汝芬, 曾思奇, 李文甦, 林青春. 1986. 『高山族語言簡誌 (布嫩語)』民族出版社.
- 黃慧娟、施朝凱. 2018. 『布農語語法概論』第二版, 原住民族委員會, 新北市,
- 黃美金. 1997. 「高雄縣的布農語」『高雄縣南島語言』, 351-409 頁。高雄縣: 高雄縣政府.
- Li, Lilian Li-ying. 2018. A grammar of Isbukun Bunun. PhD dissertation. Hsinchu: National Tsing Hua University.
- 李俐盈. 2022. 『布農語詞類及其教學』(台灣南島語言叢書 III), 財團法人原住民族語言研究發展基金會.
- Li, Paul Jen-Kuei. 1988. A comparative study of Bunun dialects. Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica 59(2): 479-508.
- 李壬癸. 1997. 南投縣信義鄉的布農南部方言。『高雄縣南島語言』, 300-350 頁。高雄縣: 高雄縣政府.
- 林太, 曾思奇, 李文甦, 卜袞・伊斯瑪哈單・伊斯立端. 2001. 『Isbukun 布農語構詞法研究』讀冊文化.
- Moriguchi, Tsunekazu. 2001. Northern Bunun Texts No.1. 森口恒一(編). 2001. 「フィリピン北部・台湾中南部の少数民族の民間伝承に関する言語学的・人類学的調査研究研究成果報告書」(平成 11 年度～12 年度科学研究費補助金基盤研究 A[2])
- Moriguchi, Tsunekazu. 2005. Northern Bunun Texts No.2. 森口恒一(編)(2005) 「台湾・北部フィリピンの少数民族の口頭伝承に関する言語学的・人類学的調査研究研究成果中間報告書」(平成 15 年度～18 年度科学研究費補助金基盤研究 B), 167-250 頁.
- Moriguchi, Tsunekazu. 2007. Northern Bunun Texts No.3. 森口恒一(編)(2007) 「台湾・北部フィリピンの少数民族の口頭伝承に関する言語学的・人類学的調査研究研究成果報告書」(平成 15 年度～18 年度科学研究費補助金基盤研究 B), 1-80 頁.
- 森口恒一. 2023. 『四語對照台灣卓群布農語: 三十年採錄的傳承・習慣・歷史・生活』台北: 原住民族語言研究發展基金會.
- 野島本泰. 2015. 「ブヌン語南部方言の第二位置疑問小詞 bis」大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬(編)『地球研言語記述論集』7: 151-169.
- 小川尚義, 浅井恵倫. 1935. 『原語による台湾高砂族伝説集』刀江書院.
- 臺中州警務部. 1932. 『巒蕃ブヌン語集』.
- 土田滋. 1992. 「ブヌン語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典第 3 卷』三省堂, 731-734 頁.
- 余榮德『丹群布農族語詞句典』花蓮縣卓溪鄉: 一串小米族語獨立出版工作室.
- 齊莉莎. 2000. 『布農語參考語法』台北: 遠流出版.
- 張玉發(編). 2016. 『巒群布農語簡易詞典』花蓮縣卓溪鄉: 一串小米族語工作室.



C-1

漢語数詞＋助数詞における促音化のゆれとハ行子音の交替

渡部直也

【キーワード】日本語 音韻論 最適性理論 促音化 ハ行子音 ゆれ

本発表は、日本語の漢語数詞における促音化のゆれについて、助数詞先頭のハ行子音にも着目しながら考察するものである。二字漢語の前部要素では一定の条件下で促音化が生じるが（那須 1996 など）、数詞＋助数詞の場合は(1)に示すようなゆれが見られる（cf. 館野 2012）。

(1) a. hakkai ~ hateikai 「8 回」、 「8 階」

b. happoN ~ hateihoN 「8 本」 ; roppai ~ rokuhai 「6 杯」、 「6 敗」

なお(1b)のように、助数詞の先頭がハ行子音の場合、促音の直後では半濁音[p]が、母音挿入が生じる場合は清音[h, ɸ, φ]が現れる。先行研究では、ハ行子音の基底表示を/p/とし、子音の直後以外で[p]の表出を禁止する制約（No-P: Ito and Mester 1999 など）によって清音が生じると分析されてきた。しかしながら、数詞「3」や「4」の直後における(2)のような半濁音化のゆれについては、同制約の関与しない環境であり、説明することができない。

(2) sampeN ~ saNheN 「3 編」 ; jompai ~ joNhai 「4 敗」

本発表ではまず、(1)のようなゆれを引き起こす数詞特有の性質として、他の漢語との統語的構造の違いを考える（cf. Huang 2017）。すなわち、他の漢語では両要素が一まとまりの意味を持つようになるのに対し、数詞は自身の意味機能を自立的に有しており、一方で助数詞はあくまでも数えるための機能語であって自立した要素ではない。このため、数詞については元の音形を保持させる、(3)のような特有の忠実性制約が仮定できる。

(3) IDENT-C/NUM: 数詞において、子音を変更してはならない。

この制約の優先順位が流動的であるためにゆれが生じると考えられ、母音挿入に対する制約（DEP-V: cf. 那須 1996）よりも優先される場合、促音化が回避される。なお、数詞末尾の子音と助数詞先頭の子音が同一の場合、(3)に違反せず促音化が可能となるが、この場合は母音挿入が生じにくいと考えられる（例：「8 着」、「6 回」）。

次にハ行子音の交替については、基底表示を/p/ではなく/ɸ/だと提案する。通言語的にも稀な[ɸ]の表出は[u]の直前以外では避けられ、摩擦性の保持によって[h]ないし[ɸ]が現れることとなる。すなわち、No-pを仮定する必要はなくなる。一方で促音化が生じる場合は、日本語で一般的に避けられる[h, ɸ]の重子音（cf. Kawagoe 2015）に対する有標性制約が摩擦性に対する忠実性制約よりも優先され、[p]が出現すると考えられる。(4)に「8 本」の分析例を提示する（紙幅の都合上、[ɸ]の排除については割愛する）。

(4) a. /hate-ɸoN/ → [hateihoN]

/hate-ɸoN/	*hh	IDENT-C/NUM	DEP-V	IDENT (cont)	IDENT (place)
hahhoN	*W	*	L	*	**
happoN		*W	L	**	*
☞ hateihoN			*		*
hateipoN			*	*W	L

b. /hate-ɸoN/ → [happoN]

/hate-ɸoN/	*hh	DEP-V	IDENT (cont)	IDENT (place)	IDENT-C/NUM
hahhoN	*W		*L	**	*
☞ happoN			**	*	*
hateihoN		*W	L	*	L
hateipoN		*W	*L	L	L



【参照文献】

- Huang, Chuyu (2017) Accent of Sino-Japanese Determiner Compounds. 『音韻研究』 20: 47–54.
- Ito, Junko and Armin Mester (1999) The phonological lexicon. In: Natsuko Tsujimura (ed.) *The Handbook of Japanese linguistics*, 62–100. Oxford: Blackwell.
- Kawagoe, Itsue (2015) The phonology of *sokuon*, or geminate obstruents. In: Haruo Kubozono (ed.) *Handbook of Japanese phonetics and phonology*, 79–120. De Gruyter Mouton.
- 那須昭夫 (1996) 「二字漢語における促音化現象—最適性理論による分析」『音声学会会報』 213: 27–40.
- 館野由香理 (2012) 「現代日本漢語におけるハ行子音の半濁音化について」『文教大学文学部紀要』 26: 23–51.



キーワード：日本語東日本変異，音韻論，喉頭音源対立の語彙表示

言語間の子音特性の相違は，典型的に語頭位置に現れる阻害音の特性を比較することで論じられてきた。これは，多くの言語で語頭が韻律上の強位置とされ，弱位置（語末や母音間）に比べて音声変異が生じにくいという事実に基づいている。この傾向を背景に，類型論的研究では，語頭閉鎖音の喉頭音源対立を，VOT 値（閉鎖音の破裂から有声化開始までの時間: Lisker & Abramson 1964），閉鎖区間の低周波エネルギー減衰の有無，F1 カットバックの有無など，多様な音響的属性を参照し議論してきた。

上記の現象を音韻的に記述・分析する素性理論のひとつであるエレメント理論（Element Theory: Harris 1994, Backley 2011）では，閉鎖音の喉頭音源対立を [ʔ]（閉鎖性），[H]（擦性/有気性），[L]（阻害有声性）といった素性の組み合わせで表示する。この理論では，閉鎖音の基盤構造として [ʔ] と [H] が指定され，(a) [ʔH] は音声的に無気無声閉鎖音（典型的に 0VOT）として音声的に具現化される。そして，これに [L]（フォントが大ききものは，音源対立上で能動的なものを示す）が加わった (b) [ʔHL] は無気有声閉鎖音（典型的に -VOT）に，また [H] が加わった (c) [ʔHH] は有気無声閉鎖音（典型的に +VOT）として音声的に表出する。

この枠組みでは，有声・無声の対立をもつ言語は，有気性言語（例：英語，中国語）と有声性言語（例：スペイン語，フランス語）の二種に分けられる。前者は (a) と (c)，後者は (a) と (b) の対立を示す。日本語は従来，Shimizu (1996) による (a) と (b) の対立を示す分析や Vance (1987) の有声性の能動性の分析から有声性言語とされてきたが，本研究では若年層母語話者を対象にこの説を再検証した。

103 名の参加者（平均 20.8±2.4 歳；東北 44 名，関東 31 名，中部 21 名，その他 7 名）の日本語の語頭閉鎖音の VOT を計測し，無声子音 (/p,t,k/) と有声子音 (/b,d,g/) の平均 VOT 値による階層的クラスタ分析を行った結果，東北出身者が大勢を占めるクラスタ 1（無声/有声の平均 VOT: 59.3/15.1ms），関東・北陸・東北出身者が構成するクラスタ 2（42.2/8.9ms），関東・中部出身者が大勢を占めるクラスタ 3（42.2/-17.7ms）に分けられた。これらのうち，クラスタ 1 においては，(a) と (c) の対立を示す地域的変異（クラスタ分析の「東北」）が示唆された。この知見は高田 (2011) の指摘と一致しつつも，その分布には一部相違が見られるが，大きく複数のクラスタに分類できる点は共通している。重要なのは，この結果が，有気性言語と有声性言語という類型的区分が一言語内部にも併存し得ることを示す点である。この事実を説明するには，音韻表示の観点からの再考が必要である。すなわち，異なる喉頭音源対立特性が地理的変異として産出され，かつそれぞれの変異をもつ話者間で相互理解が阻害されない状況を，音韻的にどのように表示するかが課題となる。

本研究では，閉鎖音の語彙表示として，(b) と (c) という第 3 の組み合わせ（表 1a）が日本語母語話者間で共有されていると提案する。この組み合わせは，無声性（[H]）と有声性（[L]）の両方が音韻過程の引き金となる潜在的構造であると言える。そして，(b) [ʔHL] の [L] を抑制して [ʔH] (/d/) とするのが表 1b の変異，他方 (c) [ʔHH] の [H] を抑制し [ʔH] (/t/) とするのが表 1c の変異である。したがって，日本語内部の地域差は，単一の基底構造からの抑制規則の差異として説明できる。本研究は東北・関東・中部地方を中心とした結果であり，西日本を含めた検証が今後必要である。

表 1 エレメントによる閉鎖音の音韻表示（構音位置の表示を除く）

a. 語彙表示	b. 有気性体系（東北）	c. 有声性体系（関東・中部）	
/t/ /d/	/t/ /d/	/t/ /d/	
[ʔ H] [ʔ H]	[ʔ H] [ʔ H]	[ʔ H] [ʔ H]	→ 基盤部
[H] [L]	[H] [L]	[L]	→ 音源対立部
	+VOT (59.3) 0 VOT (15.1)	0 VOT (42.2) -VOT (-17.7)	



参考文献：

- Backley, Phillip. 2011. *An Introduction to Element Theory*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Harris, John. 1994. *English Sound Structure*. Oxford: Blackwell.
- Lisker, Leigh & Arthur S. Abramson. 1964. "A cross-language study of voicing in initial stops: acoustical measurements", *Word* 20: 384-422.
- Shimizu, Katsumasa. 1996. *A Cross-language Study of Voicing Contrasts of Stop Consonants in Asian Languages*. Tokyo: Seibido.
- 高田三枝子 2011. 『日本語の語頭閉鎖音の研究: VOT の共時的分布と通時的変化』 東京: くろしお出版.
- Vance, Tomothy. 1987. *An Introduction to Japanese Phonology*. New York: State University of New York Press.



キーワード：日本語、音声学、社会言語学、尻上がりイントネーション

本発表の目的

本研究の目的は 1970 年代以降に若者ことばとして広まった尻上がりイントネーションが現代の若者にも使用されているのか、またその当時に若者だった年齢層が現在も使用するのか調査することである。尻上がりイントネーションとは「文節末の上昇下降調の多用」(郡 2003：125)であり、「個人差もあるが、特に 1970 年代あたり以降に生まれた世代では、日常的な言い方になっている」(郡 2018：294)、「中年層以下の日常会話に定着している」(郡 2020：183)、『尻上がり』イントネーションは、現代日本人だったら知っている現象で、留学生が日本語のあたりまえの話し方と思い込むほど(若い世代に)普及している」(井上 1997：147)と述べられている。

尻上がりイントネーションまたは文節末のイントネーションについての先行研究は散見されるが(小磯 2014, 郡 2016, 郡 2018)、多くの場合分析の対象となるデータは会話、学会発表、スピーチから収集されている。そこで本研究では 6 コマ漫画の即興描写タスクによる音声データをもとに、尻上がりイントネーションの使用状況について考察する。

分析データと方法

本研究の分析には朝日他(2025)にて収集された音声データを使用した。20 名の東京語話者(若年層男女各 5 名・平均年齢 23.7 歳、高年層男女各 5 名・平均年齢 54.8 歳)に対し、6 コマ漫画を見ながら即興で描写するというタスクを依頼した。録音は各被験者 2 回実施されたため、より流暢である 2 回目の音声进行分析に用いた。文節末のイントネーションの有無、ある場合は型の種類を知覚によって判断した。イントネーションの型は疑問型上昇調・強調型上昇調・上昇下降調・平坦調・急下降調・長い無音調・自然下降だけの短い無音調に分類した。話者を高年男性・高年女性・若年男性・若年女性の 4 つにグループ分けし、集計を行った。

分析結果

分析の結果を表 1 に提示する。表中の「全体」は 4 グループすべてを合計した時の使用率である。尻上がりイントネーションを使用しているのは高年女性、若年男性・若年女性の 3 グループであり、高年男性での使用は確認されなかった。若年女性では 5 名中 3 名による尻上がりイントネーションの使用が確認された。

表 1 文末イントネーションのグループ別イントネーション型使用率(%)

	疑問	強調	上昇下降	平坦	急下降	長い無音	自然下降
高年男性	0.0	20.6	0.0	0.0	0.0	0.0	79.4
高年女性	0.0	54.5	2.5	0.0	0.0	3.3	39.7
若年男性	0.0	59.1	0.8	0.8	0.0	1.5	37.9
若年女性	2.6	59.5	9.8	0.7	1.3	3.9	22.2
全体	0.8	50.1	3.7	0.4	0.4	2.3	42.3

考察

井上(1997：149)は尻上がりイントネーションの広がり方について、「幼いまたは若いときに身につけ、使い続ける場合。年が経って若い人が増えれば増えるほど広がる。『いい年になって』ふさわしくないと考えて捨て去るとしたら、使用者の数は頭打ちになる」と述べており、上記の結果からこの現象が起きているのではないかと考えられる。もし年齢が上がるにつれ、自身の社会的属性に適切なイントネーションを選択するという現象が起きているならば、尻上がりイントネーションは全世代に広がるというよりも、若者にのみ使用されることが特徴だといえる。しかしながら、時を経ても若者のみに使用されるという点では、従来のように常に新しいものが登場し、古いものは使用されなくなるという若者ことばとは性質が異なり、非常に興味深い。

また先行研究で示された上昇下降調の出現率は、研究発表・スピーチが 6.31%(小磯 2014)、会話音声では 38%(郡 2016)であるのに対し、本研究の絵描写タスクでは全体で 3.7%である。このことを踏まえると尻上がりイントネーションの出現にはレジスターとの関連が見込まれる。聞き手からの反応や発話をあまり期待・要求しないレジスターでは、尻上がりイントネーションは使用されにくい可能性がある。井上(1994：10)

『順序だてて話したい』『きちんとまとめて話そうという意識』でも使われる」と記述している。井上(1997)では尻上がりイントネーションは談話において注目要求・同意要求の機能を持ち、話順を確保する機能があると述べている。このことから使用場面や語用論的機能などの分析も必要になるだろう。

今後は音声データの数を増やすとともに多様なレジスターの音声を分析することで、現在における尻上がりイントネーションの機能やイントネーションの広まり方の記述に貢献できるだろう。

参考文献

- 朝日祥之・高野照司・太田一郎・松田謙次郎(2025)「現代日本語の音調句生成の変異とその制約条件」
日本言語学会第 171 回大会.
- 井上史雄(1994)『『尻上がり』イントネーションの社会言語学』佐藤喜代治(編)『国語論究第 4 集 現代
語・方言の研究』明治書院, 1-29.
- 井上史雄(1997)「イントネーションの社会性」国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫(編)・杉藤美代子監修『日
本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂, 143-168.
- 小磯花絵(2014)「日本語自発音声における複合境界音調と統語構造との関係」『音声研究』18-1 : 57-69.
- 郡史郎(2003)「イントネーション」上野善道(編)『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』朝倉書店, 109-132.
- 郡史郎(2016)「間投助詞のイントネーションと間投助詞的イントネーション：型の使い分けについて」
『言語文化研究』42 : 61-84.
- 郡史郎(2018)「間投助詞のイントネーションと間投助詞的イントネーション：使用例の検討と、尻上が
りイントネーション、半疑問イントネーションの考察」『言語文化研究』44 : 283-306.
- 郡史郎(2020)『日本語のイントネーションーしくみと音読・朗読への応用』大修館書店.



C-4

日本語大阪方言における補文標識「の」「ん」「のん」がかかわる モダリティ表現について ―共通語との対照の観点から― 篠原日菜子（関西外国語大学大学院博士前期課程）

キーワード：日本語、大阪方言、共通語、形態論、統語論、意味論、補文標識、モダリティ

日本語の共通語における補文標識「の」の代表的な先行研究として、橋本（1990）と野田（1995）を挙げることができる。前者は、「の」補文における意味規則について、主文と補文が表す出来事の間に意味的な〈密接性〉があることを、後者は、「の」補文が用いられる場合の主文における動詞の条件について、補文が表す事態の発生に合わせて行われる動作であることをそれぞれ論述している。また、Hiraiwa and Ishihara (2002)、栗原（2010）、赤楚（2018）などは、生成文法理論の立場から「の」が有する素性に着目し、finiteness（定性）を主要部とした補文標識であることを支持する議論を展開している。さらに、野間（2014）は、日本語の共通語における補文標識「の」に対応する大阪方言における補文標識には「の」「ん」「のん」の3形式が存在することを指摘した上で、それらの音韻的条件、及び接続する要素の品詞上の適格性について言及している。しかしながら、特に大阪方言については、形態音韻論的な若干の考察しかなされておらず、統語論及び意味論に重点を置いた考察は不十分である。

そこで、本発表は、大阪方言の補文標識「の」「ん」「のん」について、それに対応する共通語の補文標識「の」と対照することによって考察し、3形式の使い分けを中心に、その統語論及び意味論的な特徴を明らかにすることを目的とする。なお、分析・考察の対象は、大阪を舞台とした小説から収集した事例である。

(A) 補文動詞述語にテンスが表現される場合

- (1) 「少しノリすぎた {の／*ん／*のん} は、認めるわ。」（『MANZAI』 p. 129；下線・太字は発表者。
不適格な表現の記述も発表者による。）

- (2) 「前の電車で行かはった {*の／ん／*のん} ちゃうんですか？」（『阪急』 p. 217；同上）

(B) 補文動詞述語にアスペクトが表現される場合

- (3) （学校はおもないけど、家でテレビ見てる {の／*ん／*のん} 飽きた）（『岸本』 p. 66；同上）

- (4) 「勘違いせんといてや、自分を咎めてる {*の／ん／*のん} とちゃう。」（『花嫁』 p. 94；同上）

(C) 補文と主文の時制関係

《その時制関係が異なる場合》

- (5) 「うちの話しだす {の／*ん／*のん} 待っててくれてるやろ。」（『MANZAI』 p. 151；同上）

- (6) 「あの人らと付き合う {*の／ん／*のん}、やめといたら？」（『阪急』 p. 167；同上）

《その時制関係が同じ場合》

- (7) 「いやっ、忘れてたわ。電気会社に連絡する {の／*ん／のん}。」（『夢』 pp. 4-5；同上）

- (8) 「カズちゃんにしたら、せっかく真面目になって家業を手伝うようになったのが、いきなりプロレスラーになるて言い出して、そら腹立つ {*の／ん／のん} 分かんんでもないんですけど……」

（『女』 p. 143；同上）

補文標識「の」と「ん」は、(A) (B) におけるように、テンス及びアスペクトが表現されている動詞述語に後続することができ、また (C) におけるように、補文と主文の時制関係が異なる場合も同じ場合も用いることができるが、常に両者ともが使用可能なわけではなく、次の相違が見出される。「の」が用いられているのは、(3) のような独話や、(5) のように命題内容が真であると判断した際に生じる「～やろ」（共通語の「～だろ」）、(1) (7) のように命題内容が話し手の領域内に留まる際に生じる文末詞「わ」（野間 2011）などのように、話し手が聞き手に反応を求めず、一方的な場合である。また、「ん」が用いられているのは、(2) の疑問を表す「～ですか？」や、(6) の提案を表す「～といたら？」（＜「～ておいたら？」）、(8) のように発話末で生じ、モーダルの性格を持つ「～けど」（三枝 2007）など、聞き手の反応を求め、聞き手に焦点を当てる場合である。

さらに、補文標識「のん」は、(A) (B) におけるように、テンス及びアスペクトが表現されている動詞述語に後続することはできず、また (C) におけるように、補文と主文の時制関係が同じ場合にのみ用いられる。

本発表における以上の考察から、次の結論が得られる。

- (I) 大阪方言の補文標識「の」は、テンス及びアスペクトが表現される動詞述語に後続することができる。また、「の」補文における出来事は、基本的に「話し手主体」であり、主文が話し手に焦点を当てたモダリティ表現となっている。
- (II) 大阪方言の補文標識「ん」は、テンス及びアスペクトが表現される動詞述語に後続することができる。また、「ん」補文における出来事は、基本的に「聞き手主体」であり、聞き手目当てのモダリティ表現が主文に存在する。
- (III) 大阪方言の補文標識「のん」は、その補文内にテンス及びアスペクトの出現を許さず、補文と主文における出来事の時制が同じでなければ用いられないことから、[-Finite] の素性を有する。従って、共通語には定性を示す素性に形式的対立がないのに対し、大阪方言ではそれが具現化されて使い分けられている。

参考文献

- 安達太郎 (2002) 『モダリティ』(「第5章 質問と疑い」) 東京: くろしお出版.
- 赤楚治之 (2018) 「Finiteness と Fin 主要部の名詞性を巡って」『主流』80: 25-54.
- 青木博史 (2016) 『日本語歴史統語論序説』東京: ひつじ書房.
- 橋本修 (1990) 「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」『国語学』163: 101-112.
- 橋本修 (1994) 「「の」補文の統語的・意味的性質」『文藝言語研究』25: 153-166.
- Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara (2002) Missing links: Cleft, sluicing, and “no da” construction in Japanese. In: Tania Ionin, Heejeong Ko and Andrew Nevins (eds.) *MIT working papers in linguistics* 43: 35-54.
- 井上和子 (2007) 「日本語のモーダルの特徴再考」長谷川信子(編)『日本語の主文現象: 統語構造とモダリティ』227-260. 東京: ひつじ書房.
- 栞原和生 (2010) 「日本語疑問文における補文標識の選択と CP 領域の構造」長谷川信子(編)『統語論の新展開と日本語研究: 命題を超えて』95-127. 東京: 開拓社.
- キャアコップチャイ=ソムピット (2009) 「「だろう」の意味・用法」『学習院大学大学院日本語日本文学』5: 82-95.
- 金英周 (2014) 『名詞句とともに用いられる「こと」の談話機能』東京: ひつじ書房.
- Lee 風子 (1995) 『日本語の補文構造: Lexicase 文法理論による分析』東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』東京: くろしお出版.
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』東京: くろしお出版.
- 宮崎和人 (2002) 『モダリティ』(「第4章 認識のモダリティ」「第6章 確認要求」) 東京: くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会(編) (2008) 『現代日本語文法 6 第11部 複文』東京: くろしお出版.
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』1-56. 東京: くろしお出版.
- 野田春美 (1995) 「ノとコト: 埋め込み節をつくる代表的な形式」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』419-428. 東京: くろしお出版.
- 野間純平 (2011) 「大阪方言の文末詞デとワ」『阪大社会言語学研究ノート』9: 30-45.
- 野間純平 (2013) 「大阪方言におけるノダ相当表現: ノヤからネンへの変遷に注目して」『阪大日本語研究』25: 53-74.
- 野間純平 (2014) 「大阪方言における準体助詞ン・ノ・ノン: ノンの分布を中心に」『阪大社会言語学研究ノート』12: 24-36.
- 大島資生 (2010) 『日本語連体修飾構造の研究』東京: ひつじ書房.
- 三枝令子 (2007) 「話し言葉における「が」「けど」類の用法」『一橋大学留学生センター紀要』10: 11-27.
- 坂井美日 (2015) 「上方語における準体の歴史的変化」『日本語の研究』11(3): 32-50.
- 澤田治美 (2006) 『モダリティ』東京: 開拓社.
- Simpson, Andrew (2003) On the re-analysis of nominalizers in Chinese, Japanese and Korean. In: Yen-hui Audrey Li and Andrew Simpson (eds.) *Functional structure(s), form and interpretation: Perspectives from east Asian languages*, 131-160. London and New York: Routledge.
- 上田由紀子 (2007) 「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」長谷川信子(編)『日本語の主文現象: 統語構造とモダリティ』261-294. 東京: ひつじ書房.
- 渡部学 (1995) 「形式名詞と格助詞の相関: 短文と複文をめぐって」仁田義雄(編)『複文の研究(上)』27-54. 東京: くろしお出版.

用例出典

- | | |
|----------|--|
| 『阪急』 | 有川浩(著)『阪急電車』(幻冬舎, 2008年) |
| 『MANZAI』 | あさのあつこ(著)『The MANZAI』(岩崎書店, 1999年) |
| 『岸本』 | 蓮見恭子(著)『たこ焼きの岸本』(角川春樹事務所, 2020年) |
| 『花嫁』 | 蓮見恭子(著)『涙の花嫁行列 たこ焼きの岸本2』(角川春樹事務所, 2020年) |
| 『女』 | 蓮見恭子(著)『大阪で生まれた女 たこ焼きの岸本3』(角川春樹事務所, 2021年) |
| 『夢』 | 宮本輝(著)『春の夢』(文藝春秋, 1984年) |



キーワード：日本語、語用論、ポライトネス、会話文、敬語、丁寧語、役割語

キャラクターの言語使用について考察した、本発表に關係する代表的な先行研究として、金水（2003, 2022）を挙げることができる。前者で「役割語」を定義した上で、後者では、キャラクターの特徴が言語においてどう具現化されるのかについて考察し、定延（2020）で提唱された〈格〉の理論と、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論を援用することによって、丁寧語の使用・不使用の原理を明らかにしている。また、深田（2022）は、「紳士的」という性格について考察し、その待遇表現に性格と言葉づかいが結びついていることを指摘している。しかしながら、金水（2022）では、丁寧語の不使用の原理に従わない事例について記述がなされているものの、その逆である、丁寧語の使用の原理に従わない事例については言及がない。

そこで、本発表は、金水（2022）の丁寧語の使用・不使用の原理について検討した上で、小説の会話文に見られる、丁寧語を常に用いる「敬語キャラ」の発話に着目し、ヴァーチャル日本語における丁寧語の役割語的使用の実態を明らかにすることを目的とする。なお、分析・考察の対象は、「なろう系」と呼ばれる小説から収集した実例である。

丁寧語の使用の原理に従っていない事例として、格高の者が格低の者に対して発話する場合と、〈格〉が指定されていない場合が挙げられる。格高の者ならば、格低の者の「フェイス」に配慮する必要はなく、〈格〉が無指定の場合も、基本的に丁寧語を用いる必要はない。ところが、「敬語キャラ」は常に敬語や丁寧語を用いる特徴を有し、上述の原理に従わない例が多々見出される。

(1) [ロマンノフ → ヴィクトル；〈格〉無指定]

「いやー、私にとって大事だったのは魔術の腕の方だったんで、音楽のことはつい最近まで忘れてたんですよね」（『しろひよ』 p. 32）

(2) [リゼル〈格高〉 → 女の子〈格低〉]

「心配してくれたんですね、有難うございます」（『穏やか貴族』 p. 88）

(3) [スタッド〈格高〉 → 冒険者〈格低〉]

「憲兵からの報告を受けました。どうやら貴族であると偽って方々で横暴な行いをしていたと聞いたのですが間違いはないですね」（『穏やか貴族』 p. 88）

(4) [フラウレム〈格高〉 → 学生たち〈格低〉]

「去年の内容と違う？ それはそうでしょう。今年、これから習うことですからね。授業内容が必ずしも前年と同じだとは限りません。今の問題に関しては昔の学生が学んでいたことです。昔の講義内容から学んだ方が良いと判断したものを取り入れただけです」（『本好き』 p. 384）

(5) [リョウ → アベル／オスカー；〈格〉無指定]

「エトをあんなにされて、そのまま、はいそうですか、で済むわけないでしょうが。何なら、この女性を氷漬けにして返しますか？ とても美しいオブジェが出来あがるでしょう」（『水属性』 p. 106）

「敬語キャラ」による発話のうち、(2)(3)(4) は格高の者が格低の者に対して発話をしている場合に、(1)(5) は〈格〉が無指定の場合に丁寧語の使用の原理から逸脱している例である。また、(1)(2) はキャラクター自身の特徴を表しており、(3)(4) では、キャラクターの職業が特徴として現れている。さらに、(5) は、丁寧語が用いられているが、相手の「フェイス」を侵害する「煽り」行為も含まれている。これらの「敬語キャラ」による発話から読者はそれぞれのキャラクターの人物像を捉えることができ、こういったことは、役割語のように人物像と言葉づかいが双方向で結びついてはいないものの、役割語の機能を果たしていると言える。また、例えば(5)では、けんかの場面における「距離の表現」（滝浦 2008）に近い語用論的意味が付与されており、丁寧語の使用の原理に対する不遵守には、役割語だけでなく、語用論的意味を伴ったコミュニケーション方略も関与していると考えられる。なお、これは、富樫（2021）が提唱した「役割語的表現」や、森山（2014）が論じた、古典語における「はべり」のコミュニケーション方略としての用法と相通ずるところがある。

本発表における以上の考察から、次の結論が得られる。

- (A) ヴァーチャル日本語における丁寧語は、発話者自身やその特徴を読者に想起させたり、発話者がかかわる立ち位置や場面を特定したりすることが可能となる役割語的敬語の表現である。
- (B) 丁寧語の使用の原理に対する不遵守は、単なる逸脱的な表現を作り出しているのではなく、役割語的敬語、さらには語用論的意味を伴ったコミュニケーション方略によって生じた現象である。
- (C) 「なろう系」と呼ばれる小説の会話文の分析・考察から、前述のように丁寧語の役割語的使用の実態が明らかになるが、この種の小説は、「役割語的丁寧語」がうまく活用されている性質のものであると言える。

参考文献

- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. [ペネロピ・ブラウン, スティーヴン・C・レヴィンソン (著), 田中典子 (監訳), 斉藤早智子他 (訳) (2011) 『ポライトネス: 言語使用における, ある普遍現象』東京: 研究社.]
- 深田芽生 (2022) 「役割語研究の視点から見た人物の性格と言葉づかい: アニメシリーズの人物紹介文と登場人物の発話の分析」『国際日本学研究論集』15: 1-20.
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』東京: 岩波書店.
- 金水敏 (2022) 「ポライトネスとキャラクター」近藤泰弘・澤田淳 (編) 『敬語の文法と語用論』342-358. 東京: 開拓社.
- 森山由紀子 (2014) 「11 世紀初頭の日本語における聞き手敬語「一はべり」の方略的運用: 社会言語学的要因と語用論的要因をめぐって」金水敏・高田博行・椎名美智 (編) 『歴史語用論の世界: 文法化・待遇表現・発話行為』47-74. 東京: ひつじ書房.
- 定延利之 (2020) 『コミュニケーションと言語におけるキャラ』東京: 三省堂.
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』東京: 研究社.
- 富樫純一 (2021) 「役割語の先へ: 役割語的表現への広がり」『日本語学』40(1): 26-36.

用例出典 (本文で提示された『 』内は著書の通名)

- 『本好き』 香月美夜 (著) 『本好きの下剋上 ～司書になるためには手段を選んでいられません～』
[<https://ncode.syosetu.com/n4830bu/384/>] (2015 年)
- 『水属性』 久宝忠 (著) 『水属性の魔法使い』 [<https://ncode.syosetu.com/n0022gd/106/>] (2020 年)
- 『穏やか貴族』 岬 (著) 『休暇だと思って楽しめます。』(書籍版: 『穏やか貴族の休暇のすすめ。』)
[<https://ncode.syosetu.com/n5128by/88/>] (2015 年)
- 『しろひよ』 やしろ (著) 『白豚貴族だったどうしようもない私に前世の記憶が生えた件』
(書籍版: 『白豚貴族ですが前世の記憶が生えたのでひよこな弟育てます』)
[<https://ncode.syosetu.com/n9530ey/32/>] (2018 年)



D-1

Syntax of Modification in Bùli: Adjective Incorporation and Light Noun

Abdul-Razak Sulemana and Ken Hiraiwa

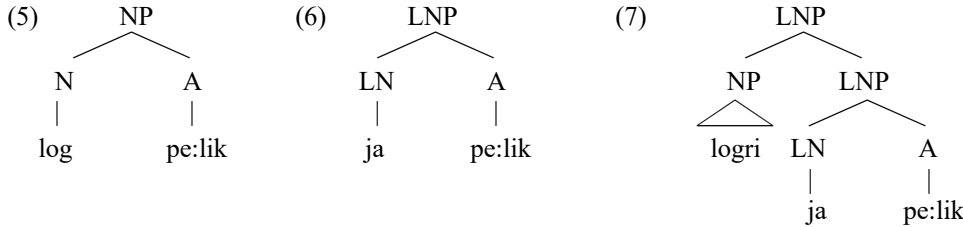
Keywords: Mabia/Gur Languages; Syntax; Generative Grammar; Incorporation; Adjectives

1. Adjectival Modification: Bùli is an endangered language with head-initial clausal word order and head-final nominal word order. It belongs to the Mabia/Gur language family and is spoken in the Upper-East region of Ghana (Kröger 1992, Kenstowicz and Richards 2003, Hiraiwa 2005, Sulemana 2021). Adjectives in Bùli are post-nominal (Matushansky 2003, Sulemana 2012). At a glance, Bùli appears to be like other languages, allowing adjectives to modify nouns as shown in (1). However, Bùli has another form of adjectival modification that involves *ja-*, as shown in (2).

- | | | | |
|-------------------------------------|--|--------------------------------|--|
| (1) <i>log/*logri</i> <i>pe:lik</i> | (2) <i>logri/*log</i> <i>ja-pe:lik</i> | (3) * <i>log</i> <i>pe:lik</i> | (4) <i>logri</i> <i>ja-pe:lik</i> |
| car white | car JA-white | car white | car JA-white |
| ‘a white car’ | ‘a white car’ | ‘a white one’ | ‘a white one’ |

In (1), the ordinary noun *logri* ‘car’ takes the short root form *log*. In (2), the same ordinary noun takes the full-fledged form. Furthermore, the ordinary noun can be elided in the presence of *ja*, but not in its absence as shown in (3)–(4). In this paper, we show that adjectival modification in Bùli involves obligatory adjective incorporation, which are realized in two different ways.

2. Adjective Incorporation: We propose that an adjective in Bùli obligatorily incorporates into a nominal element. There are two options for this. as shown in (5), an adjective incorporates into the short root form of an ordinary noun and forms a modified NP. The second option is that an adjective incorporates into a light noun (hereafter LN) root *ja-* and forms a modified LNP, and the ordinary head NP is merged with this LNP as an adjunct as shown in (6)–(7).



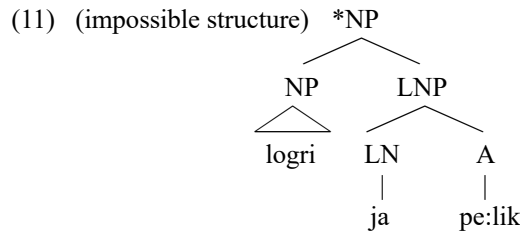
The above analysis explains why it is impossible to add an adverb to an attributive adjective in Bùli, because an adverb cannot attach to an adjective undergoing incorporation (e.g. *log-naleng* (**yega-yega*) ‘a (very) beautiful car’)

3. *ja-* as a Light Noun: The LN root *ja-* is etymologically a short form *ja:* of the full-fledged noun *ja:b* ‘thing’. However, they are different: while the latter is strictly [–animate], the former is animacy neutral.

- | | |
|--|--|
| (8) <i>ja:b</i> <i>ja-gelik</i> | (9) <i>ja-gelik</i> |
| thing LN-short | LN-short |
| ‘a short thing’ (*[+animate], ✓[–animate]) | ‘a short one’ (✓[+animate], ✓[–animate]) |

4. Supporting Evidence: One piece of evidence for our claim that in (2), *ja-pe:lik* is the head of the whole constituent comes from the fact that it is *ja-pe:lik* that determines the form of definite morphology (see Sulemana 2020 for complex morphophonology of definiteness marking). In (10a), the definite suffix morphology is determined by the noun class of *logri*. However, in adjectival modification, the definite suffix morphology appears on the adjective and its form is determined by the class of the adjective.

- | | |
|-----------------------------------|--|
| (10) a. <i>logni</i> | |
| car.Def. | |
| ‘the car’ | |
| b. <i>logni</i> <i>ja-pe:lika</i> | |
| car.Def. LN-white.Def. | |
| ‘the white car’ | |



Further evidence comes from the fact that an ordinary noun can be only elided in the presence of *ja-*, as shown in (3)–(4). In (3), the ordinary noun cannot be elided because the adjective is incorporated into it. In (4), the ordinary NP can be elided because it is an adjunct (see (7)). If it were the head of the structure as in (11), such ellipsis shouldn’t be possible. The proposed structure, if correct, reminds us of the structure proposed for polysynthetic languages by Baker (1996), where what looks like an argument NP is actually an optional adjunct to the phrase in which incorporation takes place.

5. Multiple Adjectives: Finally, the incorporation analysis predicts that when multiple adjectives modify a noun, the pattern in (12c) should be ungrammatical, because the second adjective is left stranded, without incorporating into a nominal element. This prediction is indeed confirmed.

- | | |
|--|--|
| (12) a. <i>logri</i> <i>ja-pe:lik</i> <i>ja-kpiong</i> | |
| car LN-white LN-big | |
| ‘a big white car’ | |
| b. <i>log</i> <i>pe:lik</i> <i>ja-kpiong</i> | |
| c. * <i>logri</i> <i>ja-pe:lik</i> <i>kpiong</i> | |

(NP *ja-A ja-A*)
 (N-A *ja-A*)
 (*NP *ja-A A*)



Selected References:

- Baker, M. 1996. *The Polysynthesis Parameter*. OUP.
- Kenstowicz, M. and N. Richards. 2003. *A Grammar of Bùlì*. MITWWPL.
- Hiraiwa, K. 2005. Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture. Ph.D Dissertation, MIT.
- Matushansky, O. 2003. Adjectives in Bùlì. In Kenstowicz and Richards (2003).
- Sulemana, A-R. 2012. *The Structure of Determiner Phrase in Bùlì*. MPhil Thesis. University of Ghana.
- Sulemana, A-R. 2020. The Definite Morpheme in Bùlì. In Bodomo, A. et. al (eds.) *Handbook of the Mabia Languages of West Africa*, 135-167. Galda Verlag.
- Sulemana, A-R. 2021. *Non-finite Complementation: A case study of Bùlì*. Ph.D Dissertation, MIT.



D-2

Case Marking in Koygu, a Surmic Language in Southwest Ethiopia

Dagnew Mache Asgede (Arba Minch University / University of Tsukuba / Japan Society of the Promotion of Science; dagnewmache.a@gmail.com) and So Miyagawa (University of Tsukuba; miyagawa.so.kb@u.tsukuba.ac.jp)

Keywords: Koygu, Surmic, Ethiopia, case-marking typology, language documentation

Koygu, an endangered Surmic language with approximately 3,000 highly multilingual speakers in southwest Ethiopia, presents a unique case for understanding morphosyntactic variation within the Surmic family. This paper presents the first systematic analysis of Koygu's case-marking system based on 2025 fieldwork data, examining its typological alignment compared to other Surmic languages.

Surmic languages typically feature rich morphological case systems, with Majang and Murle exhibiting the typologically rare marked nominative alignment. Given this context, we predicted Koygu would display overt morphological case marking with either marked nominative or ergative alignment. However, our data that was collected in 2025 reveals a striking departure: Koygu completely lacks morphological case suffixes on core nominal arguments. Subjects and objects appear unmarked, with grammatical relations determined solely through word order and pragmatic context, indicating a purely analytic case-marking system.

Despite lacking core case morphology, Koygu employs prepositions for oblique relations. Spatial and temporal locations use specific prepositions (e.g., *jijani* for locative). The prefix *ha-* on motion verbs encodes both ablative ('from') and allative ('to') functions, with interpretation dependent on verb semantics, as in *ha-kun-ke Kangatən* 'I come from Kangaten' versus *ha-kuji-ba Kangatən* 'I will go to Kangaten.'

The prefix *ʔaj-* marks recipients and beneficiaries, while *kə-* indicates comitative and instrumental relations. Possession employs two strategies: the prefix *ka-* for nominal possession (*aruŋ ka-ton* 'meat of goat') and independent possessive pronouns for pronominal possession (*iskibrito nani* 'my pen').

These findings necessitate reconsidering Koygu's position within Surmic typology. The use of only prepositional morphemes instead of inflectional case morphology marks a notable shift from the synthetic patterns found in other related languages. The absence of ergative or marked nominative morphemes indicates a default nominative-accusative alignment with zero-marking for all core arguments. Despite the absence of core marking, systematic prepositional marking still provides clear mechanisms for peripheral semantic roles.

This data reveals unexpected diversity within Surmic, where case marking was previously considered universal. Two hypotheses merit consideration: Koygu may represent either innovative simplification—possibly accelerated by extensive multilingualism—or preservation of an archaic analytic pattern that was replaced by synthetic morphology elsewhere. These findings demonstrate that closely related languages can exhibit fundamental morphosyntactic differences, emphasizing the critical importance of documenting endangered languages for linguistic typology.



D-3

The syntax of adverbial clauses in Isbukun Bunun

Ting-Chi Wei

Keywords: (Isbukun Bunun, Formosan languages, syntax, adverbial clause, adjunction, topicalization)

This paper argues that the traditional division of subordination, co-subordination, and coordination between adverbial clauses (ACs) and main clauses in the literature of Formosan languages (Zeitoun 1997, 2024, Hsieh, et al. 2022) can be re-interpreted in a more precise way by investigating the architecture of ACs via various syntactic diagnostics. We focus on Isbukun Bunun, one of the Formosan languages mainly spoken in southern Taiwan, a verb-initial language. We propose that the flexibility of the word order of ACs in Isbukun Bunun is closely related to the height of its adjunction site. The higher the adjunction site is, the more flexible its syntactic operations such as word order are. We find that its temporal, conditional and concessive clauses are right-adjoined (S-final) to TP below ForceP and are generally topicalized to S-initial position if carrying given information. In contrast, causal clauses are freely left- or right-adjoined to a discursal projection above ForceP (Haegeman 2012, 2014) with more freedom in word order and grammar.

The temporal, conditional (1a), and concessive clauses in Isbukun Bunun generally appears in the S-final position. In addition, they can occur in the S-initial position, ending with topic marker *hai* as in (1b).

- (1) a. na=palinutu-an=ku [mais sadu=ik saitia].
IRR-UVL=1SG.NOM when.IRR/if see[AV]=1SG.NOM 3SG.OBL 'I will tell him if I see him.'
b. [mais sadu=ik saitia hai], na=palinutu-an=ku. (Zeitoun 1997: 149)
when.IRR/if see[AV]=1SG.NOM 3SG.OBL TOP IRR-UVL=1SG.NOM 'If I see him, I will tell him.'

The causal clauses can be in the S-initial or S-final position with freedom of reversibility in word order

- (2) a. nii=dau a saia mahtu m-insuma='i, ['aupa m-ka-dabpa=dau a saia.]
NEG-say NOM 3SG.NOM can AV-come=because because AV-STAT-sick=say NOM 3SG.NOM
(because > ¬) 'He cannot come because he is sick.'
b. ['aupa m-ka-dabpa=dau a saia=at,] nii=dau a saia mahtu m-insuma.
because AV-STAT-sick=say NOM 3SG.NOM=CONJ NEG=sayNOM 3SG.NOM can AV-come
(because > ¬) 'Because he is sick, he cannot come.' (Huang and Shi 2018: 252)

We suggest that the AC that adjoins to a discursal projection above ForceP is very close to a root clause, forming a seeming coordinate structure with the main clause, being akin to Peripheral AC (PAC) in Haegeman (2012, 2014) with more freedom in word order. In contrast, the AC that adjoins to a projection below ForceP is either left-adjoined or right-adjoined to TP under ForceP of the main clause, resembling Central AC (CAC) with limited freedom in word order. In Isbukun Bunun, the distinction between reversible PAC and non-reversible CAC can be diagnosed by checking (i) the scope of matrix negation, (ii) the scope of interrogative force, and (iii) quantificational binding across subordinate clause and main clause.

First, the matrix negation does not affect the semantic or syntactic operations within the causal clause in (2a, b). It shows that the causal clause is conjoined with the consequent clause. It is a kind of juxtaposition or coordination, showing the independence of causal clause from the consequent clause. It can be analyzed as a structure close to PAC, being reversible and being freely left- or right-adjoined to a discursal projection above ForceP. Second, in (3), the yes-no question of the matrix clause dominates the force of the entire clause including the S-initial conditional clause, in which the indefinite *wh*-element *mazmaaz* 'anything' is licensed only within the subordinate conditional clause; no *wh*-force has been induced. It indicates that the conditional clause is a kind of CAC, right-adjoined to TP below ForceP, prior to topicalization.

- (3) [mais ma-baliv a Tahai mas mazmaaz hai], 'adu na=ma-naskal a Malia i?
if AF-buy NOM Tahai OBL RED-what TOP Q IRR=AF-happy NOM Malia SFP
'If Tahai buys anything, then Malia will be happy?'

Third, the pronoun *isaicia* 'he' in the S-final conditional clause can be bound by a universal quantifier *kaku'isananavaan_i* 'every student' in the matrix clause in (4). It shows that the S-final conditional clause is a kind of CAC, right-adjoined to TP below ForceP, except for change of word order via topicalization with topic marker *hai*.

- (4) mahtu amin a kaku'isananavaan_i kaudiip, [mais maduaz a isaicia_i tamacina].
may also NOM student.RED go if willing NOM 3SG.GEN parents
'Every student_i can go, if his_i parent agree.'

This study sheds light on typology of ACs in Formosan languages. Topic markers in ACs have been well-documented in Formosan literature without discussion. We observe that most Formosan languages adopting topic markers to form S-initial temporal, conditional, and concessive adverbial clauses; causal clauses rarely adopt topicalization, except Puyuma. There might be a typological distinction between a language adopting topic marker to form S-initial AC and a language not adopting topic marker. Syntactically, the underling S-final AC is fronted to a topic position TopP, headed by Top in (5). For languages not adopting topicalization, S-final position might be the preferable or default order.

- (5) [_{TopP} adverbial clause [_{Top} topic marker [_{TP} [_{TP} main clause [_{adverbial clause}]]]

Causal clause has long been recognized as a kind of coordinate structures in the literature. That is probably why it does not need the mechanism of topicalization.

References:

- Haegeman, Liliane. 2012. *Adverbial clauses, main clause phenomena, and composition of the left periphery: The cartography of syntactic structures* (Vol. 8). Oxford: Oxford University Press.
- Haegeman, Liliane. 2014. West Flemish verb-based discourse markers and the articulation of the speech act layer. *Studia Linguistica*, 68.1: 116-139.
- Hsieh, Fuhui, Chia-Hsing Sung, and Pei-jung Amy Lee. 2022. *Grammatical category and teaching in Paiwan* (Chinese). Series on Formosan Languages III. Taipei: Indigenous Languages Research and Development Foundation.
- Huang, Hui-chuan and Chao-Kai Shi. 2018. *A sketch of grammar of Bunun* (Chinese). Series on Formosan Languages 6. New Taipei: Council of Indigenous Peoples.
- Zeitoun, Elizabeth. 1997. Temporal, hypothetical and counterfactual clauses in Formosan languages. Paper read at the English International Conference on Austronesian languages. December 28-30, 1997. Taipei: Academia Sinica.
- Zeitoun, Elizabeth. 2024. Adverbial clauses. In Paul Jen-kuei Li, Elizabeth Zeitoun and Rik De Busser, eds, *Handbook of Formosan languages: The indigenous languages of Taiwan*, Part 1, 884-919. Leiden: Brill.



D-4

ドイツ語の不在構文 (Absentiv) の背景的機能

am-Progressiv との対照分析

伊藤港 (学習院大学大学院 24235001@gakushuin.ac.jp)

a. ドイツ語 b. コーパス言語学、構文文法 c. Absentiv, am-Progressiv, 背景化、進行相

1. はじめに: (sein + 不定詞) によって形成される不在構文 (1) は、従来「動作主の不在を表す構文」であるとされてきた (cf. de Groot 2000)。しかし、コーパスには「不在」を必ずしも意味しない用例が多数確認される。

(1) Er ist einkaufen. he.NOM be.3SG shop.INF

本発表の目的は、先行研究で十分に扱われてこなかった談話における不在構文の機能を明らかにすることである。具体的には、不在構文は不在を指示する構文ではなく、談話において 背景提示・場面設定をする構文であることを主張する。

2. 先行研究: Krause (2002), Vogel (2008), König (2009) では、主に単文レベルの意味分析に集中しており、談話における機能や情報構造については十分に検討されていない。

3. データと考察: 分析には、大規模コーパス DWDS および進行形式 (Verlaufsform) の用例を収録する OWID を用いた。さらに、ドイツ語における最も文法化の進んだ進行形式である am-Progressiv (sein+am+不定詞) と比較し、不在構文が他の進行形式と異なり、背景的機能を担う可能性を検討した。結果として以下の 3 点が確認された。第 1 に、不在構文は主文で頻出し、文頭に前置されやすい。第 2 に、主文であるにもかかわらず副文的に振る舞い、談話上の情報構造において背景的となる。第 3 に、現在時制よりも過去時制に多く現れる。

(2) Der damals 17-jährige Trayvon war einkaufen, als er von George Zimmerman, Mitglied einer Bürgerwehr, erschossen wurde. (Die Zeit, 20.07.2013 (online))

当時 17 歳のトレイボンが買い物に行っていて、その時ジョージ・ジーマーマンによって射殺された。

(3) Irgendwie waren heute sehr viele Leute einkaufen und an den Kassen war eine lange Schlange.

(Ich kann nicht einkaufen. spitzohr.de, 2006-12-28)

今日はなぜかたくさんの人が買い物に来ていて、レジには長い行列ができていた。

(2)は、主文である不在構文が地 (ground) となり、als 副文が図 (figure) となっている例である。この現象は Zifonun et al (1997) において、「周辺の時制文 (periphere Temporalsätze)」とされ、主文・副文の情報構造の転換として説明されている。また、不在構文が並列接続詞 und(and)と共起する場合(3)、und の前に現れる例が 8 割を超えた。並列接続詞の and において、先行する出来事は後続する出来事の補助的役割となる(cf. Langacker 2008:412)。これにより、不在構文が背景的機能を持つ可能性が更に示唆される。対して、am-Progressiv では並列接続詞の前に出現する割合は 2 割にとどまった。さらに、不在構文が過去時制に頻出する点は、最も文法化の進んだ進行表現である am-Progressiv が現在時制で頻出する点と対照的である。過去時制で多く頻出することは、発話時の「主語の不在」よりも、背景的情報を提示することが根底にある証拠と考えられる。不在構文の機能が談話における背景提示・場面設定にあることを示していると考えられる。

4. 結語: 以上の分析結果から、不在構文には上記の 3 つの特徴が確認された。これらの特徴は不在構文が単なる「不在」を表すだけではなく、談話において背景提示・場面設定を担う構文持っていることを示す。



参考文献

DWDS URL: <https://www.dwds.de/>

OWID URL : <https://www.owid.de/index.jsp>

de Groot, Casper (2000): The absentive. In: Östen Dahl (ed.) In: Tense and Aspect in the Languages of Europe. S. 693-719.

König, Svenja (2009): Alle sind Deutschland...außer Fritz Eckenga - der ist einkaufen : der Absentiv in der deutschen Gegenwartssprache. In: Edeltraud Winkler (ed.): *Konstruktionelle Varianz bei Verben*. Mannheim, S. 42-74.

Krause, Olaf (2002): *Progressiv im Deutschen : eine empirische Untersuchung im Kontrast mit Niederländisch und Englisch*. M. Niemeyer

Langacker, Ronald W. (2008): Cognitive Grammar A Basic Introduction. New York: Oxford University Press.

Vogel, Petra M. (2007): Anna ist essen! Neue Überlegungen zum Absentiv. In: Geist Ljudmila and Rothstein Björn (eds.): *Kopulaverben und Kopulasätze: Intersprachliche und intrasprachliche Aspekte*. S. 253-84.

Zifonun, Gisela, Ludger Hoffmann, Bruno Strecker, and Joachim Ballweg (1997): Grammatik der deutschen Sprache. Berlin, New York: Walter de Gruyter.



D-5 **Relative Pronouns and Present Participles in Bulgarian Romani: A Case of Contact-Induced Change**

Todor Vasilev, Kobe University

Keywords: Romani linguistics; Bulgarian; language contact; relative clauses; participles; grammatical borrowing; Balkan languages; typology

This study investigates the emergence of relative pronouns in Bulgarian Romani as a case of contact-induced grammatical change. While Romani, as an Indo-Aryan language, historically relied on participial and paratactic strategies for noun modification, Bulgarian Romani has developed a system of relative pronouns (*so*, *savo*, *savoščī*), which are absent or marginal in many other Romani dialects. We argue that this system is the result of long-term contact with Bulgarian, where relative pronouns (*kojto*, *koyato*, *koeto*) are the default strategy for relativization.

Our methodology combines a typological comparison of relativization strategies with an original speaker survey targeting Bulgarian Romani communities. The survey was designed to test speaker preference between two types of noun-modifying structures: (1) participial modifiers (e.g., *o manuш джалимо* “the man going”) and (2) relative pronoun constructions (e.g., *o manuш savo джал* “the man who goes”). Fifteen paired sentences were presented to respondents, who were asked to select the form that sounded more natural in their dialect. The survey was administered in Cyrillic orthography, to maximize accessibility for participants familiar with the Bulgarian writing system.

Preliminary results suggest a strong preference for relative pronoun constructions among younger and urban speakers, whereas older speakers continue to accept participial forms as natural. This distribution highlights an ongoing generational shift toward the Bulgarian-influenced relativization strategy. The coexistence of the two patterns suggests that Bulgarian Romani currently occupies an intermediate typological position, retaining some Indo-Aryan features while adopting Balkan innovations.

The significance of this study lies in its contribution to understanding contact-induced change in Romani and, more broadly, the spread of European areal features. The adoption of relative pronouns demonstrates not only lexical borrowing but also the transfer of a core syntactic strategy, reshaping the grammar of a minority language under the influence of a dominant one. By documenting speaker preferences and variation, this research provides empirical evidence for how bilingualism and sociolinguistic pressures shape the grammar of Romani in Bulgaria.

Beyond its empirical findings, this research contributes to broader theoretical debates on the nature of relativization. The evidence from Bulgarian Romani supports the view that relative pronouns are not a universal category but rather an areal innovation spreading across Europe. By contrasting inherited participial modification with borrowed relative pronouns, the study sheds light on how minority languages negotiate competing strategies under contact pressure. This case demonstrates how syntactic categories, once thought resistant to borrowing, can emerge in a bilingual environment, which makes Bulgarian Romani a key test case for theories of grammatical replication and the dynamics of areal linguistics.



E-1 Unifying Mandarin *de*: Polymorphic Linker for Nominal and Discourse Roles

Jo-Wang Lin

Keywords: Mandarin Chinese, formal semantics, particle *de*, polymorphism, qualia structure, discourse coherence structure, grammaticalization

The Mandarin particle *de* (的), roughly comparable to the Japanese *no*, is among the most frequently used morphemes in the language, yet its multifunctionality continues to challenge linguistic analysis. It serves mainly as a linker in nominal modification constructions of ‘XP *de* NP’, where it connects modifiers to head nouns, and as a sentence-final particle (SFP) that imparts emphatic or confirmatory force to assertions. Traditional accounts have often treated these roles as unrelated, positing lexical ambiguity or domain-specific particles. Based on Lin (2025), this paper proposes a unified framework, analyzing *de* as a single polymorphic linker that introduces a context-sensitive relation *R*, whose interpretation is determined by domain-specific structures. This approach eliminates ambiguity, offering a parsimonious explanation grounded in formal semantics and diachronic evidence.

In nominal contexts, *de* draws *R* from the head noun’s Qualia Structure (Pustejovsky 1995), a lexical inventory encoding properties such as FORMAL (ontological category), CONSTITUTIVE (composition), AGENTIVE (origin), and TELIC (purpose). This mechanism accounts for diverse relations without lexical proliferation. For example, in possessive constructions like *Zhāngsān de shū* (‘Zhangsan’s book’), *R* may derive from AGENTIVE for authorship or TELIC for ownership. In clausal modifiers, such as *Zhāngsān pòchǎn de yáoyán* (‘the rumor that Zhangsan went bankrupt’), *R* draws from the CONSTITUTIVE role to encode content.

Building on this core relational function, we argue that sentence-final *de* represents a diachronic extension to the discourse domain, linking a proposition *p* to the conversational context *C* via a relation *R* sourced from a Discourse Coherence Structure (DCS)—a pragmatic inventory of rhetorical relations like Explanation, Correction, or Concession (Mann & Thompson 1988; Asher & Lascarides 2003). This is illustrated by sentences like *Tā (shì) zuótiān lái Běijīng de* (‘It is yesterday that he came to Beijing DE’), which can offer an explanation, or *Shì jǐngchá bǎ tā zhuā qīlái de* (‘It was the police who arrested him DE’), which can serve as a correction. This extension is not arbitrary. The sentence-final role emerged through grammaticalization of *de*’s nominal function in the pivotal *shi...de* focus construction, where *de*—originally a nominalizer—was reanalyzed as a clausal marker via insubordination and D-to-T incorporation (Simpson & Wu 2002).

This pathway preserved the core linking mechanism but enriched it with pragmatic effects (e.g., the emphatic force of a VERUM operator) and a key semantic constraint: the HOLISTIC(p) presupposition. This constraint, a fossilized trace of *de*’s nominalizing origins, requires the proposition *p* to be aspectually stable (stative or perfective), explaining its infelicity with progressives. Thus, *de* is felicitous with statives (e.g., *Tā hěn shúxī nà tiáo lù de* ‘He is very familiar with that road DE’) and perfectives, but not with progressives (e.g., **Wǒ zhèngzài chīfàn de* ‘I am eating DE’).

Our formal analysis brings these threads together, compositionally deriving *de*’s nominal and discourse roles as adaptations of a single relational operator. This unified approach resolves a long-standing puzzle in Mandarin linguistics and provides a typologically informed model of how multifunctional particles evolve across languages.

References:

- Asher, Nicholas & Lascarides, Alex. 2003. *Logics of conversation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lin, Jo-wang. 2025. One linker, many relations: Unifying Mandarin *de* via qualia, events, and cross-linguistic insights. Unpublished manuscript, Academia Sinica, Taipei.
- Liu, Ying & Shi, Wenlei. 2022. Verum *shi*, sentence-final *de* and the emphatic effects in Mandarin. *Lingua* 267. 1–22.
- Mann, William C. & Thompson, Sandra A. 1988. Rhetorical structure theory: Toward a functional theory of text organization. *Text* 8(3). 243–281.
- Pustejovsky, James. 1995. *The generative lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Simpson, Andrew & Wu, Zoe. 2002. From D to T: Determiner incorporation and the creation of tense. *Journal of East Asian Linguistics* 11(2). 169–209.



E-2

Non-canonical response particles in German? Toward a formal semantics of *Und ob!* and *Als ob!*

Katsumasa Ito & Heiko Seeliger

Keywords: German, formal semantics, response particles, propositional anaphors, Table Stack Model

Data: The goal of this paper is to propose a formal semantic/pragmatic analysis for *Und ob!* 'And whether!' and *Als ob!* 'As if!' in German. Intuitively, *Und ob!* expresses a reinforced affirmation, while *Als ob!* works as a reinforced denial (cf. Amido & Buchczyk 2023 and Bledin & Srinivas 2020).

- | | |
|--|--|
| (1) A: Ist Maria groß?
is Maria tall
B: Und ob!
and whether | (2) A: Ist Maria groß?
is Maria tall
B: Als ob!
as if |
|--|--|

At first sight, these expressions appear to be reduced versions of independent *Und-ob* clauses and *Als-ob* clauses, such as (3) and (4).

- | | |
|--|--|
| (3) A: Ist Maria groß?
is Maria tall
B: Und ob sie groß ist!
and whether she tall is
'Of course, she is tall!' | (4) A: Ist Maria groß?
is Maria tall
B: ?Als ob sie groß wäre!
as if she tall is.SUBJ
'As if she were tall!' |
|--|--|

Claims: *Und ob!* and *Als ob!* in German are response particles like *yes/no* and are not reduced versions of *Und-ob* clauses and *Als-ob* clauses. We assume that *Und ob!* and *Als ob!* are propositional anaphors in terms of Krifka (2013) and propose a formal semantic/pragmatic analysis in the framework of Farkas & Bruce (2010).

Observation: We first present data in which *Und ob!* and *Und-ob* clauses / *Als ob!* and *Als-ob* clauses are not interchangeable. *Und ob!* and *Als ob!* can only take a proposition as an antecedent which is uttered right before *Und ob!* and *Als ob!*, while this restriction is not observed in *Und-ob* clauses / *Als-ob* clauses. We then show that the semantics of *Und ob!* and *Als ob!* should be captured by obviousness and not by extreme degree, presenting data which suggest there is no degree restriction in terms of Rett (2011). Assuming that *Und ob!* and *Als ob!* are response particles, it is also shown that *Und ob!* is always [+] (i. e., it conveys a positive proposition) while *Als ob!* is [REVERSE] (i. e., it conveys a reversed polarity of the antecedent proposition) in terms of Roelofsen & Farkas (2015), as in (5) and (6). We also observe that *Und ob!* and *Als ob!* cannot be denied by *nein* 'no', while they can be referred by *das* 'that'.

(5) Positive sentence as an antecedent

A: Maria ist groß.

Maria is tall

B1: Und ob!

~Maria is obviously tall. [AGREE, +]

B1': Als ob!

~Maria is obviously not tall. [REVERSE, -]

(6) Negative sentence as an antecedent

A: Maria ist nicht groß.

Maria is not tall

B1: Und ob!

~Maria is obviously tall. [REVERSE, +]

B1': Als ob!

~Maria is obviously tall. [REVERSE, +]

Analysis: Adopting the structure [NegP [TP]] by Krifka (2013), we propose that *Und ob!* refers TP and conveys a positive proposition TP and that *Als ob!* refers NegP and conveys a reversed proposition $\neg$ NegP. This is the reason why *Und ob!* is [+] and *Als ob!* is [REVERSE]. We propose (7)/(8) as semantics of *Und ob!*/*Als ob!* under the framework of Farkas & Bruce (2010). For a compositional analysis we assume *Opinion* Op based on Umbach (2016).

(7)

where $c = \langle DC_{speaker}, Table, CG, \dots \rangle^{\leftarrow}$

$$\begin{aligned} \llbracket Opinion_{obvious} (\llbracket Und\ ob! \rrbracket) \rrbracket &= \llbracket Opinion_{obvious} (p) \rrbracket^{\leftarrow} \\ &= \lambda c_k. \left[\begin{array}{l} DC_{speaker}' = DC_{speaker} + obvious(p)^{\leftarrow} \\ Table' = Table - \{p\} \text{ or } Table - \{p, \neg p\}^{\leftarrow} \\ c' = c \text{ in all other respects}^{\leftarrow} \end{array} \right] c' \end{aligned}$$

(8)

where $c = \langle DC_{speaker}, Table, CG, \dots \rangle^{\leftarrow}$

$$\begin{aligned} \llbracket Opinion_{obvious} (\llbracket Als\ ob! \rrbracket) \rrbracket &= \llbracket Opinion_{obvious} (\neg p) \rrbracket^{\leftarrow} \\ &= \lambda c_k. \left[\begin{array}{l} DC_{speaker}' = DC_{speaker} + obvious(\neg p)^{\leftarrow} \\ Table' = Table - \{\neg p\} \text{ or } Table - \{p, \neg p\}^{\leftarrow} \\ c' = c \text{ in all other respects}^{\leftarrow} \end{array} \right] c' \end{aligned}$$

Informally, *Und ob!*/*Als ob!* removes the *Issue* from the *Table* and updates *DC* (*Discourse Commitment*) with *obvious(p)*/*obvious(¬p)*. *Und ob!* and *Als ob!* cannot be denied by *nein* 'no', because there is no *Issue* on the *Table*. They can be referred by *das* 'that', because the proposition *obvious(p)*/*obvious(¬p)* is in the *DC* (cf. Umbach 2016).



References

- Amido, S., & Buchczyk, S. (2023). Whether-exclamatives: a verum strategy. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*, 42(3), 549–576.
- Bledin, J., & Srinivas, S. (2020). Exclamatory As Ifs. *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 24(1), 84–101.
- Farkas, D. F., & Bruce, K. B. (2010). On reacting to assertions and polar questions. *Journal of semantics* 27(1), 81–118.
- Krifka, M. (2013). Response particles as propositional anaphors. *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory* 23 (SALT 23), 1–18.
- Rett, J. (2011). Exclamatives, degrees and speech acts. *Linguistics and Philosophy*, 34(5), 411–442.
- Roelofsen, F., & Farkas, D. F. (2015). Polarity particle responses as a window onto the interpretation of questions and assertions. *Language*, 91(2), 359–414.
- Umbach, C. (2016). Evaluative propositions and subjective judgments. In C. Meier, & J. van Wijnbergen-Huitink, *Subjective Meaning: Alternatives to Relativism* (S. 127–168). Berlin: de Gruyter.



E-3 トルコ語の過去時制接語 =(y)DI と間接証拠性接語 =(y)mlş の共起制限の分析

網谷 晃樹 (東京外国語大学 大学院博士後期課程)

キーワード：トルコ語、意味論、時制、証拠性、接語

トルコ語には、通時的にコピュラ *i-* から派生した接語が 3 つある：=(y)DI ‘=PST’、=(y)mlş ‘=EVID’、=(y)sA ‘=COND’。これらの共起に関して、=(y)DI と =(y)mlş がそれぞれ =(y)sA と共起することが既に指摘されている (Kornfilt 1997: 367; Göksel & Kerslake 2005: 85–86)。(1) は =(y)DI と =(y)sA が共起する例である。

- (1) oku-yacak=**ti**=ysa-m
read-FUT=**PST**=COND-1SG

「私が読むつもりだったならば」(Kornfilt 1997: 367; 和訳は発表者)

一方、標準トルコ語において =(y)DI と =(y)mlş は共起しないと言われているが、その理由については説明されていない。本発表では、① =(y)DI と =(y)mlş が共起しないことをコーパス調査により定量的に確認し、② 共起しない理由を意味論の立場から分析する。

① 定量調査

ウェブコーパス Sketch Engine 内の Turkish Web 2020 (trTenTen20) を使用して、=(y)DI と =(y)mlş がそれぞれ単独で用いられている例文数、および =(y)DI と =(y)mlş が共起している例文数を求めた (異形態のうち、同綴異義語を持つものは除外した)。その結果、=(y)DI と =(y)mlş がこの順に共起する述語は全く見られず、=(y)mlş と =(y)DI がこの順に共起する述語は 24 例のみであった (表 1)。なお、共起が既に指摘されている =(y)DI と =(y)sA がこの順に共起する例は 8,172 例あった。ここから、=(y)DI と =(y)mlş が共起しないことが定量的に明らかになった。

表 1：=(y)DI や =(y)mlş を含む例文数

形式	例文数
= (y)DI	656,863
= (y)mlş	67,185
= (y)DI = (y)mlş	0
= (y)mlş = (y)DI	24

② =(y)DI と =(y)mlş が共起しない理由

伝統的に =(y)DI は過去時制を、=(y)mlş は間接証拠性を表すと記述されているが、この意味分析では両接語が共起しない理由が説明できない。過去マーカーと間接証拠性マーカーが共起する言語は存在するためである (例：日本語 -*ta-sōda*、朝鮮語 -*ass-te* ‘=PST-EVID’)。また、統語論の立場からこの共起制限を説明することも難しい。同じくコピュラから派生した接語 =(y)sA は =(y)DI や =(y)mlş と共起するためである。

本発表では、=(y)mlş の間接証拠性を過去時制として捉え直す。そして、ともに過去時制を標示する =(y)DI と =(y)mlş が共起すると意味が冗長になるため、共起制限が起こると結論する。分析は以下の通りである。

間接証拠文において、話者が発話内容の根拠を入手した時間を証拠入手時点 Evidence Acquisition Time; EAT と呼ぶ (Lee 2011; Smirnova 2013)。発表者は、(i) =(y)mlş が生起する文において EAT は常に発話時点に対して過去に位置し、(ii) =(y)mlş が生起する文において EAT は相対時制の基準時点として機能する、と分析する。これらのことはそれぞれ、(2) を (2b) の文脈のもとで発話できないこと、および (2) のように =(y)mlş が生起する文において未来接辞が過去を表す時間副詞と共起可能になることから理解される。

- (2) a. [話者がアリの予定について話す根拠を 5 分前に入手して：]
b. # [話者がアリの予定について話す根拠を 5 分後に入手すると思って：]

Ali {dün gel-ecek=**miş** / yarın gel-ecek=**miş**.
Ali {yesterday come-FUT=EVID / tomorrow come-FUT=EVID}

「アリは {昨日来る予定だったそうさ／明日来る予定だ (った) そうだ}」

= (y)mlş のついた述語の時間的振る舞いは、(3) のように =(y)DI が示す絶対過去時制と類似している。

- (3) Ali {dün gel-ecek=**ti** / yarın gel-ecek=**ti**.
Ali yesterday come-FUT=PST / tomorrow come-FUT=PST}

「アリは {昨日来る予定だった／明日来る予定だった}」

= (y)DI と =(y)mlş のこの時制的類似は、未来時制以外の時制接辞に後続した場合にも確認される。このことから発表者は、=(y)mlş も =(y)DI と同じ時制的意味を有するために共起制限が起こる、と分析する。

本発表は、間接証拠性接語 =(y)mlş を時制のパラダイムに落とし込むことで、説明されていなかった =(y)DI と =(y)mlş の共起制限の理由を明らかにしたことで、トルコ語の文法記述に貢献する。さらに、通言語的に指摘されている過去時制と間接証拠性の意味的関連 (Aikhenvald 2004: 112–116) の研究にも貢献する。

参考文献：

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. NY: Oxford University Press.
- Göksel, Aslı & Kerslake, Celia. (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*. London: Routledge.
- Kornfilt, Jacklin. (1997) *Turkish*. London: Routledge.
- Lee, Jungmee. (2011) “The Korean evidential -te: a modal analysis”. O. Bonami & P. Cabredo Hofherr (eds.) *Proceedings of Colloque de Syntaxe et Sémantique à Paris 2009: Empirical Issues in Syntax and Semantics*. 8: 287–311.
- Smirnova, A. (2013) “Evidentiality in Bulgarian: Temporality, Epistemic Modality, and Information Source”. *Journal of Semantics*. 30: 479–532.
- Turkish Web 2020 (trTenTen20)*. <https://www.sketchengine.eu/trtnten-turkish-corpus/> [最終閲覧：2025/08/18]



E-4

ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ

坂本 遊野（京都大学）

キーワード：ヴェーダ語、印欧語族、統語論、フレーム意味論、頻度

ヴェーダ語（印欧語族、インド＝アーリヤ語派、14C–5C BCE）において、「〈人間〉が〈供物〉によって〈神〉に接待し、見返りとして〈報酬〉を得ようとする」という祭式フレームを共有する動詞群（以下、祭式動詞）は、多くが複数の格支配パターン（以下、格配列）を見せる。本発表で扱う *īd-*, *hvā-*「召喚する」、*dās-*, *vidh-*, *sapary-*「奉仕する」の五つの動詞は、主要な格配列としては〔自動詞型〕または〔他動詞型〕を取るが、それとは別に〔二重他動詞型〕や〔二重対格型〕などを副次的な格配列として実現しうる (1)。

- (1) 〔自動詞型〕〈人間〉＝主格、〈神〉＝与格
 〔他動詞型〕〈人間〉＝主格、〈神〉＝対格
 〔二重他動詞型〕〈人間〉＝主格、〈供物〉＝対格、〈神〉＝与格
 〔二重対格型〕〈人間〉＝主格、〈神〉＝対格、〈報酬〉＝対格

これまで、ヴェーダ語の祭式動詞の格支配への言及は Delbrück (1888) や Haudry (1977) に見られるが、これらはいずれも定性的な記述であり、どのような場合にどのような格配列が可能になるのかという説明は試みられていない。本研究はこれを受け、①リグ・ヴェーダの全在証に基づいた詳細な定量的記述と、②その結果に基づく副次的な格配列の生起要因の考察を行った。

定量的記述は次のような手順で行われた：①リグ・ヴェーダから該当の動詞を含む文を全て採取する；②各文に対して〈人間〉〈供物〉〈神〉〈報酬〉の各フレーム要素（FE）を特定し、どの格で実現されているかを記録する；③集計する。その結果、全在証例が (1) に挙げた四つの格配列のうちいずれかに該当することが分かった（表 1）。

表 1 祭式動詞と格配列の組み合わせ

	<i>īd-</i>	<i>dās-</i>	<i>vidh-</i>	<i>sapary-</i>	<i>hvā-</i>
〔自〕	×	◎	◎	×	×
〔他〕	◎	○	×	◎	◎
〔二他〕	○	○	○	○	×
〔二対〕	○	×	×	×	○

◎主要（最も高頻度） ○副次的 ×在証なし

表 2 FE の表現される割合（主要格配列のみ）

	<i>īd-</i>	<i>dās-</i>	<i>vidh-</i>	<i>sapary-</i>	<i>hvā-</i>
〈人間〉	90%	94%	100%	97%	100%
〈供物〉	31%	53%	68%	34%	18%
〈神〉	92%	78%	89%	90%	90%
〈報酬〉	33%	16%	0%	0%	24%

定量的な調査を通じて分かったこととして、各動詞の主要格配列において FE の表現される頻度と、可能な副次的格配列の関係が挙げられる。即ち、〔二重他動詞型〕を唯一取らない *hvā-* は他の動詞と比べて〈供物〉の頻度が低く、〔二重対格型〕を取る *īd-*, *hvā-* は他の動詞より〈報酬〉の頻度が高い（表 2）。ここで見られる相関は、動詞ごとに、複数の格配列に通底する共通の意味的基盤が存在すると仮定することで説明ができる。即ち、*hvā-* の表わす事態においては〈供物〉の際立ちが低く、それが一方では頻度の低さに、他方では〔二重他動詞型〕における対格項としての実現の抑制につながる。同様に、*īd-*, *hvā-* においては（〈人間〉〈神〉ほどではないが）〈報酬〉の際立ちが高く、それが一方では頻度の高さに、他方では〔二重対格構文〕における対格項としての実現につながる。その点で、一つの動詞による複数の項実現を、一方から他方への派生ではなく、一つの核的意味をもつ動詞と様々な統語的パターンとの互換性に条件付けられた組み合わせとして考える Goldberg (1995) のアプローチは、本研究の結果を適切に反映しうるものと言える。



参考文献：

Delbrück, Berthold. 1888. *Altindische Syntax*. Halle: Waisenhaus.

Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: A Construction Grammar approach to argument structure*. Chicago: Chicago University Press.

Haudry, Jean. 1977. *L'emploi des cas en védique*. Lyon: L'Hermes.



インドネシア語における与格交替の要因

高橋 翼 (東京大学大学院)

キーワード: インドネシア語、コーパス言語学、与格交替

【背景】与格交替は英語などで最も広く研究されてきた構文交替のひとつである。インドネシア語ではいくつかの動詞で与格交替が見られる。R (Recipient; 受取手) が間接目的語、T (Theme; 移動体) が直接目的語となる二重目的語構文 (1) と、T が単一の目的語となり R が前置詞句で現れる前置詞与格構文 (2) との交替である。

(1) *Ibu mem-beri/berikan* [_R *anak=nya*] [_T *baju baru*] (二重目的語構文)

mother AV-give child=3 clothes new

‘Mother gave her son a new shirt.’ (Sneddon et al. 2010:252, グロス は筆者)

(2) *Dia sudah mem-beri/berikan* [_T *uang itu*] [_R *kepada adik=nya*] (前置詞与格構文)

3SG PRF AV-give money that to younger.sibling=3

‘He has given the money to his brother.’ (Sneddon et al. 2010:97, グロス は筆者)

与格交替に最も典型的な「与える」を意味する動詞には *beri* と *beri-kan* の2つの形式がある。これらは取る構文の種類が異なると説明されている。規範的な言語使用では *berikan* は二重目的語構文では用いられにくく (Sneddon et al. 2010:97; Purwo 1997:247)、*beri* は前置詞与格構文では用いられにくい (Purwo 1997:247)。

【問題】 Sneddon et al. (2010:97, 252) や Purwo (1997:247) では *beri* と *berikan* で好まれる構文には言及があるが、それに反した構文がどのような場合に選択されるのか明らかでない。そこで本研究はより多くの変数に注目して2つの構文がどのようなときに用いられるか調査する。具体的には動詞の形式 (*beri* vs. *berikan*) に加えて Collins (1995) や Bresnan & Ford (2010) などの統計的アプローチによって示されている要因のうち、R と T の既知性、代名詞性や有生性といった談話上の卓越性や R と T の語数の差を変数として用いる。

【調査】 ウェブニュースコーパス (Leipzig Corpora Collection 2024) から *beri/berikan* を含む文を検索し、R と T が明示的に表れている文を目視で抽出しそれぞれアノテーションした。動詞の形式のほか通言語的に与格交替に関わりやすいパラメータのうちコーディングの可能な R と T の代名詞性、有生性、既知性、そして R と T の長さの差 (cf. Bresnan & Ford 2010; 佐近 2025) をタグ付けし、これらを予測変数、構文の種類を目的変数として一般化線形モデルに基づくロジスティック回帰分析を行った。

【結果】 今回調査した変数のうち有意であったのは R と T の長さの差 ($p = 0.00161$) および動詞の形式 ($p = 0.00203$) の2つであった。すなわち、R が T より長ければ長いほど、また *berikan* が使われるとき前置詞与格構文が用いられる確率が高い。全体を 100%とした内訳は *berikan* の前置詞与格構文が 82%、二重目的語構文が 5%、*beri* の前置詞与格構文が 8%、二重目的語構文が 6%であった。

【議論】 インドネシア語の与格交替では通言語的によく見られる与格交替の要因のうち R や T の談話的卓越性は効果を持たず、R と T の長さの差と動詞形式が構文選択の要因になっている。この2つのうち R と T の長さについては、その差が大きいときに短いほうを前置することで parsing の効率を高めていると考えられる (cf. Minimize Domains, Hawkins 2004)。2つめの要因である動詞形式について、*berikan* の接尾辞 *-kan* は前置詞与格構文の生起率を高めている。このように、本研究では量的なデータを用いてインドネシア語の与格交替の要因を示し、与格交替を含む複他動詞の構文交替の通言語的研究に貢献する。

参考文献

- Bresnan, Joan & Marilyn Ford. 2010. Predicting syntax: Processing dative constructions in American and Australian varieties of English. *Language*, 86(1), 168–213.
- Collins, Peter. 1995. The indirect object construction in English: An informational approach. *Linguistics*, 33(1), 35–49.
- Hawkins, John A. 2004. *Efficiency and Complexity in Grammars*. New York: Oxford University Press.
- Leipzig Corpora Collection. 2024. *Indonesian news corpus based on material from 2024*. Leipzig Corpora Collection. Dataset. https://corpora.uni-leipzig.de?corpusId=ind_news_2024
- Purwo, Bambang Kaswanti. 1997. The Direct Object in Bi-transitive Clauses in Indonesian. In Thomas Givón (ed.), *Grammatical Relations: A functionalist perspective*. 233–252. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 佐近優太. 2025. インドネシア語における随意的な適用態接尾辞-kan. 日本言語学会第 170 回大会.
- Sneddon, James N., K. Alexander Adelaar, Dwi Noverini Djenar, & Michael C. Ewing. 2010. *Indonesian: A comprehensive grammar*, 2nd edn. London: Routledge.



F-1

短単位版関西弁コーパスと関西方言 UniDic の構築

—関西方言書き起こしテキストの形態素解析—

小木曾智信・王竣磊・尹熙洙・岡田純子

キーワード：関西方言，コーパス，電子化辞書，形態素解析，UniDic

本研究は、関西方言を対象とした形態素解析環境の整備を目的とする一連の取り組みを報告する。従来、日本語の標準語の書き言葉・話し言葉や歴史的資料に対してはそれぞれに特化した形態素解析用辞書 UniDic が開発され、共通の見出し語設計のもとで実用的な精度で解析が可能になっている（伝ほか 2007、小木曾ほか 2013）。しかし、方言資料については形態素解析が行えなかった。『日本語諸方言コーパス（COJADS）』（国立国語研究所 2023）も標準語訳への解析にとどまり、方言そのものを対象とした形態素解析は未整備である。

そこで我々は、現代語用 UniDic を基盤に関西方言用の形態素解析辞書を構築し、未登録語や方言特有の助動詞を追加・整備した（小木曾ほか 2024, 2025）。また「関西弁コーパス」（ケビン・ヘファナン 2012）を短単位に再構築し、約 171 万語に形態論情報を付与した「短単位版関西弁コーパス」を整備した。このうち約 77.5 万語は人手で確認・修正を行い、形態素解析器 MeCab（Kudo et al. 2004）による機械学習用のコーパスとして整備した（尹ほか 2025）。今回、新たに短単位版関西弁コーパス ver.1.0 を公開し、誤りや問題点を修正するとともに、関西方言についての規定を細部まで検討し再整備した。たとえば否定を表す「なんだ」については、もともと 1 つの短単位としていたものを「なん | だ」の 2 短単位に分け、「なん | だり」や「なん | でん」なども処理できるように整備した。これにより既存の UniDic との整合性を高めるとともに、他の方言への拡張可能性も視野に入れた設計を実現した。

この辞書の評価実験として、COJADS に収録された関西方言データ（カタカナ分かち書き文）の一部を漢字仮名交じり文に書き換えた資料を新たに用意し、関西方言 UniDic による解析精度を確認してその有効性を検証した。その結果、関西方言の助詞・助動詞を中心とする機能語の解析精度が向上し、より頑健な解析が可能となった。

さらに、更新した関西方言 UniDic をダウンロード可能な形で公開するとともに、オンラインツール「Web 茶まめ」（堤・小木曾 2023）で利用できる形で公開することで、研究者が自由に利用できる環境を整えた。これにより、他の時代・レジスターの UniDic と共通の設計にもとづいて、広域の関西方言会話データを対象にした形態素解析を行って比較することが可能となった。こうして日本語方言研究資する基盤的リソースを確立するとともに、他の方言の解析に向けた足がかりとした。

参考文献：

- 伝康晴・小木曾智信・小椋秀樹・山田篤・峯松信明・内元清貴・小磯花絵 (2007) 「コーパス日本語学のための言語資源：形態素解析用電子化辞書の開発とその応用」『日本語科学』No.22, pp.101-123.



- 小木曾智信・小町守・松本裕治 (2013) 「歴史的日本語資料を対象とした形態素解析」『自然言語処理』 Vol.20, No.5, pp.727–748.
- Kudo, Taku; Yamamoto, Kaoru; Matsumoto, Yuji (2004) “Applying conditional random fields to Japanese morphological analysis.” EMNLP 2004, pp.230–237.
- ケビン・ヘファナン (2012) 「関西弁コーパスの紹介」『総合政策研究』 No.41, pp.157–163.
- 小木曾智信・尹熙洙・王竣磊・岡田純子 (2024) 「関西方言を対象とした形態素解析用辞書の開発」『言語処理学会 第 30 回年次大会発表論文集』.
- 尹熙洙・王竣磊・岡田純子・小木曾智信 (2025) 「短単位版『関西弁コーパス』の構築と予備的分析」『言語処理学会 第 31 回年次大会発表論文集』.
- 小木曾智信・尹熙洙・王竣磊・岡田純子 (2025) 「関西方言を対象とした形態素解析用辞書の拡張」『言語処理学会 第 31 回年次大会発表論文集』.
- 堤智昭, 小木曾智信(2023) 「複数の UniDic 辞書による形態素解析支援ツール『Web 茶まめ』の実装と運用」『情報処理学会論文誌』 Vol. 64, No. 3, pp. 749–757.
- 国立国語研究所 (2023) 『日本語諸方言コーパス (COJADS)』 国立国語研究所.
<https://cojads.ninjal.ac.jp/>



F-2 九州方言と北琉球語における「歩く」を表す動詞の補助動詞用法:複数行為性の観点から

松岡葵(東京外国語大学/日本学術振興会) oash7499@gmail.com

キーワード:九州方言, 北琉球語, 記述言語学, 文法化, 複数行為性

本発表は、九州方言と北琉球語における「歩く」を表す動詞の補助動詞用法に注目し、事象の複数性を標示するカテゴリである複数行為性(pluractionality; Newman1980, Mattiola 2019)の観点から、その機能と文法化経路を明らかにすることを目的とする。九州方言と北琉球諸語においては「歩く」が補助動詞として用いられる(九州:宮崎県椎葉村尾前方言(占部 2016, 下地・占部 2016), 北琉球:久米島謝名堂方言, 沖永良部正名方言, 謝名方言(ファンデルルベ 2015), 伊江島方言(橋尾 1993))。これらの方言では「歩く」がアスペクトを表すと指摘されており、反復, 習慣, 進行のうちどのアスペクトを表しうるかという共時的記述, 「歩く」がどのような文法化の結果アスペクトを表すようになったかという通時的観点の議論がなされてきた(ファンデルルベ 2015)。

先行研究は「歩く」の補助動詞用法をアスペクト体系の一部として位置づける一方、複数行為性の観点からの考察は十分におこなっていない。しかし、複数行為性の観点は、九州方言・北琉球語における「歩く」の共時的・通時的議論をおこなう上で重要である。まず、すべての方言において「歩く」がアスペクトを表すわけではない。福岡県柳川方言においては、(1)に示すように、「歩く」が反復, 習慣, 進行を表さず、これらを表すには未完了接辞-yorが必要である。柳川方言の「歩く」は、(2)のように同一主体があちこちである動作をするという場所的散在(spatial distributive; Mattiola 2019), あるいは(3)のように同一主体による移動をとこなう動作であることを表す。

(1) 進行

taroowa ima hasitte {sarukiyoru/*saruku}.

太郎は 今 走って {歩く.PROG.NPST/*歩く.NPST} 「太郎は今走りまわっている。」(フィールドデータ)

(2) 場所的散在

(atikotide) geemu site sarukiyotta.

(あちこちで) ゲーム して 歩く.PROG.PST

「(あちこちで)ゲームをしていた。」

(3) 移動を伴う動作

iwano korogete sarukiyoru.

岩が 転がって 歩く.PROG.PST

「岩が転がっている。」

これまで「歩く」がアスペクトを表すと記述されてきた方言でも、「歩く」は場所的散在を表す可能性がある。例えば、伊江島方言の「歩く」は、単なる進行ではなく、あるイベントが複数主体によってあちこちで進行していることを示す場合がある(橋尾 1993)。尾前方言の「歩く」は、単なる進行ではなく、標準語の「～してまわる」のように「散発的・多回的な進行」(下地・占部 2016: 69)を表す。

複数行為性の研究では、「行く」、「歩く」など移動を表す語彙的な動詞が場所的散在を表す標識に文法化しうること、場所的散在, 事象の複数回の生起といった複数行為性を標示する標識がアスペクト標識に変化しうることが知られる(Mattiola 2019)。本発表は、九州方言と北琉球語を比較することで、「歩く」という語彙的な動詞が場所的散在を経てアスペクトを標示するようになりつつある(なった)可能性を指摘する。

本発表の貢献は以下の二点である。まず、九州方言, 北琉球語における「歩く」の補助動詞用法について、アスペクトだけでなく複数行為性にも注目すべきことを示す。次に、同一語族における「歩く」の補助動詞用法のバリエーションを明らかにすることで、複数行為性とアスペクトの類型論に資するデータを提供する。



参照文献

- ファンデルルベ・ハイス (2015) 「沖永良部語正名方言における動詞 ? akkimu の文法化」『琉球の方言』39: 75-85.
- 橋尾直和 (1993) 「伊江島方言のテンス・アスペクトに関する一考察」『人文学報』243: 23-45.
- Mattiola, Simone. (2019) *Typology of Pluractional Constructions in the Languages of the World*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Newman, Paul (1980) *The classification of Chadic within Afroasiatic*. Leiden: Universitaire Pers.
- 下地理則・占部由子 (2016) 「アスペクト体系記述の中間報告」下地理則・小川晋史・新永悠人・平塚雄亮・坂井美日 (編) 『尾前調査班 中間報告書 —宮崎県椎葉村尾前方言簡易語彙集と文法概説—』61-81. 立川: 国立国語研究所.
- 占部由子 (2016) 「宮崎県椎葉村尾前方言におけるアスペクトの体系」卒業論文, 九州大学.



キーワード:琉球祖語、歴史言語学、強勢言語

琉球祖語に再建される語彙のうち、(1) *uma^{ga} ‘孫’, (2) *weke^{ga} ‘男’, (3) *wekeri ‘男兄弟’, (4) *wena^{go} ‘女’, (5) *wonari ‘女兄弟’ は、基礎的な意味を持つにも関わらず、その語源について十分な説明がなされていない。本発表では、これらの語を強勢と位置によって条件づけられる母音交替を持つ日琉系の言語変種(本発表では「借用元方言」と称する)からの借用として説明し、琉球祖語と日本語の間に見られる変則的な子音対応の一部が同じ借用元方言からの借用によるものであることを示す。

本発表で「日本語」は、琉球祖語と概ね同時期と思われる形を引用する。また、現代語形以外の濁音は、前鼻音化を反映する表記に統一する(*g* を *g* にする)。

1. 先行研究による語源説

上記の5語の問題の所在は、日本語の *-go* と対応すると思われる指小接尾辞が (1), (2) では **-ga*, (4) では **-go* という2つの形式を持つこと、そして (4) と (5) の第1音節の母音が **e* と **o* で一致しないことである。

中本(1979: 121–123)は、(2)について論じながら **-ga* を **-go* に「愛称辞の *a*」が付いた形として前者の現象を説明した。しかし、「愛称辞の *a*」(発表者の再建では **-ja*)が付いた語は首里方言で語末母音が長くなるが(例えば **ateo:du* ‘商人’ に対する **ateo:da:*)、(1), (2) は語末母音が短い。また、中本(1979)は (4) の北琉球における反映のうち、第1音節に *o, u* を持つ例を挙げ、**wona^{go}* に再建することによって後者の問題を回避しているが、(4) の **e* の反映の *o, u* は規則的な音変化によって説明できる可能性があり(ローレンス 2019: 100 参照)、逆に **o* を再建すると首里方言のように *i* を持つ形が説明できなくなるため、琉球祖語には **wena^{go}* を再建するのが妥当である。

村山(1981: 164–169)は、(4)と日本語 *wonna^{go}* の類似を指摘し、第2音節の母音 **a* の影響による部分的な同化で **o* が非円唇化して **e* になったとしたが、(4)と同様の音韻環境を持つ (5) が説明できない。セリック(2022)は、(1)の **-ga* を宮古語 *futaga* ‘双子’ と同じ音韻対応によるものとしているが、北琉球で *-gwa(:)* を持つ形式に対して南琉球で *-ga* が現れる場合は、北琉球から南琉球への古い借用と考えるべきである。例えば、宮古語 *muri:ni* ‘子守り姉’ に含まれている *ani < *ane* ‘姉’ と *anga* ‘姉’ の *an* の不一致は、後者を首里方言 **ang^a:* の借用とすることによって説明できる。したがって、(1)は‘双子’と同じ音韻対応ではない。

2. 強勢言語からの借用による説明

(4)と日本語 *wonna^{go}* の対応は偶然とは考えられないが、後者の *wonna* の部分は上代日本語 *womina* に由来する改新的な形であるため、(4)と *wonna^{go}* は共通の祖形に遡るとするより、借用の結果と考えるのが妥当である。借用の際に、何らかの理由によって第1音節の母音が **e* として反映された。同様に、(1), (4)の第3音節の母音も、日本語の *o* に対応する母音が **a* として反映された。

日本語 *o ::* 琉球祖語 **a* の対応は語末に限られ、逆に *o :: *e* は語末以外に限られた分布を示す。(2), (3)の **weke* に対応する語は日本語には見られないが、*wonoko* または *wotoko* に対応するもの(*wonna* の影響で2音節にしたもの)とし、(2), (3)の **e* も日本語の *o* に対応するものと考え、*o :: *e* は一つの語の中で複数回現れることができるということになる。また、*o :: *a* と *o :: *e* は共起しない。

借用元方言において、語彙強勢を持つ言語体系を想定すると、強勢を持つ **ó* は語末では **a*、非語末では **o* として借用され、強勢を持たない **ò* は語末では **o*、非語末では **e* として借用されたという規則を見出すことができる。強勢言語においては、強勢音節の強化と非強勢音節の弱体化が起こりうるため(Hyman 1975: 208)、例えば [ə] に中舌化した **ò* が **e* として借用されることや、[ɔu] に二重母音化した **ó / _#* が **a* として借用されることは、十分に想像できる現象といえる(ケベック州フランス語における同様の二重母音化について Dumas 1974 参照; また、**a* として借用されることについては、意志を表す語尾 *-au < -amu* や漢語の語末 *au* の例を参照; 中澤ほか 2020)。強勢の位置は、日本語の低起式に対応する語では語末、高起式に対応する語ではラテン語(Allen 1973)に似た規則による。

3. 借用元方言の強勢以外の特徴

日本語と琉球祖語の間には、*s :: Ø* や *ti, tu :: *si, *su* の変則的な対応を示す語があり、(6) *sore :: *ore* ‘それ’, (7) *se^mba- :: *e^mba-* ‘狭い’, (8) *tu^mba :: *su^mba* ‘唇’ などが挙げられるが、(9) *sukuna-* (< **sokona-*) :: **ekera-* では *s :: Ø* と *o :: *e* が共起し、(10) *ukon~ukkon* (< **utikōmu*) :: **usikeni* ‘鬱金’ では *ti :: *si* と *o :: *e* が共起するため、(6), (7), (8) も同じ借用元方言からの借用語であることがわかる。(4), (5)の **n* は *nn* に対応するため、(9)の *n :: *r* は (4), (5)と矛盾しない。むしろ、*n :: *r* の対応によって、(3), (5)の **-ri* を *ani* ‘兄’ と比較できるようになる。

(8)のように語頭に *s* を持つ‘唇’の形は、宮崎県南部及び鹿児島県にも見られるため(五十嵐 2022: 15)、借用元方言はかつて九州で話されていた基層方言であると考えられる。

参考文献:

- Allen, W. Sidney (1973) *Accent and rhythm. Prosodic features of Latin and Greek: A study in theory and reconstruction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- セリック・ケナン (2022)「上代日本語の甲類の α_1 に対する琉球祖語のもう一つの音対応について」『日本語学会 2022 年度春季大会予稿集』115-120.
- Dumas, Denis (1974) “Durée vocalique et diphtongaison en français québécois”. *Cahier de linguistique* 4: 13-55.
- Hyman, Larry M. (1975) *Phonology: Theory and analysis*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 五十嵐陽介 (2022)「琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統」言語系統樹ワークショップ, 2022 年 12 月 25 日, 沖縄県立博物館・美術館.
- ウェイン・ローレンス (2019)「竹富島方言アクセント (2)」『琉球の方言』43: 97-129.
- 村山 七郎 (1981)『琉球語の秘密』東京: 筑摩書房.
- 中本 (1979)「首里王朝の言語 (2) 人間関係の性・年令・親疎等を基準とする語彙」『琉球の方言』5: 117-151.
- 中澤 光平・セリック ケナン・麻生 玲子「南琉球諸語における漢語の借用時期と音変化の相対年代」『日本語学会 第 161 回大会 予稿集』78-84.



Keywords: Estonian, Russian, Ukrainian, multilingualism, receptive multilingualism, language attitudes.

Estonia represents a highly diverse multilingual context. Estonia has a population of 1.37 million, of which approximately 21.6% belong to the Russian minority, the country's largest minority group. Although Estonian (Finno-Ugric, Uralic) and Russian (Indo-European, East Slavic) are unrelated languages, long-standing contact has fostered communication between interlocutors of these languages using Receptive Multilingualism (RM) (Bahtina-Jantsikene, 2013). In this mode of communication, interlocutors use their respective native languages while still managing to understand one another without relying on a lingua franca (Rehbein et al., 2012).

Since 2022, Estonia has experienced a significant influx of Ukrainian refugees. Around 34,000 Ukrainian war refugees arrived in Estonia (as of 20 October 2024). While Estonian and Ukrainian are unrelated, Ukrainian and Russian are closely related (both East Slavic). Consequently, Estonians are able to understand Ukrainian indirectly through their knowledge of Russian. This process is referred to as mediated RM (Branets et al, 2020).

Linguistic factors such as typological proximity and language proficiency are known to play an important role in establishing mutual understanding in RM. However, comprehension cannot be explained only by linguistic factors; a range of extra-linguistic factors also come into play, including metalinguistic awareness, experience in multilingual settings, exposure to different languages or registers, situational context, language variations, instructions, etc. (Gooskens, 2006, 2007; Gooskens & Schneider, 2019; Schüppert & Gooskens, 2011; Gooskens & van Heuven, 2019; Branets & Verschik, 2021; Branets & Bahtina, 2021).

This study investigates the communication between Estonians and Ukrainians through RM, with a particular focus on the role of language attitudes. A total of 20 Estonian and Ukrainian participants completed an Implicit Association Test (IAT) to measure implicit language attitudes towards Estonian and Ukrainian, and after that, filled in a questionnaire to find out socio-linguistic information about the participants. Subsequently, they were paired (one Ukrainian and one Estonian) and engaged in conversations using the MapTask method.

The findings reveal a clear relationship between implicit language attitudes and conversational success. The results suggest that positive attitudes facilitate communication in challenging situations, whereas negative attitudes may hinder it. Furthermore, a range of metacommunicative strategies was identified, including guessing, repetition, and various forms of accommodation.



References:

- Bahtina-Jantsikene, D. (2013). *Mind your languages: Lingua receptiva in Estonian-Russian communication* (Doctoral dissertation). LOT.
- Branets, A., Bahtina, D., & Verschik, A. (2020). Mediated receptive multilingualism: Estonian–Russian–Ukrainian case study. *Linguistic Approaches to Bilingualism*, 10(3), 380–411. <https://doi.org/10.1075/lab.17079.ver>
- Branets, A., & Bahtina, D. (2021). Comprehension of Ukrainian by Estonians via Russian: Structural and extra-linguistic aspects. *Russian Journal of Linguistics*, 25(4), 1071–1102. <https://doi.org/10.22363/2687-0088-2021-25-4-1071-1102>
- Branets, A., & Verschik, A. (2021). The role of language exposure in mediated receptive multilingualism. *Lähivõrdlusi. Lähivertailuja*, 31, 60–89. <https://doi.org/10.5128/LV31.02>
- Gooskens, C. (2006). Linguistic and extra-linguistic predictors of inter-Scandinavian intelligibility. *Linguistics*, 44(5), 1029–1046. <https://doi.org/10.1515/LING.2006.033>
- Gooskens, C. (2007). The contribution of linguistic factors to the intelligibility of closely related languages. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 28(6), 445–467. <https://doi.org/10.2167/jmmd511.0>
- Gooskens, C., & Schneider, K. (2019). Testing mutual intelligibility in practice: A comparison of four experimental methods. *Linguistics Vanguard*, 5(s2), 20180008. <https://doi.org/10.1515/lingvan-2018-0008>
- Gooskens, C., & van Heuven, V. J. (2019). How well can intelligibility of closely related languages in Europe be predicted by linguistic and non-linguistic variables? *Linguistic Approaches to Bilingualism*, 10(3), 351–379. <https://doi.org/10.1075/lab.17084.goo>
- Rehbein, J., ten Thije, J. D., & Verschik, A. (2012). Lingua Receptiva (LaRa): The quintessence of receptive multilingualism. *International Journal of Bilingualism*, 16(3), 248–267. <https://doi.org/10.1177/1367006911426466>
- Schüppert, A., & Gooskens, C. (2011). Investigating the role of language attitudes for perception abilities using reaction time. *Language Awareness*, 20(2), 177–190. <https://doi.org/10.1080/09658416.2010.540270>



シメーク語、南ブーゲンヴィル語族、パプア諸語、記述言語学、音韻論

【背景】 シメーク語はパプアニューギニアのブーゲンヴィル島の中央地域で話されている言語である。調査協力者によると、シメーク語は Matana, Boira, Kopei の 3 つのコミュニティー (村々が属する共同体) で話されている。Allen & Hurd (1965) はシメーク語をナーシオイ語 (南ブーゲンヴィル語族 (Ross 2000)) の下位変種であるとしているが、調査協力者たちはナーシオイ語をシメーク語とは異なった言語であると捉えている。両言語の話者の間の相互理解性も限定的である。発表者の知る限り、シメーク語についての研究は Brown & Irvine (2021) のみである。しかし、この研究の主眼は近隣の Avaipa 語にあり、シメーク語についてはごくわずかの基礎語彙の調査にとどまっている。このように、ほとんど未記述の言語であるシメーク語についての本発表は学問的価値が高い。発表者が行ったフィールドワークの調査に基づき、シメーク語の音韻構造について包括的な報告を行うことを目標とする。

【方法】 本発表は発表者がブーゲンヴィル島の中央地域にある Matana コミュニティーの Toranka 村で行ったフィールドワーク調査に基づくものである。期間は 2025 年 8 月 5 日から 9 月 18 日 (予定) である。調査協力者は、現時点では、80 代の男性、70 代の女性、70 代の男性、20 代の女性の 4 名である。調査の中で 500 余の基礎語彙を収集した。本発表ではこの基礎語彙集に基づき、シメーク語の音韻構造について報告する。

【結果】 子音音素は、/p/, /b/, /m/, /t/, /d/, /n/, /s/, /r/, /k/ が立てられる。ただし、/b/ は有声両唇摩擦音 [β] やその摩擦が弱化した音として実現されることが多い。/r/ は [ɾ] として実現される。有声性については、*baaro* 「布」 vs. *paaro* 「野生の男」や、*ta:* 「～を越えて」 vs. *da:* 「2 人称複数代名詞」のミニマルペアについて対立が示される。なお、/g/ は 1 例も確認されていない。鼻音性については、*nar* 「1 人称包括複数代名詞」 vs. *dar* 「2 人称包括複数代名詞」や、*bakota* 「母」 vs. *makota* 「太もも」のミニマルペアについて対立が示される。なお、[ŋ] は /k/ の直前でのみ観察され、[n] は /k/ の直前以外の環境で観察されることから、[ŋ] と [n] は音素 /n/ の異音であると考えられる。母音音素は /i/, /e/, /a/, /o/, /u/ とそれぞれの長母音が立てられる。長短の対立は、/e/ vs. /e:/ (*morebau* 「来る.PAST.NEG.1DU」 vs. *more:bau* 「来る.PAST.NEG.1PL.EXCL」)、/a/ vs. /a:/ (*ita* ‘fire’ vs. *ita:* ‘grasshopper’)、/u/ vs. /u:/ (*duta* 「目」 vs. *du:ta* 「穴」) の 3 種がミニマルペアによって示されている。残りの 2 種についても、同様の環境でそれぞれが観察されており、音素としての対立があると考えられる。音節構造は、(C)(C)V(V)(C) が確認されている。CCV(V)(C) の例は *ŋkota* 「母」、*ŋkanke* 「私の」、*mmata* 「父」の 3 例のみが確認されている。音節の初めが複数子音となっている 3 例すべての先頭子音が共鳴性を持つ鼻音であることは、この先頭子音が音節主音性を持っており、実際に許される音節構造は (C)V(V)(C) であることを示唆している。

【周辺言語との関連】 シメーク語は Brown & Irvine (2021) において、Avaipa 語に近いとされ、Allen & Hurd (1965) ではナーシオイ語の下位変種とされている。Brown & Irvine (2021) に示されている Avaipa 語とナーシオイ語の音素表に基づく、両言語ではシメーク語と同様に /g/ が存在しない。一方で、両言語では /ŋ/ が音素として存在するが、本発表が基づく調査によればシメーク語には /ŋ/ は音素としては存在しない。

参考文献

- Allen, Jerry, and Conrad Hurd. (1965) *Languages of the Bougainville district*. Port Moresby: Department of Information and Extension Services. (発表者未見)
- Brown, Jason, and Melissa Irvine (2021) Avaipa, a Language of Central Bougainville. *Oceanic Linguistics* (60-1) pp. 1-35. University of Hawai'i Press.
- Ross, Malcolm D. (2000) Is there an East Papuan Phylum? Evidence from pronouns. In Pawley, Andrew, Ross, Malcolm and Tryon, Darrell (eds), *The Boy from Bundaberg: Studies in Melanesian Linguistics in Honour of Tom Dutton*, pp. 301–321. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.



Keywords: Japanese, Existential Predicates, Animacy Agreement, Lexical-Maze Task

Although Japanese is often described as lacking robust morphological agreement, the language encodes a categorical lexical agreement between subject animacy and existential verb choice: *iru* (animate) vs. *aru* (inanimate) (Kishimoto, 2000). Substituting the incorrect verb yields ungrammatical sentences in typical usage (e.g., **neko-ga aru* ‘there is a cat’). While animacy has been shown to guide comprehension in Japanese relative clauses (Mitsugi & Shirai, 2015) and topicalization (Tanaka et al., 2011), few studies have directly tested whether existential verb selection triggers online sensitivity to animacy agreement.

The present study employed the lexical maze (L-Maze) paradigm (Forster, Guerrero, & Elliot, 2009), a task in which participants incrementally construct sentences through forced lexical decisions. At each region, the participant must choose between two words on the screen, a permissible Japanese word and a non-word in Japanese script. For each series, when the participant selects all the correct words, they incidentally have built and parsed a Japanese sentence. Importantly, if they make a mistake, the series is broken, and the next sentence begins. Thirty-two native Japanese speakers completed 32 experimental items consisting of noun-modifying clauses headed by animate or inanimate nouns, paired with either congruent or incongruent existential verbs. Reaction times were analyzed using linear mixed-effects modeling.

Region 1	Region 2	Region 3	Region 4	Region 5	
Adverb	Locative	Existential	Target.Noun	Matrix.Verb	
昨日	庭に	いた/*あった	犬が	吠えた。	
<i>kinō</i>	<i>niwa-ni</i>	<i>ita/*atta</i>	<i>inu-ga</i>	<i>hoeta</i>	
yesterday	yard-LOC	exist-PAST	dog-NOM	bark-PAST	Animate
‘The dog that was in the yard barked yesterday.’					
昨日	港に	あった/*いた	船が	沈んだ。	
<i>kinō</i>	<i>minato-ni</i>	<i>atta/ita</i>	<i>fune-ga</i>	<i>shizunda</i>	
yesterday	Harbor-LOC	exit-PAST	boat-NOM	sink-PAST	Inanimate
‘The ship in the harbor sank yesterday.’					

Results revealed significantly longer reaction times when existential verbs mismatched noun animacy (Animate: $p < .05$; Inanimate: $p < .01$), with effects localized at the head noun region. For inanimate nouns, this sensitivity persisted into the following matrix verb region ($p < .01$), suggesting robust processing difficulty. For animate nouns, however, sensitivity diminished over the course of the experiment as indicated by an interaction of grammaticality and trial order ($p < .05$). This interaction is consistent with lexical variability effects (Hopp, 2016; Mansbridge & Tamaoka, 2018) whereby repeated exposure to violations reduces parser sensitivity. Corpus data from the Tsukuba Web Corpus further suggest that frequency asymmetries between *aru* and *iru* may underlie this asymmetry in variability.

These findings indicate that Japanese animacy agreement, though lexical rather than morphological, nonetheless imposes strong predictive constraints during incremental parsing, paralleling agreement effects documented in morphologically rich languages (e.g., Silva-Pereyra & Carreiras, 2007; Roberts & Liszka, 2013). Crucially, the study demonstrates that the L-Maze, despite its simplicity, is a viable tool for capturing localized sensitivity to agreement phenomena in head-final languages with flexible word order (see also Qiao, Shen, & Forster, 2012).

In conclusion, animacy agreement violations in Japanese existential constructions generate measurable online processing costs, confirming that even lexically mediated agreements can engage predictive parsing mechanisms. This research highlights the broader role of animacy in shaping sentence processing and underscores the methodological value of the L-Maze for experimental psycholinguistics in East Asian Languages.

References:

- Forster, K. I., Guerrerera, C., & Elliot, L. (2009). The maze task: Measuring forced incremental sentence processing time. *Behavior Research Methods*, 41(1), 163–171.
- Hopp, H. (2016). Learning (not) to predict: Grammatical gender processing in second language acquisition. *Second Language Research*, 32(2), 277–307. h
- Kishimoto, Hideki. (2000). Locational verbs, agreement, and object shift in Japanese. *The Linguistic Review*, 17(1), 53.
- Mansbridge, M. P., & Tamaoka, K. (2018). The (in)sensitivity of plural -s by Japanese learners of English. *Open Journal of Modern Linguistics*, 8(5), 176–198.
- Mitsugi, S., & Shirai, Y. (2015). The acquisition of relative clauses in L2 Japanese: Evidence from eye-tracking. *Applied Psycholinguistics*, 36(6), 1317–1343.
- Qiao, X., Shen, L., & Forster, K. I. (2012). Relative clause processing in Mandarin: Evidence from the maze task. *Language and Cognitive Processes*, 27(4), 611–630.
- Roberts, L., & Liszka, S. A. (2013). Processing tense/aspect-agreement violations on-line in the second language: A self-paced reading study with French and German L2 learners of English. *Second Language Research*, 29(4), 413–439.
- Silva-Pereyra, J. F., & Carreiras, M. (2007). An ERP study of agreement features in Spanish. *Brain Research*, 1185, 201–211.
- Tanaka, M. N., Branigan, H. P., McLean, J. F., & Pickering, M. J. (2011). Conceptual influences on word order and voice in sentence production: Evidence from Japanese. *Journal of Memory and Language*, 65(3), 318–330.



G-2

Unexpected patterns of genitives across languages in the context of Shibatani's nominalization theory

Kazuhiro Kawachi (kawachi@keio.jp), Maho Naito, and Tatjana Ilic

Keywords: Sidaama (Cushitic, Ethiopia), Swedish, Oceanic, typology, classifiers, gender markers, nominalization

This study investigates the use of classifying nominalization markers—particularly so-called classifiers and gender markers—in deriving grammatical nominalizations in Sidaama, Swedish, and Oceanic languages, within the framework of Shibatani's (2009, 2017, 2018a, 2018b, 2019, 2021, 2023) nominalization theory, and it addresses apparently challenging cases of genitives for his hypothesis.

Shibatani (2021, 2023) hypothesizes that classifying nominalization markers are (i) more likely to obligatorily occur with elements that rank higher on the implicational hierarchy—'Numerals > Demonstratives > Genitive noun phrases > Adjectives > Verb-based nominalizations (such as relative clauses)'—than with those lower on the hierarchy (the structural dimension), and (ii) more likely to occur with a given type of element when it is used to form a 'noun phrase without a (head) noun' (Dryer 2004) (in noun-phrase use) than when it is used to modify a noun (in modification use) (the functional dimension).

The journal issue that we edited (AUTHOR 1 et al., forthcoming) examined data from two language families in South America and India, as well as 15 languages investigated by 22 researchers—four from Africa, nine from Asia, and two from Europe. The study found that although the data from all the languages perfectly support Shibatani's hypothesis along the functional dimension and the data from the two language families and seven of the languages also confirm his hypothesis along the structural dimension, the use of classifying nominalization markers in eight languages exhibits patterns not predicted by the hypothesis along the structural dimension. The most common deviation, found in six languages, involves genitive noun phrases. The use of classifying nominalization markers with genitive noun phrases is disallowed in two languages, Lan Hmyo (Taguchi, forthcoming) and Marathi (Kelkar & Pardeshi, forthcoming), and that is optional in two, Sinhala (Miyagishi, forthcoming) and Vietnamese (Shimizu & Phan, forthcoming), even though it is obligatory with elements lower on the hierarchy.

This study reports more complex instances of this pattern in two languages exhibiting this pattern (Sidaama and Swedish) and provides additional seemingly challenging data from one language family (Oceanic languages).

Sidaama has two types of gender markers that distinguish between feminine and masculine gender. One is an enclitic used to form a singular noun phrase and the other consists of allomorphs of the nominative, the genitive, and the dative-locative case suffixes. The enclitic obligatorily marks gender on genitive noun phrases and verb-based nominalizations in noun-phrase use, and optionally on these elements in modification use. It does not mark gender on numerals or adjectives in either use. In contrast, the case suffixes obligatorily mark gender on numerals and adjectives in both noun-phrase and modification uses, but not on genitive noun phrases in either use. Both types of markers are analyzed as part of demonstratives. Therefore, each type of gender marker independently deviates from Shibatani's hypothesis along the structural dimension. Even taken together, the two types only optionally mark gender on genitive noun phrases in modification use, revealing a gap in the hierarchy.

Swedish marks the so-called gender—more accurately, classifier-like marking based on a largely animacy-driven common vs. neuter distinction—using two strategies: different gender forms (or suffixes) and singular articles. The former is used with the numeral 'one' and with demonstratives, but only to a limited extent, if at all, with other types of elements. The latter strategy applies with demonstratives, adjectives, and verb-based nominalizations, but not with numerals or genitive noun phrases. Cross-linguistically, classifying nominalization markers are sometimes restricted to 'one' or to low numerals, which makes the absence of marking in genitive noun phrases a challenge for Shibatani's hypothesis along the structural dimension.

Most Oceanic languages have possessive classifiers (e.g., AUTHOR 2 2005, 2011) inherited from Proto-Oceanic, which classify alienably or indirectly possessed items into categories such as food, drink, and other items—maintaining the same or a similar classification system. These possessive classifiers are restricted to genitives (François 2023) and cannot be used with numerals or demonstratives, which are higher on the hierarchy, although some Oceanic languages—including Micronesian languages such as Kiribati and Nauru—have newly developed classifiers devoted to numerals. Even considering both types of classifiers together, these languages appear to deviate from Shibatani's hypothesis along the structural dimension.

This study shows that Sidaama and Swedish, on the one hand, and Oceanic languages, on the other, have different motivations for the unexpected patterns observed with genitives. Marking with classifying nominalization markers is absent in Sidaama genitive noun phrases in modification use and in Swedish genitives in both noun-phrase and modification uses, reflecting a crosslinguistic tendency for possessed nouns to denote definite entities and thus make the entire phrase definite (Haspelmath 1999). Redundant marking of the referent's property is disfavored in these languages. In particular, in Sidaama, when a noun is modified, the referent is obvious. By contrast, adjectives and verb-based nominalizations may denote definite or indefinite entities, making the use of classifying nominalization markers informative.

Possessive classifiers, however, are not classifying nominalization markers. They classify the possessive relationship rather than denotations, forming a constituent with a genitive noun phrase. Therefore, they fall outside the scope of Shibatani's nominalization theory.



References:

- AUTHOR 1 et al. Forthcoming. Nominalization with classifying nominalization markers across languages: Introduction to the special issue. *Journal of Foreign Language Education, Special issue*.
- AUTHOR 2. 2005. Tutuba-go no shoyuuhyoogen: Oseania no gengo to no hikaku (Possessive expressions in Tutuba: A comparison with other Oceanic languages). *Dynamis* 9, 1–38.
- AUTHOR 2. 2011. *Tutuba-go: Kijutsu-gengogaku-teki kenkyuu (Tutuba: A descriptive study)*. Kyoto University Press.
- Dryer, Matthew S. 2004. Noun phrases without nouns. *Functions of Language* 11.1, 43–76.
- François, Alexandre. 2023. Grammars of possession in the Torres–Banks linkage: A comparative study. Paper given at the 2023 Vanuatu languages conference, organized by Max Planck Institute–EVA. Port Vila, Vanuatu, on July 13, 2023.
- Haspelmath, Martin. 1999. Explaining article-possessor complementarity: Economic motivation in noun phrase syntax. *Language* 75, 227–243.
- Kelkar, Manasi and Prashant Pardeshi. Forthcoming. Distribution of classifier and gender marking in Southern Marathi as compared to Pune Marathi: A preliminary report from a nominalization perspective. *Journal of Foreign Language Education, Special issue*.
- Miyagishi, Tetsuya. Forthcoming. Nominalizations with classifiers and gender markings in Sinhala: Usage patterns from online sources. *Journal of Foreign Language Education, Special issue*.
- Shibatani, Masayoshi. 2009. Elements of complex structures, where recursion isn't: The case of relativization. In Talmy Givón and Masayoshi Shibatani. (eds.) *Syntactic complexity: Diachrony, acquisition, neuro-cognition, evolution*, 163–198. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Shibatani, Masayoshi. 2018a. Nominalization in crosslinguistic perspective. In Prashant Pardeshi and Taro Kageyama. (eds.) *Handbook of Japanese contrastive linguistics*, 345–410. Berlin & Boston: De Gruyter.
- Shibatani, Masayoshi. 2018b. Nominalization. In Yoko Hasegawa. (ed.) *Handbook of Japanese linguistics*, 431–462. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shibatani, Masayoshi. 2019. What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization. In Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani, and David W. Fleck. (eds.) *Nominalization in languages of the Americas*, 15–168. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Shibatani, Masayoshi. 2017. Nominalization. In Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, and Hisashi Noda (eds.) *Handbook of Japanese Syntax*, 271–331. Berlin & Boston: De Gruyter.
- Shibatani, Masayoshi. 2021. Rentai shuushoku no bunpoo: Ruibetsushi to bunpoosei o chuushin ni (Grammar of adnominal modification: Centering on classifiers and gender). In Sung-Yeo Chung and Masayoshi Shibatani. (eds.) *Taigenka riron to gengo bunseki (Nominalization theory and linguistic analysis)*, 459–555. Osaka: Osaka University Press.
- Shibatani, Masayoshi. 2023. Towards dynamic functional typology: Classifiers, genders, and nominalization. *Historical Linguistics in Japan* 12, 1–52.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/hlj/12/0/12_1_3/_pdf/-char/en
- Shimizu, Masaaki, and Trang Phan. Forthcoming. Nominalization in Vietnamese: Roles of classifiers and the genitive marker *của*. *Journal of Foreign Language Education, Special issue*.
- Taguchi, Yoshihisa. Forthcoming. Classifiers and nominalization in Lan Hmyo. *Journal of Foreign Language Education, Special issue*.



G-3

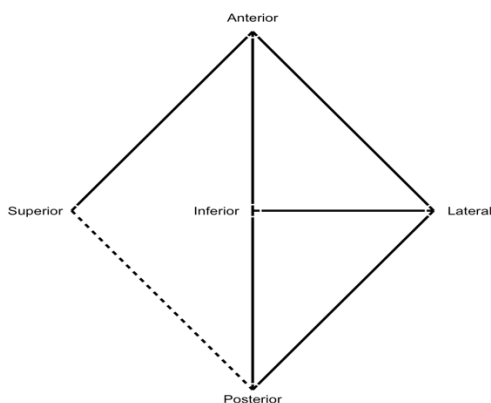
相対的场所表現における意味と形式のマッピング: 意味地図を用いて
水野庄吾 (ライプツィヒ大学/京都大学 博士課程; efforts.0213@gmail.com)

キーワード: 人類言語全般; 言語類型論; 相対的场所; 空間参照枠; 共起表現; 意味地図

本発表の目的は、通言語的に相対的场所表現に着目することで、相対的场所として定義される5つの意味の間にどのような共起表現関係 (coexpression) が存在可能かという問いに答えることである。

本研究は、空間表現を相対的场所表現と絶対的场所表現の2種類に区別し、前者のみを考察の対象とする。相対的场所表現とは、「彼は家の前にいる」のように figure (彼) が ground (家) から相対的に離れた位置 (前) に存在することを表す言語表現で、内在的参照枠、相対的参照枠のカバータームとして定義される。本研究では、具体的な相対的场所として、前後、上下、横の5つの位置関係を含める。

相対的场所表現を含めた空間表現は、ある空間をどのように認知するかという点において人間の認知システムが反映され得ることから先行研究において、広く着目されてきた。とりわけ空間関係の意味と形式の対応に関しては、ある空間関係をどのように言語化するかということをも明らかにする空間概念化 (Levinson 2003; Bohnemeyer et al. 2015; Palmer et al. Forthcoming) やある意味を表す言語手段の差異をもたらす意味パラメータを問う意味類型論 (Levinson & Wilkins 2006) において研究が行われてきている。それにも関わらず、本研究が対象とする5つの相対的场所において、どの意味間がより強い類似性を示すか、つまりどの意味とどの意味が共起表現になり得るかについて着目した研究は、管見が知る限り存在しない。そこで本研究はその溝を埋めるべく、相対的场所表現の共起表現関係を明らかにすることで、空間表現の研究に新たな知見を提供しようとするものである。具体的には、相対的场所表現の5つの位置関係には、前-下 (Haida 語); 前-上 (Tlacolula Valley Zapotec 語); 前-横 (Hup 語); 下-後 (Fur 語); 下-横 (Tommo So 語); 横-後 (Paunaka 語); 上-後 (Moskona 語) の共起表現が見つかり、以下の意味地図が描くことができるということを報告する。例えば、(1) の Fur 語では、相対的场所を表す *kəriŋ* が「下」と「後」を表し得る。同様に (2) の Hup 語では、相対的场所を表す *hipó?* が「前」と「横」を表し得る (Epps 2008: 466)。



- (1) Fur (Waag 2010: 320; 76)
borɔ sɪsɪ=ŋ *kəriŋ*
 tree=GEN under/behind.LOC
 ‘under/behind the Sisi tree’

- (2) Hup (Epps 2008: 468)
cá? *hipó?*
 box in front
 ‘in front of the box’

意味地図は、共起表現の通言語的普遍性を示すことで、意味間の類似性を導く手段であり (e.g. Croft 2022; Georgakopoulos & Polis 2018), 言語類型論の文脈において多くのトピックについての意味地図が提案されてきた (e.g. 不定代名詞 (Haspelmath 1997); 多回接辞 (Mattiola 2019); モダリティ (van der Auwera & Plungian 1998)). 相対的场所表現の共起表現関係は、空間関係が人間の認知システムを直接反映し得ることから先行研究で特に着目されてきたように、人間の認知システムの理解の一助となり得る。そのように本研究は新たな意味地図を提案することで言語類型論研究に新たな知見をもたらすものである。



参考文献：

- Auwera, Johan van der & Vladimir Aleksandrovič Plungian. 1998. Modality's semantic map. *Linguistic Typology* 2(1). 79–124. <https://doi.org/doi:10.1515/lity.1998.2.1.79>.
- Bohnenmeyer, Jürgen, Katharine T. Donelson, Randi E. Moore, Elena Benedicto, Alyson Eggleston, Carolyn K. O'Meara, Gabriela Pérez Báez, et al. 2015. The Contact Diffusion of Linguistic Practices: Reference Frames in Mesoamerica. *Language Dynamics and Change*. Leiden, The Netherlands: Brill 5(2). 169–201. <https://doi.org/10.1163/22105832-00502002>.
- Croft, William. 2022. On two mathematical representations for “semantic maps.” *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 41(1). 67–87. <https://doi.org/doi:10.1515/zfs-2021-2040>.
- Epps, Patience. 2008. *A Grammar of Hup* (Mouton Grammar Library). Vol. 43. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Georgakopoulos, Thanasis & Stéphane Polis. 2018. The semantic map model: State of the art and future avenues for linguistic research. *Language and Linguistics Compass* 12(2). e12270. <https://doi.org/10.1111/Inc3.12270>.
- Haspelmath, Martin. 1997. *Indefinite Pronouns*. Oxford: Oxford University Press.
- Levinson, Stephen C. 2003. *Space in Language and Cognition: Explorations in Cognitive Diversity* (Language Culture and Cognition). Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen C. & David P. Wilkins (eds.). 2006. *Grammars of Space: Explorations in Cognitive Diversity* (Language Culture and Cognition). Cambridge: Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511486753>.
- Mattiola, Simone. 2019. *Typology of Pluractional Constructions in the Languages of the World*. Amsterdam: John Benjamins. <https://www.jbe-platform.com/content/books/9789027262585>.
- Palmer, Bill, Jonathon Lum & Alice Gaby. Forthcoming. Spatial frames, variation and sociotopography. In Jürgen Bohnemeyer & Eric Pederson (eds.), *The expression of space*. Berlin: De Gruyter.
- Waag, Christine. 2010. *The Fur verb and its context* (Nilo-Saharan: Linguistic Analyses and Documentation). Vol. 26. Cologne: Rüdiger Köppe.



References

- Han, Chung-hye, Jeffrey Lidz, and Julien Musolino. 2007. V-raising and grammar competition in Korean: Evidence from negation and quantifier scope. *Linguistic Inquiry* 38:1–47.
- Han, Chung-hye, Julien Musolino, and Jeffrey Lidz. 2016. Endogenous sources of variation in language acquisition. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 113:942–947.
- Ikawa, Hajime. 2014. On the status of binding and control: Evidence from argument ellipsis in Japanese. In *Proceedings of the 31st West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. Robert E. Santana-LaBarge, 238 –247. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
- Kishimoto, Hideki, and Kazushige Moriyama. 2022. Adverbial particle modification and argument ellipsis in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 31: 1–43.
- Saito, Mamoru. 2007. Notes on East Asian argument ellipsis. *Language Research* 43: 203–227.
- Takita, Kensuke. 2011. An argument for argument ellipsis from -sika NPIs. In *NELS 39*, ed. Susi Lima, Kevin Mullin, and Brian Smith, 771 –784. Amherst: University of Massachusetts, Graduate Linguistic Student Association.



P-2

宝永元年空念上人筆録アイヌ語彙「狄言葉」が記録された地域の推定

春日勇人（京都芸術大学大学院・博士前期課程）

キーワード：アイヌ語、方言学、地理言語学、古文献

宝永元年（1704 年）に曹洞宗の僧侶、空念上人によって筆録されたアイヌ語語彙集「狄言葉」（以下、空念資料）は年代が明記されたアイヌ語資料として最古級であり、比類ない価値を持つ（國東 2010、佐藤 2014）。しかしその語彙がどの地域のアイヌ語を記録したものかについては詳細な検討がなされてこなかった。本発表は空念資料に記録された語彙を現代の方言資料と比較し、その記録地域を推定することを目的とする。

分析にあたっては服部編（1964）をはじめとする現代のアイヌ語方言資料を用い、空念資料の語彙と比較する。地域による語形の違いが顕著な基礎語彙や分布が限定される動植物名などを中心に検討を行う。分析の結果、以下の点が明らかになった。

1. 「あべ（火）」「へつ（川）」「のちう（星）」といった語形は北海道方言のものであり、サハリン方言とは一致しない。これにより記録地域が北海道であることが確認できる。
2. 佐藤（2014）でも指摘されているように「ぼろう（口）」や「しやば（頭）」といった語形は、現代の北海道アイヌ語の中でも西南部方言に特徴的なものである。
3. さらに語彙を詳細に検討すると「しぶやあん（煙）」の sipuya 系語形は八雲・長万部地域に、「まくな（北風）」の maknaw 系語形は八雲・幌別地域に、「おはこぶ（のり）」の ohawkop 系語形は八雲・幌別地域に、「とに（ミミズ）」の tonin 系語形は八雲・幌別・静内・様似地域に、「みまけ（歯）」の mimak 系語形は八雲・貫気別・新冠地域に分布が報告されており、噴火湾南岸の南西部方言地域との強い関連が示唆される。
4. 「やむ（栗）」や「む（鮎）」といった動植物の語彙が記録されている点もこれらの北限からみて北海道南西部の記録であることを裏付ける。

以上の分析から空念資料に記録されたアイヌ語は北海道南西部の特に八雲、長万部、幌別といった地域の方言的特徴を色濃く反映していると結論付けられる。ただし現代の資料と完全に一致する地点は特定できず、これは近現代に記録があまり残されなかった地域（例えば八雲より西の日本海側）の言語が記録された可能性を示唆している。本発表はアイヌ語史研究の基礎資料である空念資料の系統的位置づけを明らかにすることで、その資料的価値を一層高めるものである。

参考文献：

國東利行 編（2010）『廻国僧正光空念師 宝永元年(1704) 松前・蝦夷地納経記付アイヌ語集』北海道出版企画センター。

佐藤知己（2014）「宝永元[1704]年空念上人筆録アイヌ語彙「狄言葉」の言語学的考察」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』（20）：1-133。

服部四郎 編（1964）『アイヌ語方言辞典』岩波書店。

服部四郎・知里真志保（1960）「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『民族学研究』24(4)：307-342，日本文化人類学会。

知里真志保（1962）『分類アイヌ語辞典. 第2巻(動物篇)』日本常民文化研究所。



P-3 「悪くない」＝「良い」に対し、「天才じゃない」≠「馬鹿」なのは何か？ **—評価語否定文における二価志向性の適用範囲と制約条件—** 九州工業大学 阪口 慧 (keisakaguchi24@gmail.com)

キーワード：日本語、意味論、二価志向性 (two-valued orientation)、反義関係、否定

1.はじめに

本研究は、日本語の評価語否定文に見られる二価志向性 (cf. Voßagen 1999)、すなわち否定がスケール反対極の解釈へ誘導される解釈の志向性の適用範囲と例外を、Paradis (2001) の反義関係を類型する枠組みと接続して実証的に明らかにする。二価志向性は「悪くない」→「良い」および「良くない」→「悪い」に及ぶ双方向現象であり、Lyons (1977) や Horn (1989) により、否定が中立点よりも反対極へ解釈を向けやすいこと、この性質が語用論的影響によって強化されることが指摘されてきた。この点に関し、形容詞の意味的タイプ、反義関係のタイプが二価志向性に基づく解釈に影響を及ぼすのかを検証する。

2.実験概要

日本語母語話者 91 名に、18 対の評価語否定文 (例：あの本は悪くない) を提示し、下線部の評価に関して、5 件法 (1＝悪い～5＝良い、3.0＝中立) で評定させた。プラス語否定は 1.0 に近いほど、マイナス語否定は 5.0 に近いほど二価志向性が強いとみなせる。なお、いわゆる、プラス・マイナスの評価語の関係にない「深い—浅い」といった物理的性質に関する語も含んでいる。また、「暑い」については対義語を「寒い」「涼しい」で操作し、反対語設定の効果を検証した。二価志向性が強く表れた語、そうでない語の上位 5 件ずつをプラス語否定、マイナス語否定にわけて表にすると次の通り：

プラス語	刺激文	スコア	マイナス語	刺激文	スコア
面白い	この映画は面白くない	1.36	厳しい	あの先生は厳しくない	4.02
美味しい	あの店は美味しくない	1.48	涼しい	今日は涼しくない	3.91
甘い	あの先生は甘くない	1.62	煩い	あの子供はうるさくない	3.90
静か	あの子供は静かじゃない	1.64	浅い	このプールは浅くない	3.77
良い	あの本は良くない	1.79	悪い	あの本は悪くない	3.69

表 1:二価志向性が強く表れた刺激文とスコア

プラス語	刺激文	スコア	マイナス語	刺激文	スコア
天才	あの人は天才ではない	3.01	悲しい	そんなことされても悲しくない	2.93
暑い	今日は暑くない(⇔寒い)	2.97	不細工	あの人は不細工ではない	3.11
美人	あの人は美人ではない	2.76	苦しい	今日は苦しくない	3.16
暑い	今日は暑くない(⇔涼しい)	2.49	馬鹿	あの人は馬鹿ではない	3.18
大きい	あの箱は大きくない	2.33	醜い	あの人は醜くない	3.19

表 2:二価志向性が強く表れない刺激文とスコア

なお、「暑い」の操作では、対義語が「寒い」のとき 2.97 (ほぼ中立)、「涼しい」のとき 2.49 (やや否定方向) で、同じプラス語否定でも反対語設定により解釈が変動した。一方、マイナス語「涼しい」を否定した場合は 3.91 と強い肯定方向であった。

3.考察

二価志向性の影響は確認されたが一律ではない。Paradis (2001) によれば反義関係は (i) *dead - alive* のように相補関係にあるもの (*totally* で修飾可能)、(ii) *long-short* のように連続スケールをとるもの (*very, little* で修飾可能)、(iii) *excellent - terrible* のようにスケールの極端をとるもの (*completely* などで修飾可能なもの) に分類可能であるとする。「面白い」、「美味しい」等の連続スケールの反義関係 (ii) では評価性の強いシフトが観察され二価志向性の影響が強く表れることが確認できる。一方、「天才」、「美人」、「美しい」といったスケールの極端を取るもの (iii) は二価志向性が影響しにくく、スコアが中立 (3.0) 付近にとどまった。意味的タイプとしては外見に関する語は二価志向性が作用しにくいことが分かる。また、「暑い」と「涼しい」、「寒い」の操作から、よりスケールの極端を取る「暑い vs 寒い」の関係 (iii) よりもスケールの段階性がイメージしやすい「暑い vs 涼しい」の関係、いわば連続スケール (ii) としてとらえやすい関係の方が、二価志向性が強く影響していることが分かる。結論として、二価志向性の強度は、語の反義関係のタイプ・意味的タイプの相互作用で決まり、例外は体系的に予測可能であることが示唆される。



主要参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Cruse, D. A. (1986). *Lexical semantics*. Cambridge University Press.
- Horn, L. R. (1989). *A natural history of negation*. University of Chicago Press.
- Leech, G. N. (1983). *Principles of pragmatics*. Longman.
- Lyons, J. (1977). *Semantics* (Vols. 1–2). Cambridge University Press.
- Murphy, M. L. (2003). *Semantic relations and the lexicon: Antonymy, synonymy and other paradigms*. Cambridge University Press.
- Paradis, C. (2001). Adjectives and boundedness. *Cognitive Linguistics*, 12(1), 47–65.
- Paradis, C., & Willners, C. (2006). Antonymy and negation: The boundedness hypothesis. *Journal of Pragmatics*, 38(7), 1051–1080.
- Vosshagen, C. (1999). Opposition as a metonymic principle. In K.-U. Panther & G. Radden (Eds.), *Metonymy in language and thought* (pp. 289–308). John Benjamins.



キーワード：台湾閩南語 日本語 借用語 言語接触 ピッチパターン

台湾は19世紀末に日本の植民地となってから日本語の語彙を多数受容し、終戦から80年経った現在でも日常会話で日本語由来の語が幅広く使われる。例えば、中華民国教育部『教育部台灣台語辭典』の付録には、台湾閩南語に入った172個の日本語借用語がまとめられている。

これらの借用語では各音節がどのような音調を取るのだろうか。寺川(1942)は、日本語からの借用過程において台湾閩南語の声調体系に合わせるため、借用語のピッチが本来のアクセントパターンと大きく異なる事例があることを指摘した。また、音韻理論的な観点からは Hsieh

(2006) が、日本語借用語における音節構造に基づいてピッチが決定する機序を分析し、借用過程におけるピッチパターンを推測するテンプレートを提案した。このテンプレートは主に日常的な語彙に基づいたものであるが、借用語の中には特定の業界のみで使われる専門用語も多く存在する。本研究では「植民地期から日本との交流が盛んである土木建築の専門用語に入った日本語借用語が Hsieh (2006) のテンプレートと一致した音調を実現するのか」を考察する。

Hsieh (2006) の分析は【1】語末位置で短母音を持つ開音節(CV)には音節末に声門閉鎖音を挿入し Mid の音調となること、【2】長母音(CVV)や鼻音コーダを持つ音節(CVN)はピッチの下降(High-Low)が起こること、【3】隣接する2つの CVV/CVN 音節がある場合、最初の音節はピッチの上昇(Mid-High)が起こり、二番目の音節が下降(High-Low)割り当てられることなどを設定して、借用語の音節数に対して少数のピッチパターンを提案すれば日本語借用語の音調を把握できるという主張である。

Hsieh (2006) は自身でも日本語借用語を調査した上で上記の理論的分析を提案したが、その対象は台湾閩南語の話者の多くが使用する日常的な語彙であった。一方、特定の業界に携わる話者の間で使われる専門用語として借用された語彙も少なくないが、これらはその業界に関わっていない話者にとっては意味が理解できない。本研究では、このような日本語由来の専門用語でも Hsieh (2006) の分析と一致した音調を取るのかを土木建築分野を対象に検証する。

具体的な調査方法は以下の通りである。まず、第一著者が土木建築分野における日本語由来の専門用語を収集し、113語からなる調査用語リストを作成した。次に、現役の土木建築従事者6名を対象にリストの語彙を提示して職場で実際に使用するかどうかを確認した後に、使用する語彙の発音を録音し、その音調を著者全員でトークンごとに記述した。

調査の結果、調査用語リストの113語の専門用語のうち77語は2人以上の従業者が職場で使うことが判明した。これら77語の専門用語の中で Hsieh (2006) のテンプレートによる予測と一致した音調を取る語は7語しかなかった。それ以外の語は Hsieh (2006) のテンプレートでは一般化が難しいほどの多様な音調が観察された。

以上の結果は、日常的な借用語彙を考察対象とした Hsieh (2006) のテンプレートが専門用語の音調の予測には通用しなかったことを示唆している。日常的な語彙と比べると専門用語を使用する話者の数ははるかに少ない上に、各語彙が何を指しているのかという意味的な面でも個人差が生じており、そのような要因が音調の実現の不安定さを促進していると著者らは考える。ただ、それらの専門語彙の中でも音調の一致度が高い語と低い語があることから、語彙の普及度と音調の安定性についても注目する必要がある。

参考文献：

寺川喜四男（1942）『台灣に於ける國語音韻論（音質・音韻篇）：外地に於ける國語發音の問題』臺灣學藝社.

Hsieh, Feng-fan (2006) High Infidelity: The Non-Mapping of Japanese Accent onto Taiwanese Tone. In: F. Hsieh and M. Kenstowicz (eds.) *Studies in Loanword Phonology*, 1-27. Cambridge, MA : MIT Working Papers in Linguistics 52.

中華民國教育部『教育部台灣台語辭典/附錄/外來詞』（オンライン辞典）

<https://sutian.moe.edu.tw/zh-hant/huliok/104/> [2025 年 8 月アクセス]



キーワード：英語、構文形態論、通時言語学、接頭辞 *un*-、意味制約

本研究は、英語の *un-V-ed* 及び *un-V-able* 構文が歴史的に特有の生産性ピークと体系的な意味制約を発達させてきたことを示し、形式と意味のペアを持つ構文として機能することを実証する。英語派生形態論において、近年構文文法的アプローチへの関心が高まっている (Hoffman, 2022)。構文形態論では接辞パターンも構文と見なされる (Booij, 2010)。接頭辞 *un*-は極めて生産性が高く (Bauer et al., 2013)、特に接尾辞 *-ed* や *-able* との共起が顕著である (Yasuda, 2024)。しかしこうした接辞を持つ語の通時的発達プロセスや意味的制約は十分に解明されていない。本研究は *un*-を含む構文の通時的発達過程を解明し、構文化理論の形態論への適用可能性を検証することを目的とする。

Oxford English Dictionary (OED) のオンライン版を用い、*un-V-ed*、*V-ed* (各頻度上位 1000 語)、*un-V-able* (全 804 語)、*V-able* (頻度上位 804 語) の 4 構文を対象とした大規模通時調査を実施した。分析項目は初出年と Vendler (1967) による動詞意味分類 (Accomplishment, Achievement, Activity, State) である。古英語から 1900 年代まで 100 年区切りで時代区分し、各構文・各時代での動詞意味分布を統計的に比較した。4 構文の初出年に基づく発達順序は、*V-ed*・*un-V-ed* (古英語)→*V-able* (1200 年代)→*un-V-able* (1300 年代) だった。また、*V-ed* と *V-able* は 1500 年代に一度だけ頻度数のピークを示したのに対し、*un-V-ed* と *un-V-able* は 1500 年代・1600 年代と 1800 年代の二度ピークを示した。これは *un*-構文特有の発達パターンを示唆している。残差分析の結果、*un*-構文に共通する体系的な意味制約が確認された。*un-V-ed* では Accomplishment の意味を持つ動詞を選び好み (57.9% vs. *V-ed* 51.3%, $p<0.05$)、State の意味を持つ動詞を回避する (6.0% vs. *V-ed* 11.3%, $p<0.001$) 傾向が有意だった。*un-V-able* でも Accomplishment の意味を持つ動詞の選好 (50.7% vs. *V-able* 41.9%, $p<0.001$) と Activity の意味を持つ動詞の回避 (13.3% vs. *V-able* 18.7%, $p<0.01$) の傾向が有意だった。これは *un*-構文が *un*-を持たない構文よりも強い意味的制約を持つことを示している。

本研究は Booij (2010) の観点から、*un*-を持つ単語を、独自の形式と意味を持つ「構文」として体系的に分析した。OED のデータを用いた通時的分析の結果、*un*-構文 (*un-V-ed* と *un-V-able*) は二度の生産性ピーク (1500・1600 年代、1800 年代) を通じて新語を作る能力を段階的に拡張したことが示された。この語彙増加のパターンは、Hilpert (2013) が論じる構文の生産性変化の典型的な事例と解釈できる。また、*un*-構文が Accomplishment の意味を持つ動詞を選好し、State の意味を持つ動詞を回避するという制約は、構文が意味的な選択基準を確立したこと実証する。この制約の形成は、*un*-の「否定」の意味が、完結性を持つ Accomplishment 動詞と意味的に調和した結果と考察できる。

これらの発見は、形態論的制約や *un*-構文の形式が固定的なものではなく、歴史的・認知的要因によって形成される動的なプロセスであることを示唆する。本研究は、*un*-構文が古英語から 1900 年代までの長期にわたる発達を通じて、接頭辞の意味機能に基づく体系的な動詞選択の制約を獲得したことを実証的に示した。この発見は、派生形態論研究における通時的・実証的アプローチの新たな可能性を開くものとなる。

参考文献：

- Booij, G. (2010). *Construction morphology*. Oxford University Press. <https://doi.org/10.1111/j.1749-818X.2010.00213.x>
- Bauer, L., Lieber, R., & Plag, I. (2013). *The Oxford reference guide to English morphology*. Oxford University Press. <https://doi.org/10.1093/acprof:oso/9780198747062.001.0001>
- Hilpert, M. (2013). *Constructional change in English*. Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9781139004206>
- Hoffmann, T. (2022). *Construction grammar*. Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/9781139004213>
- Oxford University Press. (2025). *Oxford English dictionary* (Online ed.). <https://www.oed.com/>
- Yasuda, A. (2024). *A comprehensive study on the distribution and the nature of the English negative prefix un-* [Unpublished master's thesis]. Doshisha University.
- Vendler, Z. (1967). *Linguistics in philosophy*. Cornell University Press. <https://doi.org/10.7591/9781501743726>



キーワード：中国語、福安方言、統語論、受動、文法化

福安方言は中国福建省福安市で話されている中国語閩東方言のひとつである。閩東方言には侯官片と福寧片という下位分類がある。前者は福建省の省都である福州市の諸方言を含むため、中国語音韻学関連の研究のみならず、文法についても一定量の記述が存在する（e.g. 陳 1998; 林 2002; 陳 2018）。一方、後者は主に福建省寧徳市の寧徳方言と福安方言からなり、中国語音韻学の研究（e.g. 梁 1983; 馬 2001）を除けばほとんど文法記述の試みが行われていない。寧徳方言については辞典が刊行されており、ある程度の機能語の記述がある（鍾 2001）。しかし、福安方言は音韻方面の研究が先行しており、統語法等に関しては現在に至るまで未記述のままである。

本発表は、受動標識を足がかりとして、福安方言の文法記述ならびに歴史の解明への第一歩とすることを目的とする。具体的には、福安方言における「乞 [kʰeʔ]」と「伊 [i]」という2つの受動標識の存在を記述し、これらがそれぞれ「与える」という動詞と三人称代名詞が文法化したものに由来することを示す。データは発表者が現地調査によって得たものに基づくが、調査の際の焦点を絞る目的で、中国国内の言語資料を収録した「中国語言資源保護工程采录展示平台」を事前に参照している。

発表者が母語話者に対して実施した現地調査の結果、福安方言の受動は「乞」および「伊」という標識によって表されることがわかった。このうち、「乞」は同じ福寧片の寧徳方言（鍾 2001: 187）や福州市の諸方言（陳 1998: 152–153）と共通する受動標識であり、受動標識以外にも動詞「与える」、三項構文の受取手標識、数量の提示標識、使役標識という用法を持っている。

- (1) tse puŋ tsøi kʰeʔ i ləŋ anəŋ li
 這本書 乞 伊 □□ □□ 了
 この本 PASS その人 する 汚い PERF
 「この本はその人によって汚された」（以下、□は対応する漢字が不明の音節を示す）

この「乞」の用法は、動詞の「与える」が使役標識を経由して受動標識へと変化する、という中国語諸方言にしばしばみられる文法化（洪・趙 2005: 50）の結果として解釈することができる。

一方、「伊」は他の閩東方言に同源語がなく、かつ三人称代名詞と同音である。他に候補となる同音語が存在しないため、三人称代名詞が何らかの形で文法化して受動標識になったものと考えられる。

- (2) tse puŋ tsøi i i ləŋ anəŋ li
 這本書 伊 伊 □□ □□ 了
 この本 PASS その人 する 汚い PERF
 「この本はその人によって汚された」

受動標識も含め、中国語の介詞（文法的機能語）は動詞に由来するとされてきた（Chappell and Peyraube 2011: 787–793）。福安方言の「伊」は代名詞由来であるため、中国語方言の介詞としては例外的であるといえる。したがって、これは未記述の中国語方言にこれまでの中国語学で通用してきた見解に反する例が隠れている可能性があることを示す事例である。中国語方言の分野では音韻が注目されがちであるが、本発表の事例は詳細な文法記述にも行う価値が十分にあることを示している。

ただし、その文法化が具体的にどのような経路を辿ったかを明らかにすることは難しい。福安方言は未記述言語であったため、この文法化のプロセスを直接的に観察しうる資料が欠如している。通言語的には、再帰でない三人称代名詞が具体的に代名詞が文法化して受動標識となる場合、非人称主語をもつ能動文に左方転移が起こったものが受動文と再解釈されるのが典型的な文法化の経路である（Givón 2006: 338–340）。すなわち、「太郎、人々は彼を称えた」という形式が受動文に変化するような場合が通言語的に最もよくみられる。

しかし、福安方言の「伊」は動詞由来である「乞」と同一の構造の文を形成するため、左方転移由来であることを示唆する構文的特徴が存在しない。受動標識の「伊」が占める位置は、代名詞としての「伊」では占め得ない位置である。「伊」が何らかの経緯で受動標識としての機能を獲得した後に、「乞」からの類推によって現在のような構文をとるようになったと推定することができるのみである。

参考文献：

- Chappell, Hilary and Alain Peyraube (2011) Grammaticalization in Sinitic Languages. In: Narrog, Heiko and Bernd Heine (eds.) *Oxford Handbook of Grammaticalization*, 786–796. Oxford: Oxford University Press.
- 陳学雄 (2015) 「漢語福清方言の記述言語学的研究」 博士論文, 神戸市外国語大学.
- 陈泽平 (1998) 『福州方言研究』 福州: 福建人民出版社.
- Givón, Talmy (2006) Grammatical Relations in Passive Clauses: A Diachronic Perspective. In: Abraham, Werner and Larisa Leisiö (eds.) *Passivization and Typology: Form and function*, 337–350. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 洪波・赵铭 (2005) 「汉语给予动词的使役化及使役动词的动介词化」 沈家煊・吴福祥・马贝加 (編). 『语法化与语法研究 (二)』 36–52. 北京: 商务印书馆.
- 梁玉璋 (1983) 「福安方言概述」 『福建师大学报 (哲学社会科学版)』 1983(3): 77–86.
- 林寒生 (2002) 『闽东方言词汇语法研究』 昆明: 云南大学出版社.
- 马重奇 (2001) 「福建福安方言韵书《安腔八音》」 『方言』 2001(1): 1–16.
- 钟逢帮 (2001) 『宁德方言常用词典』 福州: 福建人民出版社.

電子資料：

中国语言资源保护工程采录展示平台 (<https://zhongguoyuyan.cn/point/02191>) [2025/07/17 閲覧]



榎村 輝 (大阪市立新庄小学校教諭)

enomura.0317@gmail.com

キーワード：ペルシア語、形態論、語彙的緊密性、複雑述語、関係節

語は統語的な句とは異なり、構成要素の一部に対して統語操作を適用することはできないとされる。これは「語彙的緊密性 (Lexical Integrity)」として知られており、ペルシア語に関しても Karimi (1997) が、複雑述語を構成する名詞には scrambling が適用できないことを示している。

本発表の目的は、ペルシア語のインフォーマント調査を通じて、この「語彙的緊密性」に関する新たな破れを提示することである。具体的には、次の三点を明らかにする。第一に、複雑述語に対して関係節化を適用することが可能であり、その結果、語彙的緊密性が破られる場合があること。第二に、そのように派生した関係節においては再叙代名詞が残留し得ないこと、さらにこの残留不可のパターンが、従来の研究 (Keenan and Comrie, 1977; Taghvaipour, 2014) の射程を超えて、非指示的な動詞の直接目的語にも拡張されることである。第三に、複雑述語の意味的性質が関係節化の適用可能性を規定している可能性があることである。

① 語彙的緊密性の破れ

複雑述語は音韻的には語としてのまとまりを持ち、scrambling の適用もできない。しかし (1) に示すように、その構成要素に対して関係節化を施すと、語彙的緊密性は破られ得る。注目すべきは、その際に関係節内で再叙代名詞が残留しない点である。

- (1) fekr-i_i [RC ke dærbɒreje kelɒs-e-bæʔd [Complex Predicate {[✓]Q_i / *^{pn}_i} kærd-æm]]
 thought-REL COMP about class-LK-next that did-1SG
 “my thought about the next class”

② 再叙代名詞の残留不可

言語類型論 (Keenan and Comrie, 1977) やペルシア語研究 (Taghvaipour, 2014) は、主語以外を関係節化した場合、関係節内に再叙代名詞が残留し得ると報告してきた。しかし本発表のデータは、複雑述語の構成要素に關係節化を適用した場合に再叙代名詞は残留できないことを示す。さらに (2) に見られるように、このパターンは非指示的な動詞の直接目的語を關係節化した場合にも観察される。これは既存の研究が想定してこなかった新しい一般化である。

- (2) ʔæks-i_i [RC ke dæɾ mæsdʒed [VP {[✓]Q_i / *^{pn}_i} gereft-æm]]
 photo-REL COMP in mosque that took-1SG
 “photo which I took of the mosque”

③ 意味の合成性と関係節化

ペルシア語の複雑述語には、その全体の意味が構成要素の意味に還元できない非合成的なものも存在する。このタイプの複雑述語に対しては、関係節化を適用することができない。すなわち、複雑述語が合成的である場合にのみ関係節化が可能であり、そうでない場合には不可能である。

(3) のデータは、この点を端的に示している。したがって、意味の合成性が関係節化の適用可否を規定する一つの指標である可能性が示唆される。

- (3) zæmin-i_i [RC ke kimeɒ [Complex Predicate {*^Q_i / *^{pn}_i} xord]]
 earth-REL COMP K that collided.3SG
 “(a) ground where Kimea fell” (intended reading)

参考文献

- Karimi, Simin (1997) “Persian complex verbs: Idiomatic or compositional?” *Lexicology*, 273–318.
- Keenan, Edward and Bernard Comrie (1977) “Noun phrase accessibility and universal grammar.” *Linguistic Inquiry* 8: 63–99.
- Taghvaipour, Mehran (2014) “Resumption in Persian relative clauses: An HPSG analysis.” In: *Proceedings of the 9th Conference on Formal Grammar*, 145–154.



a. 下記 17 言語を含む 68 言語、b. 言語類型論、c. 格枠組み、二重主語文

本発表では下地他 (2022) が提案した二項述語タイプの階層：[他動形容詞文>準二重主語文>二重主語文] について、世界の諸言語のデータにおける格枠組みを調査し、この階層の通言語的な妥当性を検証する。

1. 先行研究と問題の所在

下地他 (2022) では日本語諸方言に見られる与格交替（オラー センサー {ガ/ニ} オゾカッタ「オレは先生が怖かった」：宮崎県椎葉村尾前方言の例）に注目して上記の階層を提案し、ある方言においてこの階層の左側ほど与格標示を生じやすく、右で可能なら左でも可能であるとした。3 種の二項述語タイプは次のようである：[他動形容詞文]：第一項の意味役割が経験者で第二項が刺激の構文（「俺は水が欲しい」「俺は花子が好きだ」）／[準二重主語文]：「上手だ」「下手だ」「得意だ」を述語とし第二項に行名詞をとる構文／[二重主語文]：第一項と第二項が全体と部分、所有と被所有、主体と関連物の関係にあるような構文（「俺は頭が痛い」「俺は親が病気だ」「俺は背が高い」）。一方、角田 (2009) は世界の諸言語を対象とし、その格枠組みから他動性に関する二項述語階層を提案した：[1 直接影響>2 知覚>3 追及>4 知識>5 感情>6 関係>7 能力]。この階層において他動形容詞文は基本的に「5. 感情」に、準二重主語文は「7. 能力」に位置する。問題は二重主語文で、「痛い」は感覚であり意味的には「6. 感情」にも近いが、これを一種の所有とみなせば「ある」などが属する「6. 関係」に位置付けられる。しかし「私に車がある」のような所有に比べ二重主語文の所有は譲渡不可能で、「彼女は髪が長い」や「私は頭が痛い」の述語は「長髪」「頭痛」などと一体化し得る。「彼女の髪は長い」のように「所有者-被所有物」も一体化し得る。つまり一項述語的であり、「7. 能力」より右側に位置する可能性も考えられる。したがって通言語的に格枠組みの現われ方を観察し、上記の[他動形容詞文>準二重主語文>二重主語文]のような階層が成り立つのかどうかを研究する必要がある。

2. 研究方法と仮説

東京外国語大学語学研究所で 2009-2018 に実施され、その後も多くの言語のデータが追加・蓄積されている[特集データ]には、他動形容詞文については[特集：他動性]の 6-8-b「私はバナナが好きだ」と 6-10-b「彼は犬が怖い」、準二重主語文は同じく 6-14-a「彼は話をするのが上手だ」、二重主語文は[特集：ヴォイスとその周辺]の 4-15「私は頭が痛い」に関するデータがある（数字は[特集データ]の通し番号）。これらの例文データにおける各言語の格枠組みを調査した。他動形容詞文では積極的な感情と消極的な感情の違いを見るため 2 文を使用した。現時点で利用可能なデータの言語数は 68 である。仮説として、[他動形容詞文（好きだ>怖い）>準二重主語文>二重主語文]の階層に従って、右に行くほど第一項は主格から斜格に、第二項は斜格から主格へ出現が入れ替わるものと予想した。

3. 分析と研究結果

まず次の[a]-[d]の諸言語をいったん分析対象から外すと 36 言語となった：[a] 日本語例文における述語を含む 3 要素のうち 2 つが一体化する言語（例えば「私の-頭」合体型、「頭-痛」合体型、「私-痛い」合体型（= 述語人称変化））、[b] 格のない孤立型言語、[c] 主要部標示型言語、[d] 能格絶対格型の言語。さらにこの中には [e] 準二重主語文で「上手」が副詞となり「話す」が述語となる言語が 19 言語あったため、格枠組みが対照できた言語は 17 である（チナンテク語、ジョージア語、ポーランド語、ペルシア語、マラーティー語、ベンガル語、グイ語、ティディム・チン語、マルマ語、トルコ語、トルクメン語、タタール語、カザフ語、ウイグル語、モンゴル語、日本語山梨県奈良田方言、タガログ語）。結果としては、二重主語文とその他の構文の間に大きな違いが現れたが、他動形容詞文と準二重主語文の間にははっきりした違いが現れなかった。

表：17 言語に観察された他動形容詞文・準二重主語文・二重主語文の格枠組み

(小数点第 2 位 四捨五入)	他動形容詞文		準二重主語文	二重主語文
	バナナが好きだ	犬が怖い	話しが上手だ	頭が痛い
第一項主格	64.7%(11/17)	76.5%(13/17)	82.4%(14/17)	11.8%(2/17)
第二項対格	35.3%(6/17)	23.5%(4/17)	11.8%(2/17)	0.0%(0/17)
第二項主格	52.9%(9/17)	11.8%(2/17)	29.4%(5/17)	94.1%(16/17)

本発表ではさらに上記[b], [c], [d]の言語における構文の分析と、[e]の言語における他動形容詞文と二重主語文の格枠組みの分析、対格以外の斜格の分析の結果を示し、典型的な類型を示す言語の例文を提示しつつ、上記の結果の背景となる要因についての考察を行う。

参考文献

- 下地理則・松岡葵・宮岡大 (2022) 「宮崎県椎葉村尾前方言における形容詞述語文の格標示」 木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語の格表現』 東京：くろしお出版
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語』 東京：くろしお出版

調査資料

- 千田聡美 (2024) 「マラーティー語：特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」『語学研究所論集』28(23): 1-46.
- 千田聡美 (2025) 「マラーティー語：特集補遺データ「他動性」「(連用修飾的)複文」「情報構造と名詞述語文」「情報標示の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』29(14): 1-39.
- 藤原敬介 (2022) 「ベンガル語：特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』26: 359-438.
- 藤原敬介 (2024) 「マルマ語：特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』28(25): 1-97.
- 林真衣 (2021) 「タガログ語の他動性」『語学研究所論集』25: 293-300.
- 菱山湧人 (2024) 「カザフ語：特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』28(14): 1-42.
- 加藤幹治・大野仁美・中川裕 (2021) 「グイ語資料：所有・存在表現」『語学研究所論集』25: 361-370.
- 風間伸次郎 (2012) 「データ：「ヴォイスとその周辺」 モンゴル語」『語学研究所論集』17: 142-152.
- 風間伸次郎 (2022a) 「タタール語：特集補遺データ「受動表現」「ヴォイスとその周辺」「アスペクト」「モダリティ」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」「所有・存在表現」『語学研究所論集』26: 557-648.
- 風間伸次郎 (2022b) 「トルクメン語：特集補遺データ「受動表現」「ヴォイスとその周辺」「アスペクト」「モダリティ」「他動性」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」「所有・存在表現」『語学研究所論集』26: 439-500.
- 風間伸次郎・新田志穂 (2023) 「ウイグル語：特集補遺データ「他動性」「ヴォイスとその周辺」「連用修飾複文」「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「情報構造と名詞述語文」「所有・存在表現」「否定、形容詞と連体修飾複文」「情報構造の諸要素」『語学研究所論集』27: 551-614.
- 木村公彦・中川裕・大野仁美 (2021) 「グイ語資料：他動性」『語学研究所論集』25: 389-398.
- 児島康弘 (2023) 「ジョージア語 (グルジア語)：特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』27: 213-268.
- 森田耕司 (2014) 「データ：「他動性」 ポーランド語」『語学研究所論集』19: 245-252.
- 森田耕司 (2022) 「ポーランド語におけるヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』26: 165-172.
- 中本舜・ロベルト＝カルロス・パチェコ＝アングロ (2022) 「チナンテク語オスマシン方言形態統語論の諸相：語学研究所調査票に基づいて」『語学研究所論集』27: 905-984.
- 奥真裕 (2020) 「トルコ語の他動性」『語学研究所論集』24: 171-182.
- 大塚行誠・チンガイリャン (2023) 「ティディム・チン語におけるヴォイスとその周辺」『語学研究所論集』27: 733-752.
- 阪上健夫・吉田雅子・三樹陽介・小西いずみ (2024) 「山梨県奈良田方言：特集補遺データ「受動表現」「ヴォイスとその周辺」「アスペクト」「モダリティ」「所有・存在表現」28(32): 1-46.
- 阪上健夫・吉田雅子・三樹陽介・小西いずみ (2025) 「山梨県奈良田方言：特集補遺データ「他動性」「(連用修飾的)複文」「情報構造と名詞述語文」「情報標示の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』29(34): 1-40.
- 菅原睦 (2012) 「データ：「ヴォイスとその周辺」 トルコ語」『語学研究所論集』17: 200-211.
- 山田洋平 (2014) 「モンゴル語の他動性」『語学研究所論集』19: 173-188.
- 山本恭裕・河村朗之太 (2023) 「ヴォイスとその周辺：タガログ語」『語学研究所論集』27: 697-702.
- 吉枝聡子 (2012) 「データ：「ヴォイスとその周辺」 ペルシア語」『語学研究所論集』17: 220-228.
- 吉枝聡子 (2014) 「データ：「他動性」 ペルシア語」『語学研究所論集』19: 277-288.
- 周 杜海, チンガイリャン (2024) 「ティディム・チン語における他動性」『語学研究所論集』28(26): 1-18.



キーワード：中国語、生成文法、動詞コピー構文、ラベリング理論、little v の範疇選択

中国語には、「動詞コピー構文」と呼ばれる構文が存在する。この構文では、同じ動詞が一つの単文で二度現れ、「Sub V1 Obj V2 XP (補語)」の形式を取っている (Huang 1982; Cheng 2007; Zhao 2022 を参照)。

- (1) Zhangsan ca chuanguhu * (ca-le) san-ge xiaoshi
 张三 [VP 擦 窗户] * (擦-了) [XP=DurationP 三小时]
 张三 拭く 窓 拭く-PERF 三時間

「張三は窓を三時間拭いた。」

例えば、(1) のように、「三小时 (三時間)」という時間補語が普通の他動詞文「张三擦窗户 (張三は窓を拭く)」の後ろに付加される場合、動詞の「擦 (拭く)」が必ず二回発音されなければならない。一方、二つ目の動詞を削除すると非文になるため、なぜ二つ目の動詞が義務的に発音されるのかが問題となる。そして、動詞が二つ現れても、意味役割は一組 (主語の「張三」と目的語の「窓」) にしか付与されない点も検討の余地がある。本研究は、この動詞コピー構文を研究対象として、その派生のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

本稿では、二つ目の動詞が発音される要因は、v の c-selection (範疇選択) の性質に関わると提案する。具体的には、v が VP を補部として取る性質を持つため、その補部位置に VP を形成する必要があり、その結果、主要動詞がコピーされ二度発音されると考える。

動詞コピー構文の基本構造については、本発表は Zhao(2022)に従い、ラベリング理論 (Chomsky 2013, 2015) に基づく分析を採用する。すなわち、(1) の基本構造は (2) に表され、VP と DurationP は姉妹関係であり、{VP, DurationP} のラベルが決められない状況が生じる。

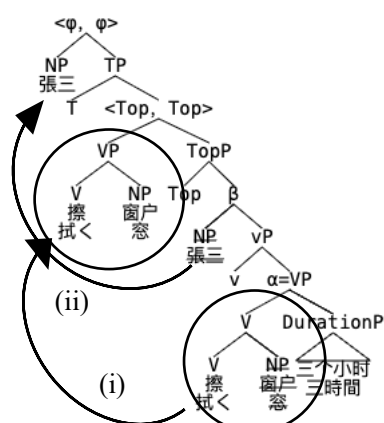
- (2) [_β Subj [_{VP} v [_α? VP DurationP]]]

この基本構造において、VP と DurationP はいずれも句であるため、ラベル α が決定できない。この場合、ラベルを決めるために、VP が {VP, DurationP} から移動する。Hsu (2008) は、動詞コピー構文における VP が話題 (Topic) や焦点 (Focus) 素性 (feature) を持つと指摘している。具体的には、(3) に示しているように、VP が上位の inner TopicP (あるいは FocusP) の指定部の位置まで移動し、TopP が持つ Topic 素性と共有することで <Top, Top> としてラベル付けされると考えられる (Zhao 2022)。

- (3) ...[<Top, Top> VP TopP]...[_β Subj [_{VP} v [_α ~~VP~~ DurationP]]]

その結果、α のラベルが残された DurationP になる。しかし、Chomsky(2001)によれば、v は述語 (VP など) を補部として取るという c-selection の性質を持つため、V が移動してしまうと、v が誤って VP ではない XP(DurationP)を補部として取ることになり、それは v の c-selection の性質に違反する。その問題を回避するために、本稿では、VP が上層に移動する際、V が VP 内部に留まり発音が保留され、{XP, YP} 構造の {VP, DurationP} は {X, YP} 構造の {V, DurationP} になり、そのラベルが VP として識別されると提案する。その操作により、c-selection の問題は解消される。(4) の (i) で示されているように、VP が移動した後、最小探索 (Minimal Search) (Chomsky 2013) によって VP 内部の主要部 V がラベルとして認識され、α に VP のラベルを与えることが可能となる。一方、発音のみが保留されるため、動詞が二度現れても、意味役割の付与が一組だけで済む。

- (4)



最後に、(4) の (ii) で示されているように、主語「張三」は TP の指定部まで移動し、共有する φ 素性でラベル付けされる。主語の移動に伴い、β のラベルは残された vP となる (Chomsky 2013, 2015; Zhao 2022 を参照)。

以上に述べたように、この一連の統語操作によって、動詞は上位構造で一度発音され、さらに v の補部位置に VP のラベルを提供するため、もう一度発音される。これにより、意味役割の付与と v の範疇選択の性質に違反することなく、動詞コピー構文が派生される。

また、VP が移動しても V の発音が残されなければ、v の補部が DurationP になってしまい、文は (5) のように非文になる。

- (5) a. * Zhangsan ca chuanguhu san-ge xiaoshi
 张三 [VP 擦 窗户] [DurationP 三小时]
 张三 拭く 窓 三時間

「張三は窓を三時間拭いた。」

- b. 張三...[VP 拭く 窓]...[VP v [_α=DuraP [VP 拭く 窓][DuraP 三時間]]]

(5) により、VP が移動し α が残された DurationP でラベルを付けられ、二つ目の動詞がなければ文は文法的に成立せず、この点は本稿の提案を支持する証拠となる。

本稿は、中国語の動詞コピー構文を研究対象として、二つ目の動詞が義務的に発音される理由とその構造の派生の仕組みをさらに明らかにする。

参考文献

- Cheng, Lisa (2007). Verb copying in Mandarin Chinese. In Norbert Corver and Jairo Nunes (eds.), *The copy theory of movement*, 151-174. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Chomsky, Noam (2001). Derivation by Phase. In Michael Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Chomsky, Noam (2013). Problems of projection. *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2015). Problems of Projection: Extensions. In Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini (eds.), *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honor of Adriana Belletti*, 1-16. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Hsu, Yu-Yin (2008). The Sentence-Internal Topic and Focus in Chinese. *Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 24, 635-652
- Huang, C.-T., James (1982). *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Zhao, Chen (2022). Chinese verb copying constructions: A labeling account. *Lingua* 269, 1-39.



P-10 Serial Verb Constructions の観点からみた台湾華語「給'gei」」の統語的特性

中村真衣佳 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程 zhongcunzhenyija2018@eis.hokudai.ac.jp

キーワード：中国語 台湾華語 統語論 Serial Verb Constructions coverbs 「給」 「幫」

受益者を標示する「給・給'gei」は現代標準中国語(普通話・台湾華語)で無標となる語順が異なることが観察される。台湾華語は(1a)が、普通話(1b)がより自然であるという。

- (1) a. 我 買 了 一 本 書 給 這 個 人。 [台湾華語]
私 買う -た 1 CL 本 gei この 人 (私はこの人に本を一冊買った)
- b. 我 給 這 個 人 買 了 一 本 書。 [普通話]
私 gei この 人 買う -た 1 CL 本 (私はこの人に本を一冊買った)

台湾華語の「給」は動詞「あげる」と動詞の意味が希薄化した要素(介詞)の「～に」のどちらで認識されているのだろうか。台湾華語の「給」は、(2)(3)(4)(5)に示すように、様々な文脈で使用されている。これら用例を見ると、「給」は(2)(3)(4)のような受益者を標示する場合には動詞の後方に位置しているが、(5)のような命令を表す場合には、動詞の前方に位置している。また、(2)(3)(4)は「給」と他の動詞で目的語を共有している。この現象は、台湾華語の「給」の品詞(動詞/介詞)の曖昧さと関わる。さらに、品詞の曖昧さは、述語の数に関わる。現代標準中国語文法では、「gei」のような動詞から文法化した前置詞(介詞)を coverbs のカテゴリーに含める(Wang 2025:1-2)。「coverbs」とは、動詞と同音異義の前置詞の両方を表現しているとみなされる欠如動詞クラスの要素である(Matthews 2006:70-71)。また、複数の動詞が連続する構文については、Serial Verb Constructions(以下 SVC と記す)に関わる。本発表は台湾華語の「給」が、どのような統語的特徴をもつのかについて SVC の観点から明らかにすることを目的とする。

- (2) 拿來 一 只 牛奶瓶 遞 給 喬凡尼。 [台湾華語](徐宇甄訳 2023)
持ってくる 1 CL 牛乳瓶 渡す gei ジョバンニ (牛乳瓶を持ってきてジョバンニに渡す)
- (3) 我 介紹 梅蘭 給 你 認識。 [台湾華語](中央研究院)
私 紹介する 梅蘭 gei あなた 知り合う (私はあなたに梅蘭を紹介する)
- (4) 發 聘書 給 各 委員。 [台湾華語](中央研究院)
出す 招聘書 gei 各 委員 (各委員に招聘書を出す)
- (5) 你 給 我 記住。 [台湾華語]
あなた gei 私 覚える (覚えておけ)

中国語は、SVC を持つ(Matthews 2006)。SVC とは、等位接続や従属、統語的依存がなく 1 つの述語として一緒に機能する動詞の連続である(Aikhenvald 2006:1)。Aikhenvald は、SVC の性質として、①1 つの述語、②単節性、③韻律、④テンス/アスペクト・ムード・モダリティの共有、⑤1 つの事態、⑥動作主の共有をあげている(Aikhenvald 2006:1-14)。Matthews (2006)によると、現代の記述の枠組みにおいて coverbs を伴う構文は動詞が対等ではない“asymmetrical Serial Constructions”(非対称 SVC)である。本発表では、台湾華語の「給」が動詞の前方/後方に位置して SVC を形成するかという語順と SVC の形成に注目し分析する。加えて、「gei」に似た「幫・幫'bang」との比較からも検討する。「bang」は動詞「助ける」と「bang+N」で「N のために」という意味がある。永江(2005)によると、普通話では(6)のように依頼を表す文で「給」と「幫」が互換可能であり、台湾華語では命令に「給」、依頼に「幫」を使用する。「bang」も品詞の曖昧さから coverbs であると考えられる。また、考察にはインフォーマント調査で行ったアンケートとインタビュー結果も踏まえる。

- (6) {給/幫} 我們 拍 張 照片 好 嗎? [普通話](永江 2005:196)
gei/bang 私達 撮る CL 写真 よい か (写真を撮ってもらえますか)

本発表は、台湾華語の「給」は動詞の前方/後方に位置し SVC を形成すること、一方「幫」は動詞の後方に位置すると補文をとる文、動作の目的を表す文となり SVC を形成しないことを指摘する。「給」は(1a)(2)(3)(4)に示すように前方の動詞と結びつきが強いことで他の動詞と目的語を共有し SVC を形成する。しかし、「幫」は後方の動詞と結びつきが強いことで「給」とふるまいが異なる。本発表は台湾華語の「給」の統語的特徴を「幫」との違いを含め言語学的に記述することに貢献する。さらに coverbs を伴う文の語順と SVC の形成の関わりを指摘し、SVC と coverbs の関係に新たな視点を与える。



参考文献：

永江貴子 (2005) 「祈使句における"幫"と"給"の選択について--台湾国語と普通話との比較から」『中国語学』252号, pp.196-209.

Aikhenvald, Alexandra Y. (2006) “Serial Verb Constructions in Typological Perspective” *Serial Verb Constructions: A Cross-linguistic Typology*, ed. by Aikhenvald, Alexandra Y. & Dixon, R. M. W. pp.1-68. Oxford & New York: Oxford University Press.

Matthews, Stephen (2006) “On Serial Verb Constructions in Cantonese” *Serial Verb Constructions: A Cross-linguistic Typology*, ed. by Aikhenvald, Alexandra Y. & Dixon, R. M. W. pp.69–87. Oxford & New York: Oxford University Press.

Wang, Pin (2025) “Chinese coverbal phrases and coverbs: a systemic function account” *Lingua*, 321, pp.1-23.

用例出典：

中央研究院『現代漢語平衡語料庫』 <https://asbc.iis.sinica.edu.tw/>

宮澤賢治著・徐宇甄訳 (2023) 「喬凡尼的鐵道」『銀河鐵道之夜』 八方出版



発表辞退



キーワード：概念ブレンディング、メトニミー、強制

認知言語学において換喩は参照点構造 (cf. Langacker 1993)、または領域焦点化モデル (cf. Croft 1993) など分析されてきた。本研究はこうした換喩の分析を概念ブレンディング (cf. Fauconnier & Turner 2002) の観点から再解釈するものである。

換喩は一般に「概念の近接性に基づく比喩」と特徴づけられる。この規定はかなり抽象的であり広範な言語現象がこれに該当するが、典型的には *The windmill is turning.* のように全体で部分を表すもの、*The kettle is boiling.* のように容器で中身を表すもの、*Proust is tough to read.* のように作者で作品を表すものなどがその代表例として扱われる。

一方で概念ブレンディングによる換喩の分析で関心とされてきたのはその修辞性や新たな意味の創発といった点であり、そもそもの換喩の成立条件や産出過程についてはあまり注目されてこなかった。例外的に Ioannou (2019) では比較的修辞性のない *I heard a piano.* や *The buses are on strike.* のような換喩を概念ブレンディングとして分析している。また Fauconnier & Turner (1996) では構文文法で強制 (coercion) として扱われる *Jack sneezed the napkin off the table.* という表現を構文の意味と動詞の意味の概念ブレンディングとして分析している。こうした表現も言語要素同士の意味の相互調整という点で広義の換喩であり、より一般的な換喩も概念ブレンディングとして分析する余地は十分に残されていると考えられる。

本研究で目的とするのは概念ブレンディングによる分析を参照点構造や領域焦点化モデルによる分析を比較し、それらの理論的統合の可能性について検討することである。特に参照点構造は際立ちの高い要素がターゲットにアクセスするための参照点となるというモデルであり際立ち (salience) という概念 (cf. Langacker 1993, Kövecses & Radden 1998) が重要な役割を持つ。これは「人間の関心を引く度合い」という特性であり、身体性を重視するという点で、人間尺度 (human scale) で理解するために概念を圧縮するという概念ブレンディングの考え方と整合する。

また概念ブレンディングは参照点構造に対して補完的な役割ももつ。*The buses are on strike.* という表現について考えると、参照点構造モデルでは *the buses* は運転手よりも際立ちが高いためにその参照点として選ばれると考えられる。しかしこれは人間は非人間より際立つという一般的な傾向に反しているため、際立ちに関する別の説明が必要となる。

Ioannou (2019) はこの換喩について *the buses* と *on strike* が *DRIVE* という共通の意味構造を持つことで共通スペース (generic space) が構築され、ブレンディングが行われると分析している。ここでバスが持つ際立ちについてブレンディングの観点から解釈すると、その語彙そのものの特性としてあるのではなく、最終的に創発する解釈（「バスは動かない」など）の中で担う役割（話題）によって遡及的に決定されるものと考えられることができる。

参考文献：

- Croft, William. 1993. The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. *Cognitive Linguistics* 4(4): 335-370.
- Fauconnier, Gilles and Mark Turner. 1996. Blending as a central process of grammar. In A. Goldberg (ed.), *Conceptual structure, discourse and language*, 113–129. Stanford: Cambridge University Press.
- Fauconnier, Gilles and Mark Turner. 2002. *The Way We Think. Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities*. New York: Basic Books.
- Ioannou, Georgios. 2019. Metonymy and frame integration: Interfacing between concepts and discourse. *Topics in Linguistics* 20(1): 1-23.
- Kövecses, Zoltán and Günter Radden. 1998. Metonymy: Developing a cognitive linguistic view. *Cognitive Linguistics* 9 (1): 37-77. Berlin: De Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-Point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4 (1): 1-38. Berlin: De Gruyter.



P-13

古典サンスクリット複合語の主節定動詞に対する時制・アスペクトの関係

内ヶ崎 哲（一般社団法人ことば・みらい・スカラシップ）

古典サンスクリット 統辞論 複合語 分詞 時制 アスペクト

【問題の所在】印欧語族は通言語的に分詞が副詞的に主節定動詞を修飾し、時制・アスペクトを始め様々な従属節的な関係を構築することが知られている。印欧語族に属する古典サンスクリットでは、主節定動詞より過去は絶対分詞（動詞由来名詞が副詞化した不変化辞）、同時は現在分詞又は絶対分詞、完了相は完了分詞が使われるのが一般的である。古典期に繁用される Bahuvrīhi (BV) と呼ばれる複合語のうち、過去受動分詞+名詞を基本とする BV と主節定動詞との間の時制・アスペクト関係が論じられることは少なかった。

【結論】本稿では、具体的データを示すことで、この BV が、主節定動詞に対して過去、同時、完了のいずれの場合でも、分詞節、絶対分詞節、又は従属節と類似の時制・アスペクトの関係を示し得ると主張する。

【背景】リグ・ヴェーダの言語（ヴェーダ語）では、主節主語と同格の分詞（現在・アオリスト・完了・未来）の主節定動詞に対する時制・アスペクトの関係については多くの検討がなされている（Dōyama 2008, Lowe 2012）。ヴェーダ語ではさらに絶対分詞も用いられた（Tikkanen 1987）。しかし、アオリスト分詞はヴェーダ語初期に消滅し、完了分詞も生産性の高い絶対分詞に押され使用頻度が下がった。古典期においてもヴェーダ語時代と同様に、主節定動詞よりも過去は絶対分詞で表現されることが多いが、Delbrück (1888) は、過去受動分詞+名詞の BV は「過去の行為の結果が継続している状態を示す」と述べ、Speijer (1886) は、BV は「...not rarely concurs with gerund (絶対分詞), absolute locative and the like.」とし、この BV が主節定動詞と時制・アスペクト関係を持つことを示唆している。

【重要なデータ】以下に古典期の代表的作品（Raghuvamśa, Nandargikar 1897）から示す（一部抜粋）。以下、(1)~(4)の主語はすべて "saḥ: he.M.SG.NOM" であるため記載は省略した。

(1) niṣiddhaśatruḥ (BV) putraṁ utpādayāmāsa (Raghuvamśa: Ragh.18.1)
defeated.enemy.M.SG.NOM son.M.SG.ACC beget.PRF.3SG

He, who had defeated the enemy, begot a son. BV の行為の主語は主節と同じで、"begot" より過去を示す。

(2) pūrvajanmāntaradr̥ṣṭapārāḥ (BV) smaran vidyāḥ jagrāha (Ragh.18.50)
former.life.other.seen.end.F.PL.ACC remember.PTCL.M.SG.NOM knowledge.F.PL.ACC obtain.PRF.3SG

He, (as if) remembering the knowledge he had seen to the end in his former life, obtained it. BV は主節主語と同格でないが、BV が表す行為の主語は主節と同一であり、"remembering"、"obtained" より過去を示す。

(3) vartate sma ālikhan tadvapuḥ aṅgulīkṣaraṇasannavartikaḥ (BV) (Ragh.19.19)
remain.PRS.3SG PART paint.PTCL they.figure.N.SG.ACC finger.sweat.dropped.pencil.M.SG.NOM

He remained (somehow), drawing their figure, with the pen dropping down due to finger sweat. BV は主節主語と同格で、BV が示す行為の主語も主節と同一であり、"drawing"、"remained" と同時であることを示す。

(4) mahīm parikīrya manīṣiṇe arpitātmā (BV) adhigamya yogaṁ akalpata (Ragh.18.33)
earth.F.SG.ACC give.ABS sage.M.SG.DAT devoted.self.M.SG.NOM study.ABS yoga.ACC become.IPF.3SG

He, who had given over the earth, having devoted self to sage, became (free of rebirth) by learning yoga. 主節定動詞"became"に対して"learning"は同時、BV"devoted"は過去の行為の結果が継続する完了相を示す。

（主な略語：ABS:絶対分詞, IPF:imperfect, PRF:perfect, PRS:present, PTCL:present participle）

【考察】これら BV は他動詞の過去受動分詞とその他動詞の目的語から成り、他動詞の主語はいずれも主節の主語と一致する。ヴェーダ語から古典期に至るまで絶対分詞が多く使われたが、古典期になって発達した BV によって、主節定動詞に対する時制・アスペクト関係を、あたかも分詞節、絶対分詞節、従属節の様に表現できるようになったと思われた。今回の観察は、アオリスト分詞を持たないラテン語が新約聖書翻訳時（5世紀）に、ギリシャ語のアオリスト分詞の 53%を現在分詞、15%を従属節、12%を絶対奪格で翻訳したことを考慮すると（Haug 2009, Blaise 1955）、通言語的にも大変興味深いテーマになりうると思われた。



参考文献

- Blaise, Albert. 1955. Manuel du Latin Chrétien. Strasbourg: Le Latin Chrétien.
- Delbrück, B. 1888. Altindische Syntax. Halle A.S.: Verlag Der Buchhandlung Des Waisenhauses
- Dōyama, Eijirō. 2008. On the Function of the Root-Aorist Participle. Journal of Indian and Buddhist Studies Vol. 56 No.3 (7-12)
- Haug, Dag.T.T., H.M. Eckhoff, M. Majer, E. Welo. 2009. Breaking down and putting back together: analysis and synthesis of New Testament Greek. Journal of Greek Linguistics 9 (56-92)
- Lowe, John J. 2012. The Syntax and Semantics of Tense-Aspect Stem Participles in Early Rgvedic Sanskrit. A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy, University of Oxford.
- Nandargikar, Gopal Raghunath. 1897. The Raghuvanśa of Kālidāsa with the Commentary of Mallinātha. Bombay: Radhabai Atmaram Sagoon.
- Speijer, J.S. 1886. Sanskrit Syntax. Leyden: E.J. Brill.
- Tikkanen, Bertil. 1987. The Sanskrit Gerund: A Synchronic, Diachronic and Typological Analysis. Studia Orientalia, Vol. 62.



キーワード：日本語、談話分析、なんか、談話標識、心的操作

本発表では自然談話に現れる「なんか」の使用状況を調査したうえで、「なんか」が持つ曖昧さについて考察する。「なんか」は日本語の日常会話に頻繁に使用される語である。語本来の意味として、不特定なものを表す代名詞「なに」と付加された助詞「か」の音変化による連語としての用法や、一例を挙げたり軽んじる意を表す副助詞としての用法が見られるが、そこから談話標識としての用法が発達し、新しい話題の開始や会話の推進、間つなぎなどの談話を構成する機能や、話し手の責任の軽減や聞き手の不快感の軽減などの対人的な機能を持つことが指摘されてきた（鈴木 2000、内田 2001 など）。談話標識とは、話し手の態度や意図を意識的に、あるいは無意識的に聞き手に伝える役割を持ち、聞き手が談話の意味を理解する手助けになるような標識の役割を持つ語である。鈴木（2000）は「なんか」の語用論的機能として、「らしい」等の伝聞表現や、「みたいな」等の婉曲表現と呼応する「なんか」について、発話内容に対する話し手の曖昧さを伝えたり、意見を主張することに伴う責任を軽減、あるいは曖昧化したりする機能があるとしている。ここで、「なんか」が表す曖昧さは、発話内容それ自体のみならず、発話に伴う話者の責任までと幅広い範囲にわたるとされているが、「なんか」一語でこのような広範囲の曖昧さをすべて表すことができるのか疑問が残る。本発表では、伝聞表現や婉曲表現といった、すでにある程度の不確実性が含まれている表現に「なんか」を呼応させることで、何が達成されようとしているのかを改めて考察する。

データには自然談話を用い、談話分析の手法を用いて分析する。これまでの「なんか」に関する研究で使用された会話データは若者の雑談が多く、データの偏りという点で課題が残る。そこで、本発表では自然談話の大規模コーパスである『日本語日常会話コーパス』を用いて、「なんか」の使用状況を概観したうえで（分析 1）、伝聞表現や婉曲表現と呼応する「なんか」の事例を分析し（分析 2）、「なんか」が持つとされる曖昧さについて考察する。まず、分析 1 では、コアデータ（20 時間、52 会話、約 25 万語）の協力者 20 名（20 代～60 歳以上の男女）に着目し、「なんか」の使用状況を調査した。調整頻度（100 万語当たり）で使用数を分析した結果、1 名（T008、30 代女性）の「なんか」の使用数が突出して多いことがわかったため、このデータを除いた 19 名分の「なんか」を分析対象とした。年代別にみると、「なんか」は 20 代でその使用数が多くなっているものの、全世代に幅広く使用されていることが確認された。分析 2 では、「なんか」と伝聞表現及び婉曲表現との呼応が見られる発話の文字化データおよび動画データを確認し、事例分析を行った。

分析の結果、伝聞表現や婉曲表現と呼応する「なんか」は、必ずしも発話内容に対する話し手の曖昧さや、発話に伴う話者の責任を軽減しているとは限らないことが確認された。我々の心内には、言語表現とその対象が別々に格納されていると考え、（田窪・金水 1997）「なんか」は、話者の心内にある対象がおぼろげながらも特定できているものの正確な言語表現にすぐアクセスできない際に、質的にも量的にも十分とは言えないが、対象を表す言語表現の一部を取り出しつつ、まずここでは会話を推進させることを優先するという心的操作をモニターする標識である可能性が示唆された。

参考文献：

- 内田らら (2001). 会話に見られる「なんか」と文法化：「前置き表現」の「なんか」は単なる口ぐせか？ 東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編 24(2), 1-9.
- 鈴木佳奈 (2000). 会話における「なんか」の機能に関する一考察 大阪大学言語文化学, 9, 63-78.
- 田窪行則・金水敏 (1997). 応答詞・感動詞の談話的機能 文法と音声, pp.257-279. くろしお出版



音声的強調による意味的プロミネンスへの影響 —視覚刺激に対する視線停留を用いた実験

菅谷友亮

キーワード：(a) 日本語、(b) 実験音声学、心理言語学、認知言語学、(c) 強調、プロミネンス、視覚世界パラダイム

本研究は、文内における様々な手段における音声的なアクセントと意味的なプロミネンス (卓立, salience) の関係性を調査する。認知文法では、主語に最も目立つ Trajector、目的語に二番目に目立つ Landmark の地位が与えられると理論的説明を行うが (Langacker 2008)、当然、統語論的側面だけでなく、意味論や語用論的側面に加えて、音韻論的要因によっても文内の要素 (名詞句など) へのプロミネンスの程度は影響されると予想できる。特に音韻論的には、(i) ピッチの上昇/下降、(ii) 持続時間の長さ、(iii) 声量の大きさ (強さ)、(iv) 独立性 (前後に間やポーズを配置) が目立ち度に影響を与えると想定される。

日本語 (東京方言) はピッチアクセントの言語だとされ、文中でのフォーカスのためには、典型的にピッチ (音の高さ) の上昇下降が用いられ、長さや強さは副次的な要素であることが実験で検証されている (郡 1989)。同結果は本研究において重要だと見做されると同時に、以上のような先行研究の実験は、単に被験者にフォーカス部分を含めた文を読ませる課題を実施し (産出)、その読み上げられた音声を音響的に詳細に分析することが多い。音声的強調により「意味」的にどのような影響が与えられるかという理解の側面、ひいては意味そのものが実験対象に含まれることは稀である。一般的に、頭の中で意味/概念的に目立った対象に対して何らかの音声上の強調を行い (産出)、その強調がなされた部分 (名詞句など) に対して意味的にプロミネンスが与えられるというのが通常の言語処理プロセスである。これを考慮すれば、音声研究であっても意味的側面を含めた実験が自然で重要だと考えられる。

しかし、意味的なプロミネンスは心理/概念的に存在するため直接観察することはできない。本研究は、視線計測における広義の視覚世界パラダイム (Visual World Paradigm) を採用する (e.g., Tanenhaus et al. 1995)。同方法論では、視覚刺激 (絵や写真など) と音声刺激 (語や文など) を同時に呈示し、視覚刺激に関わる言語表現の処理を逐次的に観察できる。特に本実験において、視覚刺激の写真は文の意味内容に相当し、音声刺激は様々な調整が加えられた文である (→ 説明変数)。写真内の複数の要素 (人や物など) を関心領域 (AOI) として、各 AOI への総視線停留時間 (TFD) を計測し (→ 目的変数)、文間で比較した。音声刺激は合成音声を用い、さらに Praat (Version 6.4.31) 等を使ってピッチや長さなど様々な音声面の加工を施した。例えば、男性と女性、青・赤・黄の箱があり、男性が青い箱を持ち上げている状況を写した写真に対して、「男性が青い箱を持ち上げた」という文の音声を作成し、名詞句 (男性/青い箱) の (i) ピッチを上昇させる、(ii) 持続時間を長くする、(iii) 音量を増加させる、(iv) 前後に間を入れる、のいずれかまたは複数の組み合わせた音声を作成し、視覚刺激呈示の 2 秒後から音声呈示した。実験参加者の課題は文と写真の内容が一致しているかどうかを評価することであった。

同実験の結果に関して、詳細な数値や統計分析は紙面の都合上ここでは省略するが、大局として、(i) 各音韻論的要因は文法的要因と比べて弱い影響を与えたが、(ii) 複数の音韻論的要因が組み合わせられることにより対象物への注視の量が有意に増加した。本研究では、同じ方法論で他分野の要因 (格標示や語順、意味役割の違い等) も調査可能で、各要因の影響力を比較できる利点がある。例えば、受動態により格が変化することによる TFD 増加と比較すると、音韻論的要因はその影響力が全体的に低かった。しかし、音韻的特徴を変化させるかどうかで有意な差が生じており、音声面の強調が実際に意味レベルでのプロミネンスに影響したことが確認できた。

参考文献

- 郡史郎. 1989. フォーカス実現における音声の強さ、持続時間、 f_0 の役割. 音声言語 III (近畿音声言語研究会): 29–38.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Tanenhaus, Michael K., Michael J. Spivey-Knowlton, Kathleen M. Eberhard, and Julie C. Sedivy. 1995. Integration of visual and linguistic information in spoken language comprehension. *Science* 268 (5217): 1632–1634.



P-16

話者の deontic status を表明するものとしての、命令的意味を表すシヨウ

金子真 (大阪大学外国語学部招へい研究員 ; kaneko.makoto.2w3@osaka-u.ac.jp)

キーワード : a. 対象言語 (日本語) ; b. 分野・方法 (語用論、統語論) ; c. その他 (deontic status)

命令的意味を表すシヨウを含む(1a-b)のような文について、金子(2025)は対話者間に何らかの上下関係がある時に、話者が命令に関するコミットメントを行うと同時に、対話相手の意志・約束に関わるコミットメントを「代行」するものだという分析を提案した。しかし次のような問題点が残った：①この分析では対話相手のコミットメントが共有基盤にアップデートされることになるため、対話相手に拒否の余地はないはずだが、例えば(1b)に対し「いや気が進みません」と返答できる；②命令に加え対話相手のコミットメントを代行するとすると強制力は命令文以上であるはずだが、これは(1a-b)が「やわらげた命令」(仁田 1991)を表すという指摘に反する；③コミットメントは遂行責任を伴うが、上記の分析では例えば(1a)で受験生がベストを尽くさない場合、話者が責任を引き受けることになる。これは直観に反する；④必ずしも上下関係がない場合でも命令的意味を表すのにシヨウが使用される場合がある (cf.(2)) (田中優生氏個人談話)

ところで Portner et al. (2018)は、仏語の tu/vous のように 2 人称単数/複数形の違いを用いて表される敬意の違いを、対話者間の関係についての遂行的な表明であるとし、こうした意味は統語的に cP という投射の主要部に記載されると主張する。例えば仏語で単数形 tu が用いられる場合、cP の主要部は[status: 話者>対話相手]という素性を持つ (Potts 2007, McCready 2019 もこうした意味を遂行的とするが、記述的意味とは別レベルの表出的意味として分析している)。さらに会話分析の分野では串田 (2019)が、例えば主治医と患者の間で今後の治療方針を決定する際、主治医は命令形やシヨウを使い分けることにより、場面に応じて両者の間で「相手の未来の行為を決める権利の配分 (deontic status)」に違いがあることを示す、と指摘している。

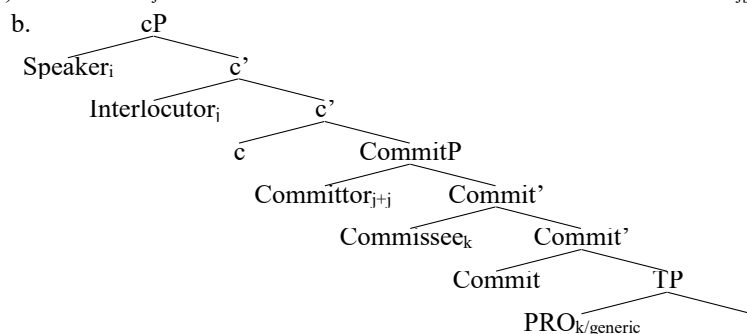
本研究ではこうした研究を参照し、上記の問題①～④を解決するため次の 3 つの提案を行う：A) 意志・約束、命令、勧誘は telic commitment を表しコントロール補文を取る 3 項の態度述語として表せる (cf.(3a)) が、(1a-b)のような文は、cP を持つと同時に PRO のコントローラーが commissee である命令文の構造を持つ (cf. (3b))。この仮説は(1a-b)に命令文と同様の返答ができることから裏付けられる；B) 通常 committor は話者だが、話者が「相手の未来の行為を決める権利」を部分的に持つ、即ち「committor=話者+対話者」と遂行的に表明するためにシヨウを用いることがある。この場合 cP の主要部が[deontic status: 0<話者<対話相手]という素性を帯びる。[話者>対話相手]の場合命令形が選ばれるが、この時 committor=話者というデフォルトの構造を持ち、特別な deontic status の表明はなされない。シヨウが表す「committor=話者+対話者」という意味が命令文とは異なるタイプの遂行性を持つことは、(1a-b)のような文は命令文と異なり埋め込みを許さないことから裏付けられる (cf.(4))；C) (2)のような例の PRO は総称的であり、文が述べる状況と似た状況に対話相手があることから間接的に対話要請の意味が生じる。シヨウを用いて「committor=話者+対話者」と表明するのは、総称的な事態に話者も対話相手も権利・責任を持つことを示すためである。この総称的 PRO 解釈は、telic commitment と同様、主文述語の a) 主語、b) 間接目的語、c) 主語+間接目的語がコントローラーとなる、(5)のような nearly free control 構文が総称的 PRO を許すことと平行的である。(1a-b)と(2)に異なる PRO 解釈を想定するこの仮説は、i)前者は上昇調ネと共起しやすいのに対し、後者は下降調ヨと共起しやすいという分布上の違いがあること、ii)後者は個別的な事態とは共起しにくいことから裏付けられる。

(1)a. [予備校講師が受験生に] 君のベストを尽くそう。(google検索)

b. [主治医が患者に] この薬を飲んでみましょう。(google検索)

(2) [親が塾の送迎をしてくれないという相談者に対し] 自分のことぐらい自分でしようよ。(google検索)

(3)a. Committor_j makes a telic commitment to Commissee_k about PRO_j[意志・約束] / k[命令] / j+k[勧誘] V-ing.



(4) 君のベストを{尽くせ / *尽くそう}と思っていたんだ。(木下蒼一郎氏個人談話)

(5) John_i talked to Sarah_j about PRO_{i / j / i+j} generic taking better care of himself_i / herself_j / themselves_{i+j} / oneself_{generic} (Jackendoff & Culicover 2003: 523)

参考文献：

- Jackendoff, Ray & Peter, W. Culicover (2003). The Semantic Basis of Control in English. *Language* 79.3, 517-556.
- 金子真 (2025). 「命令的意味を表すシヨウについての一考察：「代行的コミットメント」という観点から」 日本言語学会第 170 回大会ポスター発表.
- 串田秀也 (2018). 「発話デザイン選択と行為の構成」 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実 (編) 『会話分析の広がり』 ひつじ書房.
- McCready, Elin (2019). *The Semantics and Pragmatics of Honorification: Register and Social Meaning*. Oxford University Press.
- 仁田義雄 (1991). 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房.
- Portner, Paul, Miok Pak & Raffaella Zanuttini (2018). The speaker-addressee relation at the syntax-semantics interface. *Language* 95(1), 1-36.
- Potts, Christopher (2007). The expressive dimension. *Theoretical Linguistics* 33(2). 165-198.



P-17

ベルベル語ターウジュート方言（南部チュニジア）の動詞活用

熊切 拓 (cyberbbn@gmail.com)

キーワード：ベルベル語 言語記述 動詞活用 否定

本発表は、これまでほとんど調査のされていないベルベル語ターウジュート方言（北アフリカ、南部チュニジア、ターウジュート村、話者数推定 1,000）の動詞活用について報告を行う。この言語は、消滅の危機にある言語のひとつである（Gabsi 2003）。ターウジュート村の近隣には、2つのベルベル村が存在する。調査協力者によると、相互に理解可能であるが、それでも音韻（歯間摩擦音の有無など）と語彙に関しては違いが認められる（Basset 1950）。

この方言についてはまとまった調査は近年行われていない。本発表は、首都チュニスにおいて 2025 年 3 月と 8 月の 2 度にわたり、それぞれ約 2 週間、実施した調査に基づく。

以下、約 70 の動詞のデータをもとに、ターウジュート方言の動詞活用の特徴をまとめる。

【動詞活用】 動詞は、1, 2, 3 人称のそれぞれに単数 (sg) と複数 (pl) の区別があり、さらに 2 人称複数、3 人称単・複で男性 (m) ・女性 (f) の区別がある。

(1) 掴む： 1.sg. *ətʔʔafa:*, 2.sg. *θətʔʔafaθ*, 3.sg.m. *jətʔʔaf*, 3.sg.f. *θətʔʔaf*,
1.pl. *nətʔʔaf*, 2.pl.m. *θətʔʔafam*, 2.pl.f. *θətʔʔafmaθ*, 3.pl.m. *ətʔʔafan*, 3.pl.f. *ətʔʔafnəθ*

【動詞活用系列】 少なくとも、完了形、未完了形、否定完了形、否定未完了形、アオリスト形、命令形、否定命令形の 7 種のものが存在する。それぞれの動詞語幹は語根が共通している。完了形と未完了形の活用語幹は異なる。完了形否定形の語幹は完了形と同じか類似している。未完了形否定形は通常、未完了形のものと同じである。アオリスト形は通常は完了形語幹であるが、活用の点で異なる場合がある。命令形はアオリスト形とほぼ同じである。

(2) 掴む (3.sg.m)： 完了形 *jətʔʔaf*、未完了形 *jθətʔʔaf*、否定完了形 *il-jətʔʔi:f-f*、
否定未完了形 *il-jθətʔʔaf-f*、アオリスト *a:-jətʔʔaf*
命令形 (2.sg.) *atʔʔaf*、否定命令形 (2.sg.) *a:-θətʔʔfa-f*

【否定形】 動詞文の否定は、*il-* と *-f* が動詞を挟むことによって形成されるが、*il-* がしばしば動詞活用形の語頭子音と同化するため、肯定形と否定形に違いが生ずることもある ((3))。また、完了形否定形の語幹は完了形と異なる場合もある ((4))。

(3) 押す (3.sg.f.) 完了形 *θðu:zz* 否定完了形 *il-ddu:zz-f* (<*il-θðu:zz-f*)

(4) 掴む (3.sg.m) 完了形 *jətʔʔaf* 否定完了形 *il-jətʔʔi:f-f*

・さらに、否定接頭辞 *il-* は、子音 *t* などが後続しても、完了形否定形では同化しないが、未完了形否定形では同化するという奇妙な現象が見られる。

(5) 戻す 否定完了形 (2.sg.) *il-tərri:-f* 否定未完了形 (2.sg.) *it-ta:rri:-f* (<*il-θa:rri:-f*)

【借用】 否定後部要素である *-f* を含めアラビア語方言から借用された動詞も多く見られる。

(6) 押す *ðu:zz* (< *dəzz* 《押す》) 悲しむ *hʒən* (< *hʒən* 《悲しむ》)

本発表では、上記の点を中心にターウジュート方言の動詞活用をわかりうる限り明らかにする。



参考文献：

Basset, André. 1950. Les parlers Berberes. In *Initiations à La Tunisie* (pp.220-226). Paris: Maisonneuve.

Gabsi, Zouhir. 2003. *An Outline of the Shilha (Berber), Vernacular of Douiret (Southern Tunisia)*. Doctoral dissertation. <https://theswissbay.ch/pdf/Books/Linguistics/Mega%20linguistics%20pack/Afro-Asiatic/Berber/Shilha%20%28Berber%29%20Vernacular%20of%20Douiret%2C%20An%20Outline%20of%20the%20%28Gabsi%29.pdf>



Keywords: English, pragmatics, formal semantics, presupposition filter, *even if*

In this study, we are going to look at whether the filtering of presupposition also happens in a case that a sentence contains a complementizable predicates which its meaning can't be explained with logical symbols by focusing on sentences that contain *even if* as one of the examples of the case and determine whether *even if* is also a presupposition filter.

In previous studies, it was stated that filtering of presuppositions takes place if the compound sentence involves some logical connective, *and, or, if...then...* (Karttunen 1973), and a compound sentence of the form $p \wedge q$ or $p \rightarrow q$ inherits all the presuppositions of p , and also all the presuppositions of q except those that are entailed by p (Kadmon 2001). Also, a compound sentence of the form $p \vee q$ inherits all the presuppositions of p , and all the presuppositions of q except those that are entailed by $\neg p$. In other words, we can say like (1a) and (1b).

(1) a. Connectives such as $\wedge$ and $\rightarrow$ filters $ps(q)$ when $\llbracket p \rrbracket = \llbracket ps(q) \rrbracket$

b. Connectives such as $\vee$ filters $ps(q)$ when $\neg \llbracket p \rrbracket = \llbracket ps(q) \rrbracket$

Note that $ps(q)$ in (1a) and (1b) means the presupposition of q . One of the examples of the compound sentences that contains a conjunction or a disjunction given by Kadmon (2001) are (2) and (3).

(2) Bill is not present and JOHN drinks too.

(3) If Bill drinks, then JOHN drinks too.

When we assume that the presupposition of “*JOHN drinks too*”, which has a presupposition trigger *too* that seems to trigger the same presupposition as *even* in the sentence itself, is that somebody else drinks besides John, the presupposition remains in (2) since it is not entailed by “*Bill is not present*”, but it doesn't remain in (3) since it is entailed by “*Bill drinks*” and there is no reason to keep it the sentence because “*Bill drinks*” already explains that somebody else drinks besides John.

However, logical connectives are not the only connectives, *even if* for example. Even though it is similar to *if (...then...)*, the truth conditions are different from each other. Consider the sentences below.

(4) If John runs, then Tom runs too.

(5) Even if John runs, Tom runs too.

The only case that (4) is false is when John runs and Tom doesn't run, but the case that (5) is false is when Tom doesn't run, which means that *even if* doesn't give rise to conditional meanings. Also, since there is no logical symbol that represents *even if*, it is unknown whether it is also a presupposition filter.

To see whether *even if* is a presupposition filter, we are going to focus on sentences (6) and (7), where the difference between them is if the right-hand clause is “*John walks too*” or “*John runs too*”.

(6) Even if the king of France runs, John walks too.

(7) Even if the king of France runs, John runs too.

It is obvious that both (6) and (7) presuppose that there is a unique king of France, since (6) and (7) can't be felicitously uttered if there is no unique king of France. Furthermore, when we assume that the presupposition of “*John walks too*” is that somebody else walks besides John, it seems that the presupposition remains in (6) since neither “*The king of France runs*” nor “*The king of France doesn't run*” entail it. But in (7), when we assume that the presupposition of “*John runs too*” is that somebody else runs besides John, it seems that the presupposition has disappeared, and this is supposed to be because “*The king of France runs*” entails the presupposition, and there is no need for (7) to inherit it because of the entailment. These two phenomena means that the filtering that took place in (6) and (7) by *even if* is the same as (1a).

The conclusion from this result is that *even if* is also a presupposition filter and the condition of filtering by *even if* is the same as (1a), and the filtering of presupposition also happens in a case that a sentence contains a complementizable predicates which its meaning can't be explained with logical symbols. The further question from this conclusion is that whether the same thing can be said to biscuit conditional *if*, which is different from *if...then....* For example, Sano and Hara (2014) indicated that (8) is biscuit conditional and doesn't give rise to ‘conditional’ meanings.

(8) If you are thirsty, there's beer in the fridge.

Since the meaning of the biscuit conditional *if* is similar to that of *even if*, it is inferred that the biscuit conditional is also a presupposition filter like (1a).



References:

- Alwood, Jens, Andersson, Lars-Gunnar and Dahl, Östen. 1977. *Logic in Linguistics*. Cambridge University Press.
- Horn, Laurence R. 1969. A Presuppositional Analysis of Only and Even. *Proceeding of CLS* 5:98-107
- Kadmon, Nirit. 2001. *Formal Pragmatics*. Blackwell.
- Karttunen, Lauri. 1973. Presuppositions of Compound Sentences. *Linguistic Inquiry* Volume 4 Number 2: 169-193.
- Sano, Katsuhiko and Yurie, Hara. 2014. Conditional Independence and Biscuit Conditional Questions in Dynamic Semantics. *Proceedings of SALT* 24: 84-101.
- 谷中 瞳. 2024. 『言葉の意味を計算する仕組み 計算言語学と自然言語処理の基礎』講談社.



キーワード : バルト・フィン諸語, カレリア語, 形態論, 共格, 具格, シンクレティズム

0. はじめに 本発表は、カレリア語トヴェリ方言における共格の機能をより明確に記述することを目的とし、共格から具格への文法化 (Haspelmath 2004: 24) がカレリア語トヴェリ方言でも観察できることを示す。

1. 先行研究 カレリア語における共格は、接尾辞 *-nke* によって示される。この形式は、通時的には、属格接尾辞 *-n* と共同を表す後置詞 *kera* ‘with’ が融合したものである (Novak et al. 2022: 112)。基本的な機能は、誰かと一緒に行動することを表す (共同) ことであり、また属性的に使われ、全体の一部を示すこともできる (Novak et al. 2022: 112)。

(1) Tuatto poija-nke lähtie-ttih linna-h.
father.NOM son-COM leave-3PL.PST city-ILL
‘Father went to the city with his son.’ (共同) (Novak et al. 2022: 112)

(2) Buabo nieglo-i alaze-t kahten sorme-nke.
Grandmother.NOM knit-PST.3SG mitten-PL.NOM second finger-COM
‘Grandmother knitted mittens that had two fingers.’ (全体のうちの部分) (Novak et al. 2022: 112)

Novak and Egorova (2015: 268-269) も同様に、共格には2つの機能があるとしているが、共同の対象が人 (生物) でなくて物 (無生物) でも良いとしている。

(3) Pappi ris’s’i-nke kopittau.
Priest.NOM cross-COM walk.3SG
‘The priest is walking holding the cross.’ (付随) (Novak and Egorova 2015: 268)

2. 調査方法 Gromova (2002) を PDF 化し、OCR 処理をしたものを、ブラウザで開き、文書内検索で “nke” と検索する。検索された152件を含む全112文を調査対象とする。

3. 調査結果

用法	共同			相手		手段		様態	対象	
	共同	随伴	付随	相互動作 の相手	相互名詞 の相手	道具	言語	様態	比較の 対象	動作の 対象
件数	48	7	23	11	4	1	3	8	1	6

先行研究でも指摘されていた共同、付随の用法に加えて、本発表では、元来多くは接格によって表されてきた**相手、手段、様態、対象の機能**を示す共格が見つかった。

(4) Jogi+randa+kül-i-llä on luja ühtehüş jove-nke
river+shore+village-PL-ADE COP.3SG strong.NOM relation.NOM river-COM
‘The riverside villages have a strong connection with the river’ (相手) (Gromova 2002: 78)

(5) Uuvestah hiän alott-i ruadua kariela-n kiele-nke
again PRO.3SG start-PST.3SG work Karelia-GEN language-COM
‘Again he started wokring with Karelain language’ (手段) (Gromova 2002: 130)

本発表で明らかになったカレリア語トヴェリ方言における共格と具格のシンクレティズムは、ロシア語などの印欧諸語との言語接触の結果である (cf. Stolz, Stroh and Urdze (2013))。

参考文献

- Haspelmath, Martin (2004) Coordinating constructions: An overview. In: Haspelmath, Martin (eds.) *Coordinating constructions*: 3-39. Amsterdam: Benjamins.
- Gromova, Ljudmila (2002) *Aiga lugie i paissa karielakši*. Tver: ChuDo.
- Novak, Irina, and Anna Egorova (2015, October 1-2) *The system of postpositional cases in peripheral dialects of the Karelian language* [Conference material]. Bubrihovskie chteniya: gumanitarnye nauki na Evropejskom Severe. 267-272. Petrozavodsk.
- Novak, Irina, Martti Penttonen, Aleksi Ruuskanen, and Lea Siilin (2022) *Karelian in grammars. A study of phonetic and morphological variation*. Petrozavodsk: Karelian Research Centre of the Russian Academy of Sciences.
- Stolz, Thomas, Cornelia Stroh, Aina Urdze (2013) Comitatives and Instrumentals. In: Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) *WALS Online* (v2020.4) [Data set]. Zenodo.<https://doi.org/10.5281/zenodo.13950591> (Available online at <http://wals.info/chapter/52>, Accessed on 2025-07-24)



P-20 Get-受動態の統語的ステータス:Smuggling分析と事象構造分析の統合アプローチ

鈴木 彪真 木村 一馬

キーワード: 英語, 生成統語論, get-受動態, 遊離数量詞, 事象構造, Smuggling分析

1. はじめに: 本研究では, 遊離数量詞の分布を踏まえたget-受動態の統語派生を提案する。英語において, 動詞getは受動態用法で使用されることが広く知られている。しかし, get-受動態 (Get passive, GP)はbe-受動態 (be-passive, BP)とは異なる統語的振る舞い (e.g. negative contraction, Subject-Auxiliary Inversion cf. Haegeman (1985))を示すことが明らかになっている。また, 意味・事象構造の観点から, Biggs and Embick (2022)やMcIntyre (2012)によって, GPは, BPと異なり, 事象構造を2つ持つと提案されてきた。さらに重要なことに, GPとBPには, (1), (2)のように遊離数量詞 (FQ) の生起できる統語位置に差異が見られる ((1b) vs. (2)).

- (1) a. *They got all arrested by Mary. (cf. OK They all got arrested by Mary) (2) *They did all get arrested by Mary.
b. They were all arrested by Mary. (Fleisher 2008:2-4. 改変)

Fleisher (2008) をはじめとする先行研究は, この違いを be と get の統語的ステータス (v 主要部 vs. T 主要部)に帰着させようと試みてきた。しかし, (3)が示す by-句の生起できる統語位置の制約や事象構造の差異がどのように統語構造に反映されているのかは必ずしも明らかではない。

- (3) a. *The book was by John written. b. The book was written by John. (Collins 2005)

そこで本研究は, GPが持つ事象構造やby-句の生起位置に加えて, FQの振る舞いを捉えることができる統語構造および統語派生を提案することを目指す。

2. get-受動態の統語・意味的特性: GPの統語・意味的特徴として, (i) by-句が生成される統語位置がBPと同じ分布を示すこと, (ii) 事象構造が2層になっていることが挙げられる。

- (4) a. John got arrested by Mary. b. *John got by Mary arrested. (cf. Collins (2005, 2024))

- (5) a. *The Xbox was wet [by being left next to an open window and getting rained on].
b. The Xbox got wet [by being left next to an open window and getting rained on]. (Biggs and Embick 2022)

(4) は GP においても by-句が動詞と過去分詞の間に介在できないことを示し, (5)は, GP においてのみ付加詞である by-句が主節動詞の事象を修飾できることを示している。このことから, GP は, その統語構造のうち by-句の線形順序に関与する派生は BP と同一である一方, 事象構造は BP とは異なっていることが分かる。

3. 提案・分析: 上で提示した事実観察をもとに, 以下の統語構造および統語派生を提案する。

- (6) a. [TP they_j T [vP all t_i]_k v = get [VoiceP [PartP Part arrested [vP V t_k]]_i Voice = by [vP Mary v [t_i]]]] (GP)
b. [TP they_j T = be [VoiceP [PartP all t_i]_k [Part Part arrested [vP V t_k]]_i Voice = by [vP Mary v [t_i]]]] (BP)

この構造は, 事実(i)と(ii)を同時に捉えている。smuggling移動により, by-句の生起位置を捉えると同時に, 事象構造がBPでは1つ, GPでは2つ存在することを捉えている (v主要部が事象構造に対応)。また, (7)のようにBPとGPに対して異なる過去分詞の構造 (PartP)を仮定することで, (1), (2)のFQの分布を捉えることができる。

- (7) a. PartP (BP) [PartP NP_i [Part Part [vP V NP_i]]] b. PartP (GP) [PartP Part [vP V NP]]

GP の PartP は指定部が欠落しており, FQ は事象構造を担う主節 vP の指定部にしか残留できない (残留位置は青色)。一方, BP の PartP は指定部を投射しており, FQ は PartP 指定部を経由し, かつ主節には vP が投射しないため, be 動詞の後ろの位置にしか残留できない。この分析を支持する証拠として, BP と GP が等位接続された文においては, VP-前置が許されないことを示す。

- (8) *[vP t arrested], John was _{iVP} and Mary got _{iVP}.

4. 帰結: 本研究では, 英語におけるGPの統語・意味的振る舞いを捉えるための統語構造を提案した。ここで提示された分析は, GPに生起する過去分詞の統語構造はBPのものとは異なっていること, BPに想定されてきたsmuggling移動がGPの統語派生にも想定できることを強く示唆している。また, smuggling移動がGPの派生にも想定されるのであれば, この移動こそが該当する構文を受動態たらしめる要因であることが示唆される。

参考文献

- Biggs, A and Embick, D. 2022. On the Event-Structural Properties of the English Get-Passive. *Linguistic Inquiry*, 53 (2): 1- 44.
- Bošković, Željko. 2004. Be careful where you float your quantifiers. *Natural Language & Linguistic Theory* 22: 681-742.
- Collins, C. 2005. A smuggling Approach to the Passive in English. *Syntax*, 8: 81-120.
- Collins, C. 2024. *Principles of Argument Structure: A Merge-Based Approach*. Linguistic Inquiry Monographs 87. MIT Press, Cambridge.
- Fox, Danny, and Yosef Grodzinsky. 1998. Children's passive: A view from the by-phrase. *Linguistic Inquiry* 29 (2): 311-332.
- Fleisher, Nicholas. 2008. Passive *get*, causative *get*, and the phasehood of passive vP. In *Papers from the 41st Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society (CLS)*, ed. by Rodney L. Edwards, Patrick J. Midshtyng, Colin L. Sprague, and Kjersti G. Stensrud, 59 - 67. Chicago: University of Chicago, Chicago Linguistic Society.
- Haegeman, L. 1985. The *get*-passive and Burzio's generalization. *Lingua* 66: 53-77.
- Harley, H. 2002. Possession and the double object construction. *Linguistic Variation Yearbook* 2: 31-70.
- Kayne, R. 2000. Toward a modular theory of auxiliary selection. In Kayne, R. S., editor, *Parameters and. universals*, pages 107-130. Oxford University.
- McIntyre, A. 2012. The BECOME = CAUSE hypothesis and the polysemy of *get*. *Linguistics*, 50: 1251-1287.



P-21 日本手話における片手脱落現象 (Weak Drop) をめぐる新しい分析の提案

丸山莉歩 (東京大学大学院総合文化研究科)

キーワード：日本手話、生成音韻論、weak drop、weak prop、Prosodic model

Weak Drop とは両手手話の片手脱落現象のことで、アメリカ手話をはじめとし、日本手話を含むさまざまな手話で観察されている (Padden & Perlmutter 1987; 宮原 2000)。本研究は、Weak Drop として知られる現象が、片手手話への片手追加現象 (Weak Prop) である可能性を日本手話において検討する。

ある同じ意味の手話に両手形と片手形が観察されるということは、基底形が両手形であって片手形が派生されている可能性と、その逆の可能性の二つが考えられる。先行研究では、Weak Drop の対となる「片手手話に片手が追加される現象」すなわち Weak Prop の存在も提案されたことがある (Padden & Perlmutter 1987)。しかし Padden & Perlmutter 自身は 2 つの根拠を挙げて Weak Prop に否定的だった。1 つは、両手形変異を持たない片手手話と両手形変異を持ちうる片手手話を区別する方法がないことである。アメリカ手話には、両手形と片手形を持つ手話単語と、片手形しか持たない手話単語であって、片手形の発音が全く同じものが存在する。もし前者の基底形が片手形だったら、音韻的な条件が同じであるのに、前者だけ両手形の派生形を持つ理由がないというのである。しかし、オランダ手話やサウジアラビア手話を対象とする研究では手話単語の図像性も片手脱落現象の適用に関わるとの指摘がある (Kozak & Tomita 2012; van der Kooij 2001)。ということは、この現象は完全に後語彙的なプロセスとは言えず、語彙的な例外を持つということになる。したがって、音韻的な条件が同じであっても語彙によって派生形の有無が違う可能性も否定できない。

Padden & Perlmutter が挙げたもう 1 つの根拠は、片手追加現象 (Weak Prop) を仮定すると、追加される手の素性を特定する普遍的な方法がないことである。しかしこれは逆に考えれば、「1 つの片手形と複数の両手形の変異を持つ手話」が存在すれば Weak Prop の存在を議論できるということになる。

「日本手話話し言葉コーパス」からの収集による検証を行った。5 つの形態素に両手形と片手形の変異を観察することができた。その中には、Weak Prop の存在根拠となる「1 つの片手形と複数の両手形の変異を持つ手話」も含まれていた。

コーパスで収集した実例を Brentari (1998) の韻律モデルを用いて分析した。韻律モデルの特性は、時系列性に関わらない素性 (Inherent Feature) と時系列性に関わる素性 (Prosodic Feature) を分けて表示でき、かつ非利き手に内部構造を与える点である。

この特性を活用し、H2 のふるまいをセグメントとして扱うことを提案した。「H2 挿入規則」を仮定し、両手形が派生される過程を Weak Prop として説明すると、Weak Drop のみを仮定した場合に説明しにくい、両手形が複数ある状態を説明できる。さらに、先行研究が論じてきた「Weak Drop が禁止される両手形の条件」が実質的には「片手形から Weak Prop によって派生しえない両手形の条件」である可能性を示した。ただし、この結論は Weak Drop を完全に否定するわけではない。

また Liddell & Johnson の MH モデルや Sandler (1987) の HT モデルは「タイミングスロットと一対一対応するセグメント」に位置と動きの素性を結びつけているのに対し、韻律モデルはそうでない。この性質は本研究の分析を可能にしたほか、手話の時系列性と同時性について大きな示唆を与える。このことは、非時系列音韻論の支持にもつながる理論的意義がある。



参考文献

- Brentari, D. (1998). *A Prosodic Model of Sign Language Phonology*. The MIT Press.
<https://doi.org/10.7551/mitpress/5644.001.0001>
- Kozak, L. V., & Tomita, N. (2012). On Selected Phonological Patterns in Saudi Arabian Sign Language. *Sign Language Studies*, 13(1), 56–78. <https://doi.org/10.1353/sls.2012.0027>
- Padden, C. A., & Perlmutter, D. M. (1987). American Sign Language and the architecture of phonological theory. *Natural Language and Linguistic Theory*, 5(3), 335–375.
<https://doi.org/10.1007/BF00134553>
- Sandler, W. (1987). Sequentiality and simultaneity in American Sign Language phonology. Doctoral dissertation, University of Texas, Austin.
- van der Kooij, E. (2001). Weak drop in sign language of the Netherlands. In Valerie Dively (Ed.), *Signed Languages: Discoveries from International Research*, 27–42. Gallaudet University Press.
- 宮原麻衣子 (2000) 「日本手話における Weak Drop について」『日本手話学会第 26 回大会予稿集』、42-43 頁。



キーワード：英語，コーパス調査，テキスト分析，モダリティ

本研究は、法助動詞に動詞の過去形が続く＜may/might+did＞という非標準的な形式について、X（旧 Twitter）をもとにした自作コーパスを用いて分析した。調査の結果から、当該言語形式が単に＜may/might+do＞ないし＜may/might+have+done＞と必ずしも意味を同じくしないことが明らかになった。これを受け、＜may/might+did＞形式が標準的な形式に対し差異をもつものとして使われ得るのはなぜか、考察を試みた。

英語の法助動詞（modal verbs）の“may/might”は、認識的モダリティ（epistemic modality）として「～かもしれない」という可能性の意味をもつ。このとき、典型的には＜may/might+do＞の形式をとるが、以下の（1-3）のように、裸不定詞 *do* の位置に定形動詞の過去形 *did* が現れることがある（X で収集した用例を一部改変。下線は発表者による）。

- (1) He might did it.
- (2) That's where you might went wrong.
- (3) It might took me a while.

このような形式は一般的に非標準的な形式、あるいは誤用（error）と捉えられるにもかかわらず、一定数の用例が観察される。では、標準的な形式とどのような差異があるのだろうか。本研究では予備調査として、先に例示した“did”，“went”，“took”を含む動詞の過去形が“may/might”の直後に続く形式に注目する。データは X 上の投稿および返信から当該形式を収集し、AntConc を使って分析した。

結果として、すでに生じた事態に対し認識的態度を表すもの（4）もあれば、これから生じうる事態に対する認識的態度が示されるもの（5）も観察された。これら用例は、＜may/might+did＞の形式が＜may/might+do＞および＜may/might+have+done＞のどちらとも意味的に重なり得ることを示唆している。

- (4) Guys I think I might did something stupid...
I mix whey protein powder with white monster but forgot to realize its double chocolate flavored...
(<https://x.com/Ghost1NSP/status/1929518519965900802>)

- (5) Also, one of my friends looks like Cynthia Erivo... But i never tell her, I'm afraid she might took it as offense...
(<https://x.com/wajahbahagia/status/1952636082669170924>)

法助動詞をめぐる逸脱的な言語形式として、これまでに、異なる法助動詞が連続共起する二重法助動詞（double modal）がアメリカ南部方言または黒人英語にみられることが知られている（Di Paolo 1989）。メタ言語的な議論の場においても同様に弁明されるように、この形式は一方の法助動詞が単一では表現しきれない意味を表すものとされる。

- (6) I might could go with you on Friday. (Reddit 2013)

とりわけ興味深い指摘は、こうした二重法助動詞にはより選好される形式があるというものである。すなわち、“can may”よりも“may can”のほうが、“may could”よりも“might could”のほうが容認されやすい（Di Paolo 1989）。このことは、“may/might”に特別なふるまいを許すような言語的要因の存在を示唆する。あるいは、“may/might”以外の法助動詞にも動詞の過去形の続く用例があることから（7-8）、＜modal verb+did＞の形式自体がほかと区別されて用いられるようになっている可能性も考えられる。今後さらなる検証を行い、考察を深めていきたい。

- (7) I think you could took him!
- (8) It's not enough, we should went to the airport and booed him.

参考文献

Di Paoplo, Marriana (1989) Double modals as single lexical items. *American Speech* 64(3): 195–224.

参考資料

Reddit (2013) Is anyone in here a native user of double modals in English? I'd love to pick your brain.
https://www.reddit.com/r/linguistics/comments/1nq7dm/is_anyone_in_here_a_native_user_of_double_modals/?show=original [accessed August 2025].



キーワード：タミル語，ドラヴィダ語族，コーパス，相関関係節

文語タミル語では，(1) のような空所型連体修飾節と (2) のような相関関係節の 2 種類の名詞修飾節がみられる．

- (1) [neerru va-nt-a] *paiyan*
 昨日 来る-PST-ATTR 男の子
 「昨日来た男の子」

(Rajendran 2016: 119)

- (2) [enta *paiyan* nanraaka-p paṭi-kkir-aan=oo] anta-p *paiyan*
 どの 男の子 よく 学ぶ-PRS-3SG=Q その 男の子
 「よく学ぶ男の子」

(Rajendran 2016: 118)

両者の違いについて，Ramasamy (1981) は意味的に同一であるとしつつも，相関関係節はあらゆる種類の名詞項を関係節化できる点で空所型連体修飾節と異なるという．すなわち，Keenan and Comrie (1977) の接近可能性階層のうち，主語から比較の対象にいたるまですべての名詞句の関係節化が可能であり，この点で主要部名詞句にとる項に制約のある空所型連体修飾節とは異なるといえる．実際に，空所型連体修飾節の主要部名詞句の節内における項を調査した Kobayashi (2025) では調査した 553 例のうち 453 例 (81.9%) が主格項であり，処格 (8.9%)・対格 (8.1%) などの斜格項は全て合わせて 100 例 (18.1%) であった．しかしながら，いずれの先行研究においても相関関係節が選択される要因について定量的な調査による実証はなされていない．

本研究では，これらを踏まえ，2 種類の名詞修飾節のうち相関関係節が選択される要因が節内における項であると仮定し，コーパス調査を行った．使用コーパスは Tamil Web 2021 (taTenTen21) で，相関関係節の特徴である同一文中に疑問詞 (*e-*) と遠称詞 (*a-*) のペアを含む文を得るため，以下の検索式 (3) を用いた．なお，本研究では，こうしたペアのうち用例数が最も多かった *enta* 「どの」と *anta* 「その」のペアのみを対象とした．

- (3) CQL: [word="enta"] []* [word="anta"], Filter: </s> (not, kwic..kwic,+KWIC)

こうして得られた用例からランダムに 100 例抽出し，重複した例文および相関関係節を含まない例文を手作業で除外した残りの 49 例を本研究の調査対象とした．対象の例文に含まれる相関関係節の主要部名詞句の節内における格を調査した．表 1 はその結果を示したものである．なお，対象の例文に相関関係節が 2 つ並列されている例が 2 例あったため，合計は 51 となっている．格の並び順は Keenan and Comrie (1977) の接近可能性階層に倣った．

表 1: 相関関係節 *enta* ... *anta* ... 内における主要部名詞句の項

格	主格	対格	与格	処格	奪格	属格	計
用例数	10	2	20	14	2	3	51
割合	19.6%	3.9%	39.2%	27.5%	3.9%	5.9%	100.0%

先述の Kobayashi (2025) の空所型連体修飾節の結果と異なり，与格項が最も多く (39.2%)，処格項がそれに続いている (27.5%)．一方，空所型連体修飾節で特に多かった主格項が相関関係節では 19.6% と少ないことがわかる．このことから，主格項以外を関係節化する際は空所型連体修飾節よりも相関関係節が使用されやすいといえる．これは空所型連体修飾節と比べて相関関係節の方が節内における格関係を明示的に示すことができ，斜格項を主要部名詞句とする節に対する認知的負荷が少ないことに起因している可能性がある．

本研究は複数の名詞修飾節を持つ言語におけるその選択の要因をコーパスを用いて調査したものである．この点で，タミル語学のみならず名詞修飾節に関する類型論的な研究に寄与するものである．

参考文献

- Keenan, Edward L. and Bernard Comrie (1977) Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar. In: *Linguistic Inquiry* 8 (1): 63–99.
- Kobayashi, Hayato (2025) Constraints on Head Nouns of Attributive Clauses in Tamil. Unpublished master's thesis, Tokyo University of Foreign Studies.
- Rajendran, Sankaravelayuthan (2016) Noun Modifying Expressions in Tamil. In: *Language in India* 16 (4): 114–154.
- Ramasamy, K. (1981) Correlative relative clauses in Tamil. In: S. Agesthalingom and N. Rajasekharan Nair (eds.) *Dravidian Syntax*. Annamalai Nagar: Annamalai University.

コーパス

Tamil Web 2021 (taTenTen21). https://app.sketchengine.eu/#dashboard?corpname=preloaded%2Ftatenten21_rft.
[最終閲覧日: 2025 年 8 月 19 日].



キーワード：初期新デンマーク語、歴史統語論、語順、代名詞目的語

北ゲルマン諸語の一つに数えられる現代デンマーク語は、厳格な語順の規則を有し、語順の自由度が低い。それに対し、より古い段階のデンマーク語文献においては、より自由に諸要素が配置されていたことが知られている。本研究では、初期新デンマーク語 (Early Modern Danish, 1500 – 1700 年頃) の節内の代名詞目的語の位置に着目し、当該時期のテキストを用いてその語順の調査を行なった。

VO 語順の現代デンマーク語において、節の諸要素の大部分は定動詞より後ろに置かれる。代名詞目的語もふつう定動詞より後に置かれるが、その語順は一部条件下で特徴的である。定動詞が (助動詞ではなく) 本動詞、即ち非定動詞 (不定詞や過去分詞) を含まない主節において、定動詞後の語順は [副詞句 – 目的語] となるが、代名詞目的語を取る場合、[代名詞目的語 – 副詞句] という、代名詞目的語が先行する語順となる (cf. 例文 (1))。その一方で、非定動詞を含む主節や全ての従属節では目的語の種類による語順の違いは見られない。なお、副詞句が置かれうる位置は前域 (定動詞の前)、中域 (定動詞と非定動詞の間)、後域 (非定動詞以後、節末尾) の三箇所あるが、本研究では目的語の語順に関わる、中域に置かれる副詞句 (中域副詞) を扱う。

(1) Jeg kender **hende** ikke (lit. *I know her not*, “I don’t know her;” *hende* が代名詞目的語、*ikke* が中域副詞)

現代語と異なり、初期新デンマーク語では動詞の位置や目的語の置かれる位置にバリエーションがあり、目的語が動詞の後ではなく、前に置かれている例もしばしば見られる。当該時期のテキストに対し、動詞を基準にして目的語の位置を量的に調査した研究には、Petersen (2012, 2018) があるが、名詞句目的語と代名詞目的語とを分類せず計数しており、また副詞句との位置関係は調査されていない。加えて、デンマーク語の統語変化をまとめている Heltoft (2019) は、初期新デンマーク語テキストにおける代名詞目的語が動詞に対して前置される例が、中世デンマーク語 (1100 – 1500 年頃) の時期から引き続いて多いことに言及しているが、その語順について詳述はしていない。このように、当該分野には研究の余地がある。本研究では、その代名詞目的語の語順について、動詞・中域副詞との位置関係を調査し、その語順の規則について考察を行う。

調査では、当該時期の資料をジャンル・時期を分散させつつ 18 種類選び、代名詞目的語の位置を軸にして、定動詞・非定動詞・中域副詞との位置関係を調査し、その語順の出現頻度をそれぞれ計数した。調査には電子テキストを用いた。結果としては、隣接時、代名詞目的語が副詞句に先行する節の出現頻度が有意に高かったが、現代語と異なり、助動詞と非定動詞を含む節内で代名詞目的語が先行する例も少なくなかった。

調査結果より、初期新デンマーク語では代名詞目的語の置かれうる位置が多岐にわたり、その語順の規則が現代語とは違っていたと見られる。すなわち、副詞句の前に代名詞目的語を置く規則は少なくとも初期新デンマーク語の時期には働いていたが、非定動詞の有無や節の種類を問わずその位置に置ける点が現代語とは異なる。Heltoft (2019) の提示する中世デンマーク語の語順スキーマに従うと、中域には背景・焦点を表す位置があり ([背景 – 焦点小辞 – 焦点] という語順)、原則として代名詞目的語は背景の位置 (= 中域副詞の前) に置かれたと説明できる。その一方で例は少ないが、焦点小辞になりうる中域副詞に後続する代名詞目的語は焦点化されていると言える。例文 (2) では *icke* が焦点小辞、*dend* が焦点化を受けていると考えられる。

(2) Om nogen for troloufvelse-n hafde nogen hiemmelig sygdom [...] och icke **dend** obenbarede,
if someone for engagement-the had some secret illness and not it revealed

また、代名詞目的語の前後両方に副詞句が置かれているという、現代語では見られない例も当該時期のテキストには少数見られるが、同様に代名詞目的語とその前が背景要素であり、後部要素が焦点要素であると説明できる。以上より、現代語では再分析によって形骸化した形でしか残っていない背景・焦点の位置が、初期新デンマーク語ではまだなお機能していた可能性があると考えられる。

参考文献

- Anthony, Laurence (2024). AntConc (Version 4.3.1) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University.
<https://www.laurenceanthony.net/software/AntConc>
- Faarlund, Jan Terje (2019). *The Syntax of Mainland Scandinavian*. New York: Oxford University Press.
- Gregersen, Frans & Inge Lise Pedersen (2000). A la Recherche du Word Order not quite perdu. In: Susan C. Herring, Pieter van Reenen & Lene Schøsler (eds.), *Textual Parameters in Older languages*. 393–431. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Hansen, Erik & Lars Heltoft (2011). *Grammatik over det danske sprog*. Odense: Syddansk Universitetsforlag.
- Heltoft, Lars (2011). Lette pronomenerens placering: klise og topologisk integritet. *Ny forskning i grammatik* 18. 61 – 80.
DOI: [10.7146/nfg.v19i18.23668](https://doi.org/10.7146/nfg.v19i18.23668)
- Heltoft, Lars (under medvirken af Marita Akhøj Nielsen) (2019). Fra gammeldansk til nutidsdansk. In: Hjort, Ebba, Henrik Galberg Jakobsen, Bent Jørgensen, Birgitte Jacobsen, Merete Korvenius Jørgensen & Laurids Kristian Fahl (eds.), *Dansk Sproghistorie 3: Bøjning og bygning*. 129–225. Copenhagen/Aarhus: Det Danske Sprog- og Litteraturselskab/Aarhus Universitetsforlag.
- Holmberg, Anders (1986). *Word order and syntactic features in the Scandinavian languages and English*. Stockholm: University of Stockholm.
- Koch, Peter and Wulf Oesterreicher (2007). Schriftlichkeit und kommunikative Distanz. *Zeitschrift für germanistische Linguistik*, 35(3), 346 – 375.
- Lundskær-Nielsen, Tom, and Philip Holmes (2015). *Danish: A comprehensive grammar*. New York: Routledge.
- Petersen, Kathrine Thisted (2012). Hvor verbet retteligen placeres skal — en undersøgelse af OV-ledstilling i Danske Lov. *Arkiv för Nordisk Filologi*. 127, 145 – 171.
- Petersen, Kathrine Thisted (2018). *Udviklingen af inkorporation fra gammeldansk til moderne dansk – fra umarkerede kasusformer til markeret artikelløshed og enhedstryk*. Odense: Syddansk Universitetsforlag.
- Sundquist, John D. (2003). The Rich Agreement Hypothesis and Early Modern Danish embedded-clause word order. *Nordic Journal of Linguistics*. 26.2, 233 – 258. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vikner, Sten (2006). Object Shift. In: Everaert, Martin and Henk van Riemsdijk (eds.) *The Blackwell companion to syntax*, 392 – 436. Massachusetts: Blackwell Publishing Ltd.
- Westergaard, Lennart (2024). Det middeldanske baggrundsfelt: Subjekts- og letledspladser. *Ny forskning i grammatik*. 31. 234 – 252.



キーワード：日本語(北海道方言)、方言学、責任性

北海道方言の助動詞ラサルには、大きく分けて①非意図(自発)、②可能、③結果状態(逆使役)の3つの用法があることが知られている(山崎(1994),佐々木(2007),円山(2007)等)。このうち、非意図を表す用法には、バスの降車ボタンに荷物が触れた際に「おささってしまった」という例に見られるような「自分のせいではない、自然にそうなったのだと、言いのがれる気持ち」を表すこともあると説明されている(菅(2017))。また、西本(2010)は、「悪いのは私ではない。あくまで不可抗力」というニュアンスであると表現している。このラサルの責任回避的な用法について詳細に論じた研究は管見の限り見当たらず、責任性がラサルの生産性にどのように関わっているかについてもまだ明らかになっていない。

円山(2007, 2016)は、非意図用法のラサルの生産性は、日本語の助動詞ラレルよりも高く、他動性の高低の制限を受けないと述べている。一方で、これまでに非意図用法のラサルの生産性が制限される場合があることが2つの観点から指摘されている。一つは、意図性を含意する「わざと」、「わざわざ」等の副詞や、「～てみる」等の補助動詞との共起ができないという指摘である(山崎(1994), 円山(2007))。もう一つは、動作主が意図的にコントロールすることが動詞の意味の一部として指定されている場合(例えば「謀る」、「暗殺する」等)にはラサルの生産性が制限されるという主張である(村山(2024))。しかし、この他にも、動作主の意図性が含意されておらず、非意図的な文にもかかわらず、容認されない例がある。

(1) *手術中に誤って患者の動脈が切らさった。

cf. 料理中に指が切らさった。

(2) *サッカーの試合中、太郎の足が折らさった。

cf. 近くで見たくて引っ張ったら、枝が折らさった。円山(2016: 245)

(3) *国宝の茶碗うっかり壊ささった。

cf. 茶碗うっかり壊ささった。山崎(1994:234)

本発表では、(1)～(3)のような文が容認されないのは、責任性に基づく制約によるものであり、責任の度合いが高い場合にはラサルを使用することができないことを主張する。

責任性に関する研究として、Pardeshi (2002)、吉成・パルデシ・鄭(2010)が挙げられる。Pardeshi (2002)は、日本語はインド諸語と比較して「責任」という概念により敏感であり、非意図的事象の幅広い領域を他動詞でコード化できることを主張している。また、吉成・パルデシ・鄭(2010)は、日本語・韓国語・マラーティー語の非意図的な出来事の描写における他動詞の使用と責任意識についての調査を行い、「日本語では、責任意識が高く認識される場合、他動詞を用いて事象を言語化する傾向がある」ことを明らかにしている。

本発表では、ラサルはどのような場合にも責任を回避できるのではなく、結果として生じる事態の影響が極めて大きい場合(修復不可能な事態)や、対象が個別化されている場合(cf. Hopper and Thompson(1980))等には、ラサルを付加することによって責任を回避することができず、容認されない文となることを主張する。

参考文献

- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56: 251-299.
- 円山拓子 (2007) 「自発と可能の対照研究—日本語ラレル、北海道方言ラサル、韓国語 cita—」『日本語文法』 7(1): 52-68.
- 円山拓子 (2016) 『韓国語 cita と北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』 東京: ひつじ書房.
- 村山友里枝 (2024) 「北海道方言『ラサル』の非意図用法における生産性の制約について」日本言語学会第 169 回大会ポスター発表, 北海道大学.
- 西本伸顕 (2010) 『笑説 これが北海道弁だべさ』 札幌: 北海道新聞社.
- Prashant, Pardeshi (2002) “Responsible” Japanese vs. “International” Indic: A Cognitive Contrast of Non-intentional Events. 『世界の日本語教育』 12: 123-144.
- 佐々木冠 (2007) 「北海道方言における形態的逆使役の成立条件」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨(編)『他動性の通言語的研究』 259-270, 東京: くろしお出版.
- 菅泰雄 (2017) 「〈道新こども新聞週刊まなぶん いいっしょ北海道弁〉書かさない*自分のせいではない」2017 年 2 月 25 日北海道新聞朝刊.
- 山崎哲永 (1994) 「北海道方言における自発の助動詞-rasaru の用法とその意味分析」小野米一(編)『ことばの世界: 北海道方言研究会 20 周年記念論文集 (北海道方言研究会叢書第 5 巻)』 227-237. 札幌: 北海道方言研究会.
- 吉成祐子・パルデシ・プラシャント・鄭聖汝(2010) 「非意図的な出来事における他動詞使用と責任意識—日本語・韓国語・マラーティー語の実態調査を通じて—」岸本秀樹 (編)『ことばの対照』 175-189, 東京: くろしお出版.



キーワード：現代日本語、認知言語学、ものだ、モダリティ表現

本発表は、現代日本語のモダリティ表現「ものだ」（以下、「ものだ」）の使用条件について考察する。具体的には、「ものだ」が用いられる場合とそうでない場合を対照的に分析し、その使用の背後を明らかにすることを目的とする。従来の研究では、「ものだ」の多様な用法は、「一般性」（坪根 1994、藤井 1996 など）や「確定性」（日本語記述文法研究会編 2003；高橋 2010, 2016, 2021 など）によって説明されてきた。しかし、一般性や確定性だけでは、説明しきれない場合がある。

まず、個体の発話時現在の習慣や傾向を述べる場合、一般性も確定性も関係しているにもかかわらず、「ものだ」は用いられない。これは、普遍的な傾向や発話時以前の習慣・傾向を述べる場合に「ものだ」が用いられるのとは対照的である。

- (1) 私はよく泣く { $\emptyset$ /?ものだ}. <個体の発話時現在の習慣・傾向>
- (2) 赤ん坊はよく泣く { $\emptyset$ /ものだ}. <普遍的な傾向>
- (3) 私は昔、よく泣いた { $\emptyset$ /ものだ}. <個体の発話時以前の習慣・傾向>

(1) と (2) (3) の違いは、「ものだ」の前の部分に表される内容の真偽が、発話時以降に変化しうるか否かにある。(1) の「私はよく泣く」は、発話時においては真として確定しているが、話し手が「もう泣かない」と決心するなど、発話時以降に偽となる可能性を秘めている。それに対し、(2) の「赤ん坊はよく泣く」は普遍的な真理であり、(3) の「私は昔、よく泣いた」は発話時以前の事実であるため、発話時以後に真偽が変化することはない。

一方で、(2) (3) について、「ものだ」の有無を比較すると、「ものだ」が用いられる場合は、それぞれ「当然」や「感慨」といった、「ものだ」の前の部分に表される内容に対する、発話時における話し手の心的状態が表されるのに対し、「ものだ」が用いられない場合は、そのような意味は弱くなり、単なる事実の叙述の意味が強くなる。

また、発話時以前の 1 回限りの出来事を述べる場合、「確定性」は満たされるものの、「ものだ」は用いられにくい。ただし、感慨を伴う内容の場合は、「ものだ」が用いられる（日本語記述文法研究会編 2003：222）。

- (4) 夏祭りには、1 度出かけた { $\emptyset$ /?ものだ}. <感慨を伴わない内容>
- (5) あの時は、心臓がとまりそうなくらい驚いた { $\emptyset$ /ものだ}. <感慨を伴う内容>

感慨は発話時における話し手の心的状態であり、(2) (3) と同様に、(5) でも「ものだ」がない場合は感慨の意味は弱まる。一方で、(4) と (5) を比較すると、「ものだ」の前の部分に表される内容と、発話時における話し手の心的状態との関係が異なることがわかる。(4) の「夏祭りには、1 度出かけた」は、客観的な事実の叙述であり、発話時の話し手の心に与える影響は小さい。それに対し、(5) の「あの時は、心臓がとまりそうなくらい驚いた」は、話し手の主観的な感情を表しており、その感情が発話時の話し手の心にも残っているなど、何らかの影響を及ぼしやすい。

以上から、「ものだ」は、真偽が変化しない内容に対する、発話時における話し手の心的状態を表す場合に用いられると言える。



参考文献

- 高橋雄一（2010）「複合辞の「ものだ」についての一試論―「内容節的な構造」を手掛かりに―」『専修国文』87, 137-167, 専修大学日本語日本文学文化学会.
- 高橋雄一（2016）「<感心・あきれ>の「ものだ」「ことだ」について」『専修国文』99, 1-25, 専修大学日本語日本文学文化学会.
- 高橋雄一（2021）「「もの」「こと」を含む複合辞の広がり」『東アジア国際言語研究』2, 1-12, 東アジア国際言語学会.
- 坪根由香里（1994）「「ものだ」に関する一考察」『日本語教育』84, 65-77, 日本語教育学会.
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』くろしお出版.
- 藤井ゆき（1996）「文末の「モノダ」の意味・用法」『広島大学留学生センター紀要』6, 49-64, 広島大学留学生センター.



キーワード：穎娃町方言、薩隅方言、内破音、語末子音、中和、動的音素論、通時変化、形態音韻論

本研究は、鹿児島県南九州市穎娃町方言の語末子音（例：[tot̚]「時」における[t̚]）の音素解釈に関して、これまで他方言の同種の現象について取られてきた共時的解釈ではうまく捉えられない状況を報告し、その解決策として、基底を混成的に捉えるという考え方を提案する。

柴田（1959）は語末子音が単独形で中和することから、音節末に現れる内破音を一括して/Q/と解釈する。例えば、通常は対立する/k/と/b/は、/toQ/ [tot̚]「時」と/et/ [et̚]「えび」において中和し、/Q/と解釈される。しかし、この解釈案は単独形に助詞がつく場合の形態音韻交替については扱いにくい。例えば、「時に」が[tog̚i]、「えびを」が[eb̚i]u]のようになるが（無声子音は母音間で有声化）、この場合、この言語の真の基底子音/k/および/b/が観察されると考え、基底を区別することも考えられる。同じ鹿児島県の内之浦方言を扱う高城（2025）はこの立場に立つ。

しかし、高城（2025）のような基底の指定法は、穎娃町方言において簡単にはいかない。それは、語末子音の種類によって、さらに助詞によって、立てるべき基底が異なるからである。これを表1に示す。「基底 N」はこの言語に生じつつある新しい音韻体系を重視した解釈、「基底 O」はより古い体系を重視した解釈である。穎娃町方言の問題点は、基底 N を立てるべき証拠も、基底 O を立てるべき証拠も同時に存在し、どちらとも決め難い点にある。

表 1. 語末子音の基底と音声

	基底N	単独	TOP	ACC	DAT	基底O
「時」	/tot̚/	[tot̚]	tod̚ʒa	tod̚ʒu	tod̚ʒi	
			tog̚a		tog̚i	/tok/
「えび」	/et̚/	[et̚]	ed̚ʒa	ed̚ʒu	ed̚ʒi	
			ebi			/eb/

本研究では、6名の話者（80代3名、70代1名、60代後半2名）のデータに基づき、表2のような共時的分布を明らかにする。80代では基底 O が顕著に観察され、70代の話者は基底 N が優勢ながら k 系の基底 O も散在し、60代では基底 N へほぼ完全に移行する。表からも明らかなように、語末子音と助詞の種類に関して、何らかの階層的な分布（例：「Dorsalの方がLabialよりも基底 O をとりやすい」「DATの方がACCよりも基底 O をとりやすい」など）は確かめられない。

結論として、柴田的な/Q/解釈も、高城的な基底 O 解釈も、穎娃町方言で現在進行しつつある変化をうまく捉えられない一方、表2のように「どの世代で」「どの語末子音に関して」「どの助詞がついた時に」「どちらの基底をとるか」という方針で混成的に記述した方が望ましいと言える。

表 2. 世代別形態音韻交替形成と予想される基底

語末子音が/k/に遡る例（「時」）

	TOP	ACC	DAT	基底
60代	tod̚ʒa	tod̚ʒu	tod̚ʒi	Nのみ /tot̚/
70代	tod̚ʒa (tog̚a)	tod̚ʒu (tog̚u)	tod̚ʒi (tog̚i)	N優勢 /tot̚/ /tok/
80代	(tod̚ʒa) tog̚a	(tod̚ʒu) tog̚u	(tod̚ʒi) tog̚i	O優勢 /tok̚/ /tot̚/

語末子音が/b/に遡る例（「えび」）

	TOP	ACC	DAT	基底
60代	ed̚ʒa	ed̚ʒu	ed̚ʒi	Nのみ /et̚/
70代	ed̚ʒa (eb̚a)	ed̚ʒu (eb̚u)	ed̚ʒi (eb̚i)	N優勢 /et̚/ /eb̚/
80代	ed̚ʒa	ed̚ʒu eb̚u	ed̚ʒi ebi	N・O両方 /eb̚/ /et̚/

参照文献：

上村孝二（1957）「南九州方言音の分布を中心に一内破音・鼻音化その他一」（鹿児島大學文理学部研究紀要「文科報告」6）17-25.

木部暢子（1990）「鹿児島県額娃町方言の語中有声化について」『国語国文薩摩路』34：56(1)-45(12).

木部暢子（2001）「鹿児島市方言に見られる音変化について」『音声研究』5(3): 42-45.

柴田武（1959）「鹿児島県揖宿郡額娃町」国立国語研究所（編）（1959），315-342.

高城隆一（2025）「鹿児島県大隅半島内之浦方言の音韻と形態」博士論文，東京大学. 54-78; 96-100.



P-28 コロケーションによるダジャレの定型化性・意外性の客観的抽出方法と類型化 — 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いた表現効果の計量的測定—

田中伶音 rene.tanaka12@gmail.com

キーワード：a.日本語、b.コーパス言語学、c.定型化指標、意外性指標、多変量解析

【背景】ダジャレの「面白さ」に関わる客観的研究は、金久保正明(2013)、花房竜馬・荒木健治(2023)他の興味深い研究があるものの、未だ十分に解明されているとはいえない状況にある。また、研究方法についても、「面白さ」を含めた評価は、研究者が選定した多様なダジャレについて、文字のみで提示し、評定尺度等による印象調査を行うものが主流であり、ダジャレの構造自体から、「面白さ」に関する客観的な指標を見出し、計量的に提示する研究は、管見に入っていない。

【目的】本研究は、ダジャレ構造に着目し、日本語のコーパスにおけるコロケーションに関わる指標等からダジャレの面白さに関連する指標を見出し、その指標によりダジャレの類型化を試みることを目的とする。

【方法】本発表では、「AがB。」の構造をもつダジャレに絞り、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』内の、AとBのコロケーションの頻度・MI・LDに着目し、多変量解析の一種であるクラスタ分析を用いて類型化する方法をとった。コロケーションの分析には、国立国語研究所・Lago言語研究所が開発した『NINJAL-LWP for BCCWJ』と、筑波大学・国立国語研究所・Lago言語研究所『NINJAL-LWP for TWC』を利用した。なお、大学生40名を回答者とする各ダジャレの「面白さ」に関連する項目の評定尺度による印象調査を、文字・AIによる画像を提示して実施した。

【結果・考察】 表. 「AがB。」型ダジャレにおけるAとBのコロケーションの指標

	直接コロケーション			調整済みコロケーション				
	直頻度	直MI	直LD	調頻度	調MI	調LD	調整法	ソフト
テントウムシ(虫)が転倒	0	0	0	1	9.58	3.67	b-a	T
テントウムシ(虫)が点灯	0	0	0	0	0	0	φ	B
テントウムシ(ライト)が点灯	0	0	0	7	13.48	8.78	b-a	B
ホシ(犯人)が星(人物・男)	0	0	0	3	4.08	1.32	φ-b	B
馬がうまい	0	0	0	5	7.53	4.52	b-φ	B
梅がうめえ	0	0	0	5	7.11	4.12	b-a	B
布団が吹っ飛んだ	9	12.89	6.8	9	12.89	6.8	φ	T
イカが怒った	0	0	0	1	11.41	5.88	b-φ	B
			定型指標				意外性指標 (=非日常性指標)	

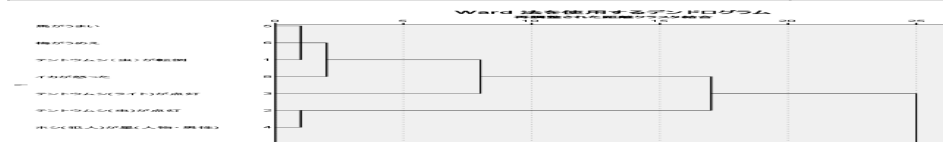


図. 直接LDと調整LDを指標とするクラスタ分析によるダジャレ類型

ダジャレの語をそのままAとBに入力した「直LD」が、ダジャレの「定型指標」としてみとめられ、AとBに該当するコロケーションが見られない場合、同じ属性のシノニムにより代用した「調LD」が「面白さ」の重要要素である「意外性指標」としてみとめられることが明らかとなった。両指標によるダジャレ類型は図のとおりである。なお、この指標は印象調査結果と有意な相関を示している点で興味深い。

参考文献

金久保正明2013「形態素解析手法と通俗的語群に基づく類音文変換システム」『情報処理学会論文誌』

Vol.54,No.7, pp.1937-1950

国語学会編1993『国語学大辞典』東京堂出版

花房竜馬・荒木健治2023「駄洒落を含む対話における可読性と面白さの相関分析」『言語処理学会 第29回

年次大会 発表論文集』pp.1063-1068

前川喜久雄(監修)山崎誠(編)2014『講座日本語コーパス2.書き言葉コーパスー設計と構築ー』朝倉書店



Keywords: Japanese, Grammaticalization, Morphosyntax, Conditional Evaluative Constructions, Modality, NPI licensing

1 Introduction

Many forms of Japanese modality are expressed with seemingly complex structures known as *Conditional Evaluative Constructions* (CEC). For example, instead of modal verbs like *must* or *may*, Japanese would use structures such as in (1) (NEGVAL = negative evaluative):

- (1) a. NEC-CEC: [[V-NEG-COND] NEGVAL]
 isoga-nak-ereba naranai
 hurry-NEG-COND NEGVAL
 ‘(we) have to hurry’ (‘if we don’t hurry, it’s bad’)
- b. PROH-CEC: [[V-COND] NEGVAL]
 tabako-o sut-tewa ikenai
 tobacco-ACC smoke-COND NEGVAL
 ‘(you) mustn’t smoke’ (‘if you smoke, it’s bad’)

CEC exhibit many syntactic and semantic properties of both complex structures (e.g. a relatively high degree of variability) as well as idiomatized forms (e.g. the inability to license polarity items, and prosodic unity), as presented in Akatsuka (1992), Hanazono (1999), Kaufmann (2017), Kaufmann and Tamura (2020), and the present author (2025a,b), leaving their morpho-syntactic status a matter of debate.

Previous work has given less attention to truncated forms and their role in grammaticalization. This presentation addresses *Conditional Copula Constructions* (CCC), a newly emerging type derived from truncated NEC-CEC. The aim is three-pronged: (i) document the paradigm of CCC and establish them as their own category, (ii) demonstrate that CCC are best analyzed as reanalyzed copula-based forms and not e.g. ellipsis, (iii) offer a possible explanation for the contrast in truncability between NEC-CEC and PROH-CEC mainly on the basis of NPI-licensing behavior.

2 Conditional Copula Constructions (CCC)

NEC-CEC and QVAL-based CEC (e.g. *-ba (dō)?* ‘-COND how?’ = suggestion) can famously undergo omission of the evaluative, leaving conditional remnants utterance finally. Such remnants are usually not considered embeddable. However, speakers (esp. younger ones) extend them with the copula *da*, seemingly reanalyzing them as nominal predicates.

In addition to the well-known utterance-final truncation, I have been able to attest such CCC before final particles, conjunctions, *-no*, *-ka*, *-kke*, and conditionals, as well as in adverbial, gerund, past, hearer-HON, and attributive forms. Hence, CCC exhibit a nearly full paradigm parallel to nouns/*na*-adjectives. Illustrations showing the full paradigm, have to be omitted here due to length constraints, but (2) shall exemplify the data using the adverbial and pre-CONJ cases.

- (2) a. *shigoto-ni de-naku-cha-ni nat-ta-node a-e-masen*
 work-DIR appear-NEG-COND-ADV become-PST-because meet-POT-POL.NEG
 ‘I have to go to work, so I cannot meet’
- b. *sōji si-nakya da-kedo mattaku yaruki-ga nai*
 cleaning do-NEG-COND COP-but at all motivation exist.NEG
 ‘I have to clean, but I cannot be asked to’

Especially for the pre-CONJ case, it is important to highlight that the CCC is clearly pronounced as a prosodic unit – indicating that these are not separate sentences starting with a resumptive *da*.

3 Why only NEC-CEC?

As demonstrated in (3), in NEC-CEC even weak NPI like *yubi ippon* ‘one finger’ cannot be licensed by the first negation, the COND (in any of its possible forms) or the NEGVAL. In PROH-CEC, on the other hand, even the strong NPI *shika* can be licensed by NEGVAL, despite there seemingly being an intervening clause boundary. I take examples such as these as evidence for both the clausal simplicity of CEC as well as an explanation for why only NEC-CEC can be truncated – i.e. because only there NEGVAL has lost its function and meaning.

- (3) a. **yubi ippon ugokasa- { nakya, nakucha, naito } (ikenai)*
 one finger move- NEG-COND NEGVAL
 intended: ‘I have to lift a finger’
- b. *isshoni sunde-iru hito-ni-shika at-tewa ikenai*
 together live-PROG person-DAT-SHIKA meet-COND NEGVAL
 ‘you may only meet people you live with’

4 Conclusion & Proposal

By providing this systematic description of CCC, I present a case of advanced grammaticalization in CEC, beyond what previous compositional analyses have assumed. I believe such structures to be best analyzed as nominal-like forms, as there is no licensing antecedent that would support an ellipsis analysis, and I propose that conditional remnants in CCC ought to be analyzed as monomorphemic modal suffixes.



References

- Akatsuka, Noriko (1992). “Japanese Modals are Conditionals”. In: *The Joy of Grammar: A Festschrift in Honor of James D. McCawley*. Ed. by Gary Larson, Lynn MacLeod, and Diane Brentari. John Benjamins Publishing, pp. 110 sqq.
- Hanazono, Satoru (1999). “Jōkenkei Fukugō Yōgen Keishiki-no Nintei [Acknowledgement of Complex Predicate Forms Based on Conditionals]”. In: *Kokugogaku* 197.6 (30), pp. 39–90.
- Kaufmann, Magdalena (2017). “What ‘may’ and ‘must’ may be in Japanese”. In: *Japanese/Korean Linguistics*. Vol. 24.
- Kaufmann, Magdalena and Sanae Tamura (2020). “Japanese Modality – Possibility and necessity: deontic and epistemic”. In: *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*. Ed. by Yukinori Takubo and Wesley Jacobsen. Mouton Handbooks on Japanese Language and Linguistics. Berlin: Mouton de Gruyter. Chap. 13.
- the present author (2025a). “On the Simplicity of Complex Modal Predicates: Evidence for the Grammaticalization of Conditional Evaluative Constructions”. MA thesis. Aoyama Gakuin University.
- (2025b). “Pitching Simplicity: On the Prosody of Japanese Modal Constructions”. Talk given at *the 27th Seoul International Conference on Generative Grammar*, Sogang University, Aug 14–16 2025.



キーワード：線文字 A、ミノア語、クレタ島、形態素分析、古代文字

線文字 A は、紀元前 2 千年紀、クレタ島を中心とするエーゲ海に栄えたミノア文明で用いられていた文字の一種である。1952/3 年に解読された線文字 B は、線文字 A に改変を加えてギリシア語の表記に適用したものである。解読された線文字 B の音価を線文字 A に当てはめることで、線文字 A 文書の 90% 近くは「読む」ことが可能である。しかしながら、それが記す言語についてはわかっていないことが多い (以上、松本 2001a)。

本発表の目的は線文字 A で記された言語 (以下、便宜的にミノア語と呼ぶ) を形態素に分析することである。ミノア語を特定の言語と結び付けて「解読」したとする主張がしばしばなされるが、どれも定説にはなっていない。実際、その根拠は語彙の表面的な類似のみであることも多い。一方、接頭的・接尾的な要素に着目している先行研究もある。松本 (2014: 367-410) は、線文字 A 研究の現状を要約したものであるが、ミノア語においては「語形変化の規則的なパターンをその中に発見することが非常に難し」い (松本 2014: 380) としつつ、先行研究 (特に Crevatin (1975)) の成果として、a-, -ja, -na~ne, -ti といった接頭的・接尾的要素を認めている (松本 (2014: 381))。

Finkelberg (2001: 88ff.) は、線文字 A 資料のうち、祭器に刻まれた、宗教的内容を含むと思われる定型表現 (libation formula) について、形態素分析を試みている。一方、粘土板資料についてはこれを行っていない。その理由は、粘土板資料が「おそらく種々の取引に関係する名前や商品のリストに過ぎないため、形態的な分析の出発点になりにくい」(Finkelberg 2001: 88) からであるが、松本 (2014: 381) に挙げられている接頭的・接尾的要素には粘土板資料に見られる語も多い。そこで、粘土板資料についても形態素分析を試みることは有用だと考える。

調査方法としては、まず、(i) オンラインのデータベース SigLA を用いて、粘土板に現れる語の「読み」を収集する。これらはラテン文字表記である (kiro など)。以下、このラテン文字の文字列を転写文字列と呼ぶ。次に、(ii) それらを互いに異なる転写文字列にリストアップする。次に、(iii) それぞれの転写文字列から、3 文字以上の連続する文字列を抜き出す (例えば、kiro から kir, iro, kiro を得る)。(iv) それらの 3 文字以上の連続する文字列を、(ii) で得た互いに異なる転写文字列の中で検索する。こうして、3 文字以上の連続する転写文字列を共有している例を得る (例えば、kiro と kira)。(v) それらの組から、接頭的・接尾的要素を分析する。この分析の結果、松本 (2014: 381) が挙げたものに加えて、sa-, ka-, qe-, -se, -ti, -te, -ta, -ju といった接頭的・接尾的要素も挙げることができる。

参考文献：

- 松本克己 (2001a) 「ミノア線文字 A」 河野六郎・千野栄一・西田龍雄 (編著) 『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』 977-989. 東京: 三省堂.
- _____ (2001b) 「ミノア線文字 B」 河野六郎・千野栄一・西田龍雄 (編著) 『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』 989-999. 東京: 三省堂.
- _____ (2001c) 「ミノア文字」 河野六郎・千野栄一・西田龍雄 (編著) 『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』 976-977. 東京: 三省堂.
- _____ (2014) 『歴史言語学の方法: ギリシア語史とその周辺』 東京: 三省堂.
- Crevatin, Franco (1975) La lingua minoica: metodi d'indagine e problemi. *Studi triestini antichità in onore di Luigia Achillea Stella*, 1-63. Trieste: Università degli studi, Facoltà di lettere e filosofia. (発表者未見)
- Finkelberg, Margalit (2001) The Language of Linear A: Greek, Semitic, or Anatolian?. In: Robert Drews (ed.) *Greater Anatolia and the Indo-Hittite Language Family: Papers presented at a Colloquium hosted by the University of Richmond, March 18-19, 2000*. Journal of Indo-European Studies Monograph Series 38: 81-105.
- Godart, Louis and Jean-Pierre Olivier (1976-1985) *Recueil des inscriptions en linéaire A*, I-V. Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner. https://cefael.efa.gr/detail.php?site_id=1&actionID=page&serie_id=EtCret&volume_number=21&issue_number=1
- Salgarella, Ester and Simon Castellan (2020-) SigLA. <https://sigla.phis.me/index.html> [最終閲覧日 2025 年 8 月 20 日].



W-1

語形成とプロソディーの関係

企画者・司会者：沈力

発表者：窪園晴夫・下地理則、沈力

趣旨：

語形成の研究においては、これまで接辞の添加や語根の結合といった形態的操作に焦点が当てられてきた。しかし近年では、韻律（プロソディー）の構造や制約が語形成の出力に深く関与する現象が、様々な言語において報告されつつある。一方で、語形成の構造や統語的關係が韻律的特徴の形成に影響を与えるという逆方向の作用も観察されており、語形成と韻律のあいだには双方向的な相互關係が存在することが示唆される。本ワークショップでは、この相互作用を「韻律→語形成」「語形成→韻律」「語形成↔韻律」という三つの方向性に整理し、個別の言語事例を通じて比較・検討する。具体的には、日本語における韻律鋳型（prosodic template）が赤ちゃん言葉や短縮語などの語形成を規定する現象（韻律→語形成）、伊良部島方言における語根並置による構造が句的な韻律ドメインを形成する複合形式（語形成→韻律）、そして中国語灌雲方言における連続変調（Tone Sandhi）は、統語階層や語形成構造に応じて段階的に適用される一方で、音韻的手段として語や句の構成単位を可視化する機能も担っており、こうした双方向的な關係を中心に検討する。

本ワークショップの目的は、語・複合語・句といった単位をまたぐプロソディーの作用を理論的に再考し、語の定義や語彙化、統語構造と音韻構造の接点に関する新たな視座を提示することである。

構成：

1. ワークショップの趣旨、背景の説明（10分）
2. 発表1（25分）
3. 発表2（25分）
4. 発表3（25分）
5. フロアとの質疑応答（30分）
総括（5分）

各発表の題名と要旨：

【発表1】「日本語の語形成におけるプロソディーの役割」

The Role of Prosody in Japanese Word Formation

日本語の語形成過程には音韻構造から強い制約を受け、その出力を決定されるものが多く観察される。本発表では、特に韻律構造（プロソディー構造）が語形成の出力を決める（あるいは影響を及ぼす）現象として（i）語形成の出力に韻律テンプレート（prosodic template, 韻律鋳型）が課されるものと、（ii）テンプレート以外の形で出力が韻律構造に縛られるものの2種類を取り上げ、そこに働く韻律制約を分析する。また、それらの韻律制約を含む音韻的条件と形態意味構造とがどのように競合するか—音韻的条件と形態意味構造のいずれが優先されるか—考察する。

【発表2】「伊良部島方言における2種類の複合形式」

Two Types of Compound Forms in the Irabu Dialect

南琉球宮古語伊良部島方言には、表1の(c) ffu-zata（黒-砂糖；太字は連濁）「黒砂糖」のように、通言語的な意味で（cf. Haspelmath 2025）問題なく複合と言える形式と、maadagutu ffu zata「とても黒い砂糖」における ffu zata（表1(b)）のように、形態統語的な意味で句にちかい拡張性を備えた複合形式が見られる。ただし、(b)(c)いずれも形容詞語根と名詞語根の並置という構造を



しており、また名詞語根に連濁が見られうるという点で、言語個別的な基準によって「複合」という1つのカテゴリーを形成している。なお、(a)は(b)(c)と同一の形容詞語根が活用して一語になった ffukar「黒い」が別の語である名詞を修飾する句である。(a)-(c)は全て Adjective + Noun (A+N) という共通の構文スキーマ(Booij 2019)を持つが、(a)-(c)の語性は大きく異なっている。本発表では、特に(b)のタイプの複合形式の形態統語的語性(G-wordhood)と音韻的語性(P-wordhood)を分析する。結論として、このタイプの複合形式は、形態的に拘束的な A と N が、(a)のような通常の語の形成プロセスを経ずに、そのまま NP の構文スキーマにマッピングしているような特殊な状況を想定する必要があることを述べる。

表 1. 伊良部島方言の複合形式と語性

	Form	Meaning	Construction	G-wordhood	P-wordhood
a.	ffukar sata	黒い砂糖	A + N (Phrasal)	Two-word	Two-word
b.	ffu zata	黒い砂糖	A + N (Compound)	Intermediate	Two-word
c.	ffu-zata	黒砂糖	A + N (Compound)	One-word	One-word

[発表 3]「中国語灌雲方言における語形成とプロソディーの相互構成」

Co-Construction of Word Formation and Prosody in the Guanyun Dialect of Chinese

本発表では、中国江蘇省灌雲県方言における連続変調 (Tone Sandhi=TS) の現象を通じて、語形成とプロソディーとの双方向的関係を明らかにすることを目的とする。灌雲方言では、TS が名詞句や動詞句の構造に応じて体系的に適用され、語や構文単位の境界を可視化する機能を担っている。具体的には、TS にはより小さな構成素に作用するタイプ I と、広域の構成に適用されるタイプ II があり、構造的な階層に沿って順序づけられて適用される。このことから、TS は単に韻律的な音変化ではなく、語・複合語・句にまたがる構成単位を標示する韻律的構造標識として機能しているといえる。また同時に、統語的な階層性及び語彙化あり無しといった語形成的要因が、TS の適用可否や変調の形式に影響を及ぼしており、語形成→韻律という方向性も確認される。

以上の観察により、TS は韻律と語形成の双方向的な相互作用のもとに成立しており、孤立語における語形成の音韻的可視化過程を理論的に把握する鍵を提供する。本研究は、語の構造とプロソディーの統合的理解を通じて、孤立語の「語」とは何かという問いに理論的貢献をなすことを目指す。

参考文献：

- Booij, Geert (2019) The role of schemas in Construction Morphology. *Word Structure*. 2019; 12 (3):385-395.
- Haspelmath, Martin (2025) Compound and incorporation constructions as combinations of unexpandable roots. *Journal of Word Formation* 9(1).1-23.
(doi: <https://doi.org/10.21248/zwjw.2025.1.124>)



W-2

接合要素から考える複合名詞と統語的名詞句

企画者・司会者：野元 裕樹（東京外国語大学）

[発表 1] 池田 裕行（東京外国語大学大学院）、[発表 2] 清水 智也（東京外国語大学大学院）、
[発表 3] 伊藤 さとみ（お茶の水女子大学）、[発表 4] 喜多田 敏嵩、野元 裕樹（東京外国語大学）

趣旨 日英語の複合名詞では構成要素が他の要素の介在なしに生起するのが普通で、それが統語的名詞句との区別の判断材料の一つとなる（例：男^で手 vs. 男^ての手、linguistics professor vs. professor of linguistics）。しかし、言語によっては構成要素間に接合要素（linking element; LE）が生起する（ドイツ語：Arbeit|s|zeit [work|LE|time]「勤務時間」）。接合要素の研究はその使用が特に生産的なゲルマン諸語で盛んだが（Furhop & Kürschner 2015; Schlücker 2023）、接合要素の存在は系統・地域を超えて報告されている（Mukai 2008, 2013; Szczepaniak 2020）。その中で問題となるのは接合要素の認定である。これは接合要素の多くが属格や複数標識など他の形式と同形であることが多いためである。例えば、「天の川」「孫の手」の「の」（Mukai 2008）、parks department の s（Lieber 2009）を接合要素とみなす分析がある。前者は統語的名詞句との区別の問題と、後者は複合語の従属要素が複数形を取り得るかという問題と関わる。また、Itô & Mester (2008)は日本語の連濁を接合要素とみなすが、Szczepaniak (2020)は連濁を含む、分節音以外の要素を接合要素から明確に除外している。さらに、接合要素が意味的に空か否かにおいても研究者の間で見解の相違が見られる。

本ワークショップでは、接合要素の存在がよく知られている言語（ドイツ語）、知られていない言語（タガログ語）、接合要素が存在しないと思われる言語（中国語）、存在するものの極めて限定的な言語（スペイン語）における接合要素とそれに関連する形式に関する研究発表を通じて、接合要素、複合名詞、統語的名詞句について理解を深め、新たな知見を得ることを目的とする。構成 司会者による趣旨説明（10分）の後、4つの発表（各20分）を行い、最後に全体討論の時間（30分）を設ける。

各発表の題名と要旨

[発表 1] ドイツ語の「名詞+名詞」複合語における接合要素：第一要素の名詞語幹に注目して / Linking elements in German N-N compounds: Focusing on the noun stem in the first element

本発表は現代ドイツ語の「名詞+名詞」複合語における接合要素を対象とし、名詞屈折を従来とは異なる方法で捉え直すことで、第一要素の屈折タイプという一貫した基準による記述が可能であることを示す。従来の研究は、接合要素を「単数・主格形の後に生起する要素」と定義する（Nübling & Szczepaniak 2008 など）。それに対し、本発表では Harnisch (2001) の枠組みを援用し、単数・主格形が語幹と語尾から構成される名詞に注目し、接合要素を「語幹の後に生起する要素」として再定義する。ここで語幹とは、当該名詞の屈折形だけでなく派生語にも共通する（ウムラウトを除いた）部分を指す。例えば、Blume「花」は語幹 Blum と語尾 -e から構成される（cf. Blümchen [flower-DIM]「小さな花」）。この枠組みに基づくと、接合要素の分布は、単数・主格形＝語幹の時は生起せず（例：Tisch|bein [desk|leg]「机の脚」）、単数・主格形＝語幹＋語尾の時は -en がデフォルトで生起する（例：Blum|en|vase [flower|LE|vase]「花瓶」）というように一般化できる。

[発表 2] タガログ語における複合名詞 / Compound nouns in Tagalog

Schacter & Otones (1972) [以下、S & O] は、タガログ語の複合名詞には通常の修飾で用いられる



リンカーとは別のリンカーが用いられると述べ、前者をリンカーna/-ng、後者をリンカー-ngと呼ぶ。-ngが生起する場合、統語的名詞句と複合名詞は区別が難しい。しかし、リンカー-ngは異形態としてnaではなくゼロ形を持ち、両者は別個の形態素である。また、リンカーna/-ngを伴う通常の修飾構造では修飾要素と被修飾要素の順序は一般に自由なのに対し、リンカー-ngを伴う構造では必ず左側主要部となる。つまりタガログ語の複合名詞では常に専用の接合要素が現れると言える。複合名詞の接合要素はS & O以降ほとんど研究されていない。そこで本発表では、S & Oが約半世紀前に挙げた複合名詞の例とそれに基づく記述をコーパスと母語話者への聞き取りにより検証する。特に、S & Oは2要素から成る複合名詞しか扱っていないので、それより複雑なものも対象とし、記述の守備範囲を拡大する。

[発表3] 中国語における複合名詞の接合要素 / Linking element in Chinese compound nouns

中国語で二要素の併置により作られる結合には、語彙的／統語的の両方がある。語彙的結合には部分の意味が保持されない不透明なN1N2（例：水果[水 果実]「果物」）と部分の意味が保持される透明なN1N2（例：军帽[軍 帽子]「軍帽」、木头房子[木 家]「木でできた家」）、統語的結合には親族関係を表すN1N2（例：我妈[私 母]「私の母」）がある。本発表では、不透明なN1N2は従来通り名詞の併置とみなし、透明なN1N2と統語的N1N2は、修飾標識“的”の出現可能性から、ゼロ接合要素を持つと主張する。“的”は多様な要素と名詞の間に現れるため、統語的な操作による挿入であると考えられるが、N1N2間では以下の語彙・韻律・談話上の制限が課される。①不透明なN1N2には挿入できない（例：*水の果）。②語彙的N1N2では、N1とN2がともに一音節だと挿入できない（例：*军的帽）。③N1またはN2が対比される文脈でなければならない（例：木头的房子[木 的 家]「(石ではなく)木でできた家」、我的妈[私 的 母]「私の(父ではなく)母」）。

[発表4] スペイン語におけるN1 de N2型複合名詞の統語論・意味論 / The syntax and semantics of N1 de N2 compounds in Spanish

スペイン語の複合名詞は、二要素が併置されるものや接合要素を伴うものが生産的ではなく（Kornfeld 2011; Fernández-Domínguez 2019）、ほとんどが前置詞deを介したN1 de N2という形を取る（例：dolor de cabeza [ache DE head]「頭痛」）。この形式は統語的名詞句との区別が困難なため、「クラスの名詞句」（Escandell-Vidal 1995 など）や「連辞的複合語」（RAE & ASALE 2009 など）といった、統語的単位であることを前提とした名称で議論されてきた。本発表では、N1 de N2型複合名詞に生じるdeは統語的名詞句中の前置詞deとは別物であり、接合要素の一つであると主張し、複合名詞は統語論で形成されるという想定のもと、以下の統語・意味分析を提案する。接合要素は補部と指定部を取る種類（flavour）のnで、N1 de N2型複合名詞は[n_P N1 [n' n N2]]という構造のnがデフォルトのdeで実現されたものである。意味論的にはnはN2の特性から、それと関連した特性とN1の特性の共通部分への関数として機能する（cf. Partee & Borschev 2002）。

主要参考文献 ■Harnisch, R. 2001. *Grundform- und Stamm-Prinzip in der Substantivmorphologie des Deutschen: Synchronische und diachronische Untersuchung eines typologischen Parameters*. ■Itô, J. & R. Mester. 1986. The phonology of voicing in Japanese: Theoretical consequences for morphological accessibility. *Linguistic Inquiry* 17: 49–73. ■Lieber, R. 2009. IE, Germanic: English. In *The Oxford Handbook of Compounding*, 357–369. ■Mukai, M. 2008. Recursive compounds. *Word Structure* 1: 178–198. ■Schachter, P. & F. T. Otanes. 1972. *Tagalog Reference Grammar*. ■Schlücker, B. 2023. Compounding and linking elements in Germanic. In *Oxford Research Encyclopaedia of Linguistics*. ■Szczechaniak, R. 2020. Linking elements in morphology. In *Oxford Research Encyclopaedia of Linguistics*.



W-3

The cognitive science of space, time, and modality

Organizer and chair: Takubo, Yukinori (Professor Emeritus, Kyoto University and NINJAL),
Presenters: Rafael Núñez (UCSD), Naonori Nagaya (Univ. of Tokyo), Setsuko Arita (Ritsmeikan Univ.),
Hiromichi Hosoma (Waseda University)

Objectives:

This workshop aims to shed light on human deictic cognition of time, space, and modality through descriptive linguistic analysis and cognitive science experiments, including gesture and interaction studies.

Humans perceive spatio-temporal or inferential domains as cognitive agents, but such perception cannot be directly accessed through the five senses. Rather, it becomes cognitively available largely through linguistic encoding. At the same time, bodily experience synchronizes with external recognition, including that of interlocutors, which is reflected in gesture—particularly micro-gestures. This workshop explores how human deictic cognition of time, space, and modality is manifested in both language and gesture, and how these phenomena can be investigated through the combined approaches of linguistics and cognitive science.

Organization:

Introduction: Yukinori Takubo 5 minutes

Presentation 1 Keynote 30 minutes

Frames of reference in spatial construals of time: Variations and universals

Presentation 2. 20 minutes

Tagalog demonstratives in interaction: Space, time, and beyond

Presentation 3. 20 minutes

A referential approach to conditional clauses

Presentation 4. 20 minutes

How transmission delays affect turn-taking in online conversation

Discussion: 25 minutes

Presentation 1. Frames of reference in spatial construals of time: Variations and universals

Operating with frames of reference is a fundamental dimension of human cognition. One particular case is that of the conceptualization of temporal reference, more specifically that of deictic time (which centered on an ever-changing “now”, defines “past” and “future”). We cannot perceive deictic time directly through the senses in the way we perceive color, texture, or heat.

In order to make sense of, and talk about, temporal experience we must construe it in a stable and tractable manner. This is achieved via higher-order cultural and linguistic phenomena built on the recruitment of bodily-grounded and biologically-based mechanisms that make human imagination possible, such as conceptual mappings. These remarkable but ubiquitous mappings manifest themselves via ordinary linguistic metaphors as in the English expressions "the week ahead looks great" (future) and "way back, in my childhood" (past). Importantly, beyond words and grammar, conceptual mappings can be observed also through largely unconscious motor actions co-produced with speech — spontaneous gestures, which reveal their deep conceptual nature.

In this brief presentation, I will discuss some basic spatial universal frames of reference, as well as some striking variations involving bodily (ego-centric) and topographic (allo-centric) orientation. The findings shed light on how, our universal human embodiment notwithstanding, higher-order linguistic, cultural, and environmental pressures generate and come to shape everyday abstract concepts that constitute the fundamental building blocks of human worldviews and sense-making.



Presentation 2 . Tagalog demonstratives in interaction: Space, time, and beyond

Demonstratives, which are ubiquitous in the world's languages, are often recruited for extended functions (for example, as time-referencing devices, placeholders, and interjections). Interestingly, the range of these extended functions varies across languages. This study explores such extended uses of demonstratives in Tagalog, an Austronesian language spoken in the Republic of the Philippines.

Tagalog has a demonstrative system with a three-way spatial distinction, *ito* (proximal), *iyon* (medial), and *iyon* (distal). Through careful analysis of social interactions among Tagalog speakers, this presentation shows that demonstratives are not only spatial-referencing devices but also resources for indexing experiences across time and negotiating intersubjectivity, attention, and stance. By examining Tagalog demonstratives in actual conversations, this study contributes to broader discussions on deixis, indexicality, and the grammar of social cognition. It also emphasizes the importance of conversational data in understanding how linguistic forms are shaped by human interaction.

Presentation 3. A referential approach to conditional clauses

In the semantics of conditionals, the “restrictive approach,” which treats the antecedent clause as restricting the domain of the main clause operator, has been widely adopted. This approach also accounts for modality restrictions in Japanese conditional constructions. However, “biscuit conditionals” (e.g., Onaka ga suiteiru nara, reizōko ni bisuketto ga aru yo ‘If you are hungry, there are biscuits in the fridge’) pose a challenge, since the truth of the consequent is asserted regardless of the truth of the antecedent.

This presentation explores an alternative “referential approach,” which treats the antecedent as a definite description of possible worlds, functioning analogously to a topic. This approach not only provides a way to account for biscuit conditionals, but also offers explanatory power for the fact that Japanese conditional clauses display tense interpretation patterns distinct from causal and temporal clauses. Through Japanese data, the paper considers the implications of these two approaches to conditionals.

Presentation 4. How transmission delays affect turn-taking in online conversation

Since the COVID-19 pandemic, online communication has become widely used, and multiparty online conversations via platforms such as Zoom have become increasingly common.

This presentation examines how transmission latency affects online interaction, with particular attention to the difference between the relative timeline from each participant's perspective and the absolute timeline. In turn-taking, from the perspective of the first speaker, the effect of latency is doubled at the start of the second speaker's turn, whereas the second speaker does not perceive any delay. As a result, even a latency of only a few hundred milliseconds can exert a non-negligible impact on turn-taking. Furthermore, in Zoom, overlapping utterances are often subject to timing edits or partial dropouts, which tend to go unnoticed by users. This presentation highlights the problems caused by these phenomena and discusses issues that linguists should take into account when using online communication as research data.

Researches in this workshop are sponsored by JSPS grants 25K00462, 23K00538, 21H00528, and 17H02333.



W-4

主観性/subjectivity の言語学

企画者：佐藤らな 司会者：西村義樹 発表者：西村義樹、長谷川明香、佐藤らな、田中太一、城山月花

趣旨：本 WS では認知言語学における主要理論の 1 つである認知文法の観点から、主観性の射程や内実に関わる様々な問題を検討する。「主観性」は言語学において様々な役割を担う重要な説明概念であり、(小柳 (2021) が日本語研究を対象として整理したように)「認識原点の反映」「当事者の事態把握」「視点配置」「運用上の任意基準」という(互いに無関係ではないものの)多様な意味で用いられており、その曖昧性に無自覚であることに起因する問題も様々に生じている。認知文法における主観性(の 1 つ)は、概念化される対象が客観的に把握されるのに対し、概念化を行う主体は主観的に把握されるという仕方では規定される。しかしながら、このような分析には修正の必要があるとする論者が存在する[発表 1]ほか、概念化の主体がどのような存在なのかという問題も残されている[発表 2]。さらに、主観性は「視点」の問題と密接に関わる[発表 3]だけでなく、話し手や主語の指示対象の態度[発表 4]とも結びつくものである。これらの論点を検討することを通じて主観性を巡る混乱を整理し、より有意義な分析を行うための基盤を提供したい。

構成：本ワークショップは、司会・発表者(1 名)、発表者(4 名)の合計 5 名によって行われる。構成は以下の通りである。 [1] 趣旨説明 [2] 研究発表 [3] 全体討論

各発表の題名と要旨：

[発表 1] 「subjectivity とは何か：2 つの解釈」

Ronald W. Langacker (1985, 2002 など) の認知文法における主観性と池上嘉彦 (2004, 2007 など) による「好まれる言い回し」の研究における主観性は、後者が前者を踏まえて提唱されたこともあって、しばしば類似の概念として理解されている。とはいえ、後者は池上が日本語のある種の現象の分析に適するように前者を修正したものであることから、二つの主観性概念に相違があることにも疑いの余地はない。本発表では、共通の具体的な言語現象の分析においてそれぞれの主観性概念の果たす役割に注目することによって、この相違の本質を明らかにすることを目指す。その一環として、Langacker と池上の以下のような言語観の対立がこの相違の根底にある可能性を示唆する。①Langacker は、記号を用いた対話 (symbolic interaction) の手段として言語を捉え、記号としての文の最も典型的な機能は agent の patient に対する働きかけとして捉えられた「スル的」事態を報告することであると考え (Langacker 1991: 7.1.1)。②池上は、日本語のような言語の好まれる言い回しである主観性の強い表現は、環境に埋め込まれた自己という場において出来る「ナル的」事態を話し手がモノローグ的に表出することを可能にすると考え。

[発表 2] 「〈私〉はどこにいるのか：川端文法と認知文法の接点を探る」

池上の主観性に関する議論は、概念化の主体が概念化の対象となる出来事に参与する場合を出発点としている。一方、Langacker (1985, 2002) では、概念化の主体が直接出来事に参与しない場合も含め、より包括的な分析が提示されている。国語学において認識論を取り入れている川端文法は、主観性という用語を用いてはいないものの、世界を捉える主体と世界との関係を論じている。川端 (1979) の主体による「判断」と判断の対象となる「ことがら」という図式では、主体が出来事に参与することを特別視せず、すべての文において判断主体〈私〉が「知ること」と判断対象が「あること」との相即として捉えられる。このように、全ての文で判断主体を想定する点は、認知文法における概念化の主体と一致する側面をもつ。しかし、川端 (2004: 61) によれば、この判断主体〈私〉による「知ること」の作用は「絶対に対象化し得ないもの」とされる。常に基底として存在し顕在化しない点で、認知文法の概念化の主体とは異質である。また、「私」で指示される一人称が出来事に参与する場合も特別視されず、一人称が出来事に参与しない事態と同様の分析がなされる。このことから、川端は池上とは異なり、判断主体の出来事への参与を問題としない立場を取っているといえる。本発表では、この川端の判断主体〈私〉と「ことがら」との対応の構図が、認知文法の主観性の一部として理解できる側面を指摘する。同時に、判断主体〈私〉と概念化の主体とが異なるレベルにおいて想定されていることを明らかにし、判断主体〈私〉の在り方を精査することで、主観性概念の理論的射程を反省的に捉え直す。

[発表 3] 「日本語受身文の視点と主観性」

日本語の受身文には〈視点〉が重要な要素として関与することが指摘されている (e.g. 久野 1978, Kuroda 1979)。近年、注意を向ける主体の立ち位置としての〈視座〉と、注意を向けられる対象としての〈注視点〉の区別が一般的になってきていることを受け、日本語受身文にとって重要な視点は〈視座〉のことであるとする分析が提出されている (古賀 2018, 志波 2020)。このような分析は、受身文研究において支配的なものとなっている「受身文は有情者の経験を表す「主観的」な構文だ」とする通説 (cf. 益岡 1991) とも整合的である。話し手が主語の指示対象である有情者の経験を語れるのは、まさにその人物の〈視座〉に立ち、その人物に成り代わるかたちで事態を把握しているというわけである。主語の指示対象が何らかの意味で〈視座〉として機能していることは、(1)「太郎は先生に家に来られた」の「来る」が、太郎に向かう移動を



表していることから確かめられる。しかしながら、他者の〈視座〉をとることは他者に成り代わることでない。仮にそのようなことが起こっているのであれば、(1)の事態を(2)「私は先生に家に来られた」で表現できることになるが、これは不自然である。さらに、(3)「太郎は先生に褒められたがっている」のように、一人称主語の場合には用いられない「V たがる」という形式をとることもできる。主語の指示対象に〈視座〉を置くとは、あくまで話し手自身の〈視座〉を接近させるということなのである。このことを踏まえるならば、有情者主語受身文であっても、必ずしも主語の指示対象の心的経験を表すとは限らず、非情物が主語であることそれ自体に問題があるわけではないことになる。また、このような〈視座〉の規定は、受身文は被動者を〈注視点〉とし、その変化に注目する構文であるとする分析とも整合的であると考えられる。

[発表 4] 「ドイツ語のいわゆる関心の与格と主観性」

本発表では、関心の与格 (Dativus ethicus、以下 D.e.) として知られるドイツ語の現象を主観性の観点から分析する。ドイツ語では、与格のうち非必須項として実現されるものを自由与格という。自由与格には様々な意味機能があるが、そのうち D.e.と呼ばれる (1) のような用法は、「強い願望など話者の感情が発話に込められる場合に現われるもの」で (片岡 2004: 35)、一人称または二人称代名詞でしか成立せず、一人称では平叙文と命令文に、二人称では平叙文にのみ現れうる (Wegener 1985: 51)。

(1) Das war dir ein Tor! 「あれはすごいゴールだったね！」

it.N.NOM was.3SG.PRET you.DAT a.N.NOM goal.N.NOM

先行研究には、D.e.を心態詞に位置づけて自由与格から区別する立場 (Jacobs 1991 など) と、D.e.を自由与格に含める立場 (Wegener 1985、Smith 1987 など) があるが、後者の立場をとる研究者の間でも、D.e.を自由与格の中でどのように位置づけるかは様々である。このような問題を解消するためには、「主観性」という用語で様々に提案されてきた概念が有用である (Langacker 1985、小柳 2021)。特に、しばしば D.e.と同一視される判断の与格 (Dativus iudicantis、(2)) は、小柳 (2021) でいうところの「任意性」(判断規準の話し手依存性) の強い形式であり、主観性の観点からみると、D.e.と異なる意味を有していることが明らかである。

(2) Das Hemd ist mir zu groß. 「このシャツはぼくには大きすぎる。」

the.N.NOM shirt.N.NOM is.3SG.PRS me.DAT too big.

参考文献：

- 池上嘉彦 (2004) 「言語における主観性と主観性の言語的指標 (1)」『認知言語学論考』3: 1-45. 東京：ひつじ書房。
- 池上嘉彦 (2007) 『日本語と日本語論』東京：筑摩書房。[2000 年に『「日本語論」への招待』として刊行されたものを改題]
- Jacobs, Joachim (1991) On the semantics of modal particles. In: Werner Abraham (ed.), *Discourse particles: Descriptive and theoretical investigations on the logical, syntactic, and pragmatic properties of discourse particles in German*, 141-162. Groningen: de Gruyter.
- 片岡宣行 (2004) 「ドイツ語の与格の用法：ドイツ語教育の観点から」『西洋文学研究』24: 32-56.
- 川端善明 (1979) 「用言」服部四郎ほか (編) 『日本の言語学 第4巻 文法Ⅱ』169-217. 東京：大修館書店。
- 川端善明 (2004) 「文法と意味」尾上圭介 (編) 『文法Ⅱ』58-80. 東京：朝倉書店。
- 古賀悠太郎 (2018) 『現代日本語の視点の研究』東京：ひつじ書房。
- 小柳智一 (2021) 「4 種類の「主観」の用語法」天野みどり・早瀬尚子 (編) 『構文と主観性』33-52. 東京：くろしお出版。
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』東京：大修館書店。
- Kuroda, S.-Y. (1979) On Japanese passives. In: George Bedell, Eichi Kobayashi and Masataka Muraki (eds.), *Explorations in linguistics: Papers in honor of Kazuko Inoue*, 305-347. Tokyo: Kenkyusha.
- Langacker, Ronald W. (1985) Observations and speculations on subjectivity. In: John Haiman (ed.), *Iconicity in syntax: Proceedings of a symposium on iconicity in syntax*, 109-150. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of cognitive grammar*, vol. 2, *Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2002) Deixis and subjectivity. In: Frank Brisard (ed.), *Grounding: The epistemic footing of deixis and reference*, 1-28. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』東京：くろしお出版。
- 志波彩子 (2020) 「受身・可能とその周辺構文によるヴォイス体系の対照言語学的考察」『言語研究』158: 91-116.
- Smith, Michael Brockman (1987) *The semantics of dative and accusative in German: An investigation in cognitive grammar*. Michigan: UMI.
- Wegener, Heide (1985) *Der Dativ im heutigen Deutsch*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.



W-5

日本語から見た世界の言語のアスペクト表現 —テイルに相当する概念の表出に関わる形式に着目して—

企画者・司会者：	江口 清子（大阪大学）
発表者 1：	大塚 行誠（大阪大学）
発表者 2：	原 真由子（大阪大学）
発表者 3：	宮崎 久美子（大阪大学）
発表者 4：	ジェイ・ベヘナム（大阪大学）
発表者 5：	大辺 理恵（大阪大学）

ワークショップの趣旨：

アスペクトは、捉えにくい概念であることに加え、言語によってその表出方法はさまざまであり、言語習得においてもしばしば問題になる。日本語でアスペクトを表現する形式として挙げられるテイルにはいくつかの用法があるが、中でも、動作継続（例：「子どもが川で遊んでいる」）、結果残存（例：「窓が割れている」）が中心的な用法とされる（奥田 1978, 寺村 1984, 工藤 1995 他）。日本語における第二言語習得研究では、これらの用法の習得順序を明らかにしようとするものが数多く存在する（黒野 1995, 許 1997 他）。砂川（2022）は、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）』の「絵描写タスク」（迫田 2020 参照）を使用して集められたデータのうち、6 つの異なる言語を母語とする、日本語中級後半レベルの学習者のものについて分析を行なっている。そこでは、従来述べられていた習得順序と異なる結果（結果残存のテイルのほうが、動作継続のテイルより早く習得される）を示す母語話者グループがあることが指摘された。これは、学習者の母語では、同種概念を異なる方法で表現し、それが目標言語での表出にも影響することを示唆する結果である。

そこで本ワークショップでは、第二言語習得研究への応用を視野に入れ、砂川（2022）で使用された「絵描写タスク」を用いて、さまざまな言語で、日本語のテイルで表現される概念がどのような形式で表出されるのかについてパイロット的に調査した結果を報告する。今回取り上げるのは、アスペクト表出方法が異なる 5 つの言語である。ビルマ語は、動作継続の表現にも結果残存の表現にも日本語のテイルに相当する助動詞を用いる言語である。インドネシア語は、アスペクトに関わる特別な文法形式は用いず、文脈や時の副詞によって判断する言語である。スワヒリ語は、動詞接辞付加によって、アスペクトを表現し分ける言語である。ペルシア語は、動作継続の表現には動詞接頭辞を、結果残存の表現には過去分詞 + *būdan* という迂言的な方法を用いる言語である。デンマーク語は、動作継続の表現には動詞の現在形を、結果残存の表現には助動詞 *være* + 過去分詞という、やはり迂言的な方法を用いる言語である。それぞれの言語において、日本語のテイルに相当する概念の表出に関わる形式を中心に、日本語と対照することによって明らかにする。

構成：

このワークショップでは、企画者（江口）による趣旨説明（約 10 分）の後、次の 5 つの発表（各約 15 分）を行い、全体の総括（約 5 分）を行った後、フロアとのディスカッションの時間（約 30 分）を設ける。

各発表の題名と要旨：

【発表 1】「現代口語ビルマ語における動作継続と結果残存の表現」

日本語のテイル形で表される動作継続と結果残存の意味は、現代ビルマ語の口語体においては、どちらも本動詞の後に、動詞 *nè*「居る」に由来する助動詞 *=nè* を用いて表すことができる（例：*khālè=dwè shò=nè=dè*. (child-PL play-NÈ-REAL)「子どもたちが小川の中で遊んでいる」、*bādínbau²-hmàn=gá kwé=nè=dè*. (window-glass-NOM break-NÈ-REAL)「窓ガラスが割れている」）。しかし、結果残存の意味では、助動詞 *=nè* 以外にも、動詞 *thá*「置く」に由来する助動詞 *=thá* を用いて表す場合もある。本報告では、ビルマ語の調査結果を示しながら日本語との共通点を明示した上で、この調査では観察されなかった、日本語のテイル形とは異なるビルマ語のアスペクト標識の文法的特徴についても論じる。

【発表 2】「インドネシア語における動作継続と結果残存の表現」

インドネシア語には時制がなく、動詞などの形式においてそれが反映されず、文脈や時の副詞によって判断される。またアスペクトは主に助動詞によって示されるが、文脈や時の副詞があれば、助動詞が必ずしも用いられるとは限らない。日本語のテイル形は主に動作継続と結果残存を表すが、インドネシア語においては、動作継続の場合、助動詞 *sedang* は必須ではなく、*sedang* があると「まさにその最中である」ことを明確に表す（例：*Anak-nya (sedang) bermain*. (child-the SEDANG play)「子どもが遊んでいる」）。



(最中である))。結果残存の場合は、助動詞は用いず、*sedang* を使うと不自然となるか動作継続の意味になる。(例: *Jendela-nya pecah.* (window-the break) 「窓が割れている」 vs. *Jendela-nya sedang pecah.* (window-the SEDANG break) 「(地震などで) 窓が割れているところだ」)。なお、*sedang* は状態動詞や形容詞とともに使われることもある。そこで本報告では、インドネシア語において動作継続と結果残存がどう表出されているかを示した上で、さらに *sedang* が用いられる事象にはどのようなものがあるのかについて考察する。

[発表 3] 「スワヒリ語における動作継続と結果残存の表現」

日本語のテイル形で表される動作継続と結果残存は、スワヒリ語では、テンス・アスペクトのマーカーである動詞接辞 *na-* (現在・進行) または *me-* (完了) によって表される。*na-* はもともと進行を表すアスペクトマーカーであったと考えられているが、現在では現在を表す時制マーカーにもなっている。基本的に動詞が持つアスペクトによってマーカーが使い分けられ、継続動詞には *na-* (*Mtoto a-na-cheza* (child SM-PRS-play) 「子どもが遊んでいる」)、状態動詞には *me-* (*Dirisha li-me-vunjika* (window SM-PRF-broken) 「窓が割れている」) が用いられる。状態動詞に *na-* を付加して用いると、そのような性質 (ポテンシャル) を表すことになるが、状態動詞のなかには、〈変化〉が含意されない場合は *na-* (*Mlima u-na-onekana* (mountain SM-PRS-be seen) 「山が (常に) 見えている」)、含意される場合は *me-* (*Mlima u-me-onekana* (mountain SM-PRF-be seen) 「(霧が晴れて今は) 山が見えている」) のように使い分けがされる動詞もある。そこで本報告では、スワヒリ語のテンス・アスペクトマーカーの使い分けと動詞のアスペクトの区分との関連性について検討する。

[発表 4] 「ペルシア語における動作継続と結果残存の表現」

ペルシア語では、動作継続は、動詞の現在語幹に未完了を表す接頭辞 *mī-* を組み合わせることで形成される。しかし、この形式は習慣的な行為や自然現象も表すため、進行中の解釈は文脈に依存する。より明示的に進行中であることを示す場合には、語彙的手段として *dar hāl-e ... būdan* 「～している途中である」を用いたり (例: *bačče-hā dar hāl-e bāzī-and* (kid-PL in situation-EZ play-3PL)), 文法的手段として所有動詞 *dāstan* を助動詞的に用いたりする (例: *bačče-hā dār-and bāzī mī-kon-and* (kid-PL have-PL(PROG) play IMP-do-3PL))。しかし *dāstan* は、*nešastan* 「座っている」、*mordan* 「死んでいる」などの状態動詞とともに用いられる場合は、進行中ではなく、発生寸前の意味を表す。結果残存の表現には、過去分詞 + *būdan* (= 現在完了形) が用いられる (例: *panjare šekaste ast* (window broken is))。 *oftādan* 「落ちる」のように瞬間動詞とも継続動詞とも解釈可能な動詞は、現在完了形か現在進行形化によって完了か未完了かが区別される。そこで本報告では、このように、動詞の種類や文脈に強く規定される点に特徴があるペルシア語のアスペクト表現について検討する。

[発表 5] 「デンマーク語における動作継続と結果残存の表現」

デンマーク語では、動作継続には *Barn-et leg-er.* (child.SG-the play-PRES) 「子どもが遊んでいる」のように動詞の現在形を、結果残存には *Vindue-t er knus-t.* (window.SG-the be.PRES broke-PTCP) 「窓が割れている」のように助動詞 *være* + 過去分詞 (= 状態受動) を用いて表されていた。動作継続には、(対象となる動作を表す) 動詞の現在形以外にも、姿勢動詞 (*sidde* (sit), *stå* (stand), *ligge* (lie)) + (対象となる動作を表す) 動詞や、進行を表す構造 (*være* + *ved* (by) + *at* (to) 不定詞) を用いることもできるはずだが、今回の調査では観察されなかった。また、結果残存を表す場合にも、動詞の現在形および状態受動のどちらも可能という回答も見られた。そこで本報告では、デンマーク語の調査結果を示した上で、動作継続を表す際のデンマーク語における複数の形式の使い分け、および結果残存を表す際の 2 つの形式の選定を左右する条件について考察する。

参考文献:

- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一段階—」 [奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』むぎ書房. に再録]
- 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾人日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断的研究」『日本語教育』95, 37–48.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』東京: ひつじ書房.
- 黒野敦子 (1995) 「初級日本語学習者におけるテイルの習得について」『日本語教育』87, 153–164.
- 迫田久美子 (2020) 「I-JAS 誕生の経緯」迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (編著) 『I-JAS 入門: 研究・教育にどう使うか』東京: くろしお出版, 2–13.
- 砂川有里子 (2022) 「テイルの習得に与える母語の影響動詞の語彙的アスペクトに着目して—」『日本語教育連絡会議論文集』34. <http://renrakukaigi.kenkenpa.net/ronbun/2021019.pdf> [2025年8月13日アクセス]
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』東京: くろしお出版.



W-6

周辺の事例と向き合う：その視座と方法

岩男 考哲（企画者・司会者・発表者 1）

板垣 浩正（発表者 2）

大神 雄一郎（発表者 3）

三野 貴志（発表者 4）

益岡 隆志（コメンテーター）

趣旨：

本ワークショップ(WS)は、「周辺の」な事例として位置付けられる多様な言語現象を対象とする。これまでこうした事例を扱った研究は見られるが、本 WS は単に分析結果を提示するのではなく、「周辺の」な言語現象を分析する際に有効かつ必要であると考えられる観点を提案し、発表者全員がその観点に基づいて分析を行う点に特色がある。さらに、各発表では「周辺の」事例の分析であることでのいかなる困難や判断を経たのかといった、通常の学会発表では明示されにくい「裏側」にも焦点を当てる。この点も本 WS の重要な特色である。対象となる言語は、標準日本語（発表 1・3）、日本語の俗語的表現（発表 2）、英語（発表 4）と様々だが、これらを共通の観点から考察することで発表間にまとまりを持たせると同時に、本 WS で提案する観点が多様な表現において有益であることも示している。本 WS を通じて、会場の参加者は分析結果のみならず手法の選択や分析上の工夫、分析対象との向き合い方といった研究過程を体験し、自身の研究に応用可能な示唆を得ることが期待される。

構成：

本 WS の構成は次の通りである。まず司会者が 5 分の導入を行い、その後[発表 1]～[発表 4]の順に発表を行う。各発表は 20 分行われる。全発表終了後、コメンテーターから 10～15 分程度のコメントが行われる。それを受けて司会者が 5 分程度のまとめを行い、その後 5 分の休憩に入る。この休憩の間に会場から質問を受け付ける。休憩後、必要に応じてコメンテーターからのコメントへの発表者からの返答、ならびに会場からの質問に応じるための 10 分～15 分程度の質疑の時間を設ける。質問はオンラインでも受け付けることとする。このことにより、時間内に収まらなかった質問への対応も時間外に可能となる。

各発表の題名と要旨：

[発表 1]「周辺の連体節をどう扱うか」(A Study of Peripheral Adnominal Clause)

第 1 発表では、連体節内にモダリティ形式が生起しながらも、「という」等のマーカーが現れない連体節（例：「早く帰ってこいメール」、以下「周辺の連体節」と仮称）を対象とする。分析過程の報告に先立ち、まず本 WS において「周辺の」事例を考察する際に大事だと考える分析的観点の提案が行われる。この観点は他の発表においても共有される。その後、周辺の連体節が中心的な連体節といかに異なるものであるのかを「連体節内の要素の比較」「引用表現との比較」「レジスターの比較」といった点から明らかにする。次に、その周辺の連体節が他の連体節とどのように併存しているのかを、特に「内容節」と呼ばれる連体節（例：「早く帰ってこいというメール」）との比較から明らかにする。その結果、先行研究では「引用」との繋がりが重視されている周辺の連体節であるが、内容節と比べると引用の働きは弱いことが明らかにされる。これは、周辺の連体節と言えど、「連体節+ ϕ +主名詞」という形式から大きく外れない働きをしていることを示す指摘であり、これにより、先行研究では特殊さに目が向きがちであったこの周辺の連体節もその働きは決して奇抜なものではないことが確認できることになる。最後に、周辺の連体節の研究は将来的には接続助詞や文末詞の研究と関わりを持ちうる可能性を指摘して発表を終える。

[発表 2]「インターネットスラングをどう扱うか」(A study of Japanese Internet Slang)

第 2 発表では、インターネットスラングとして使用される丸括弧書きの用例の考察を通じて、俗語研究の意義を文法研究の側面から見出す。具体的には、「X (Y)」の構造を持つ丸括弧書きのうち、「イケメン ()」のように Y 部に語句を取らない用法を取り上げる。丸括弧書きは、主に「対象併記



(例：大韓民国(韓国))」,「解説併記(例：日清戦争(1984年))」,のほか,「補完(例：市(区)町村会議)」,「付帯状況(例：そうなんだ(笑))」,「引用」などで使用される(黒田 2021; 大江 2024). 本研究で対象とする「X ()」は,従来の分類から見ると,Y部が欠けているという点において周辺的である.このようなY部を取らない丸括弧書きに関して,「ニコニコ大百科データ(2008-2024)」から採取した結果,主に「話題にあがっている人物・事物が有する(と一般的には言われる)Xに関わる属性に対する書き手の冷笑的・懐疑的態度を示す」ものと,「命題に対して読み手に冷笑的・懐疑的態度を促す」ものという2種類に分類できた.さらに,前者はX部にカテゴリーを表す名詞句が多く,この用法の背景に属性叙述の構造を求める特徴が認められる.以上の結果は,一見すると大きく逸脱した表現と思われるけれども,既存の文法的規範に則った振舞いをしており,他の表現((笑)など)とは異なる独自の機能的特徴を有することで併存していることを示唆する.

[発表 3]「周辺的な「ている」をどう扱うか」(A Study of Peripheral -Teiru Pattern)

第3発表では,「彼女は長い髪をしている」のように「XはYをしている」という形式で対象の状態や性質を表す構文を考察対象に,この構文に用いられる「ている」の意味について検討する.当該の構文は,「ている」形の諸用法の中で「形容詞的用法」(庵 2021)といった「派生的」な用法に分類されてきた,「ている」形の周辺の事例というべき言語表現の類である.こうした事情もあり,この構文の表現は常に述部が「ている」形になるものであるにもかかわらず,その「ている」が何を表すかについては従来の有力な研究知見からは具体的な説明が与えられない.本発表は,状況に応じての発話の自然さに注目しつつ,この構文において話者は「ている」によって何を語ろうとするのかについて検討を行い,この課題を克服することを試みる.これにあたり,「ている」の根底にエビデンシャルな意味を想定すべき,という定延・マルチュコフ(2006)などの主張を援用することで,問題となる構文の「ている」の意味に説明が与えられることを明らかにし,さらにこのことに基づいて「ている」全般をエビデンシャルの表現と考えることが妥当であるという見通しを示す.

[発表 4]「周辺の there 構文をどう扱うか」(A Study of Peripheral There Sentences)

第4発表では,周辺的な there 構文である(1)のような reach を伴う there 構文を対象とし,英語の周辺的な言語現象の分析の一例を提示することを目的とする.

(1) But there reaches a point where you can't help asking for help. (COCA)

特に本研究が議論したいのが,(1)において動詞後続要素の a point がどのような役割を果たしているかである.一般的に reach は a point を目的語に選択するが,there 構文において動詞後続要素は主語だと考えられており,a point の役割を特定するのは一筋縄ではいかない.そこで本研究では,この現象の分析方法に関して,複数の仮説を順番に検討していきながら最も妥当は分析方法を特定する.

結論としては,(1)の reach を伴う there 構文は(2)の There comes a point と(3)の S reach(es) a point が blend されることで生み出された表現であると主張する. Blending 分析を採用することで,

(1)において a point が主語と目的語の両方の特徴を有することが適切に捉えられる.

(2) There comes a point where the leaders must use their power to bring closure, use their power to determine the state of things. (COCA)

(3) You reach a point in your career where you're so successful you could never return to having some lesser position. (COCA)

参考文献:

- 庵功雄. 2021. 「現代日本語のテンス・アスペクト体系におけるテンス表示部の機能について」 庵功雄・田川拓海(編)『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 2』 pp. 51-70, ひつじ書房.
- 大江 元貴. 2024. 「丸括弧書きの語用論・文体論」『日本語用論学会 第 27 回大会発表論文集 (20)』 pp. 234-241.
- 黒田 一平. 2021. 『文字と言語の創造性—六書からネットスラングまで—』 京都大学出版会.
- 定延利之・アンドレイ マルチュコフ. 2006. 「エビデンシャルリティと現代日本語の「ている」構文」 中川正之・定延利之(編)『言語に現れる「世間」と「世界」』 pp. 153-166, くろしお出版.



次回大会のお知らせ（2026年春季大会：第172回大会）

場所： 桜美林大学

日程： 決まり次第ご案内します

研究発表募集：

- ・ 応募要領は学会ホームページをご覧ください。
（応募は学会ホームページからとなります）
- ・ 応募締め切り 2026年 3月20日（水）
- ・ 採否通知 2026年 4月中旬

問い合わせ：

日本言語学会事務支局 〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
Tel: (075)415-3661, Fax: (075)415-3662, E-mail: lsj@nacos.com

【重要】

- ◆ 応募の際には、必ず学会ホームページで最新の規程と要項をご確認ください。
- ◆ 同一の応募者が同一の大会で筆頭発表者として応募できる件数の上限は、口頭発表・ポスター発表のいずれか 1 件とワークショップにおける発表 1 件の合計 2 件です。

< 第171回大会企画運営関係者 >

大会運営委員

小町将之（委員長）、浅尾仁彦、小野智香子、甲斐ますみ、北田伸一、久保蘭愛、田川拓海、中野陽子、平山真奈美、矢野雅貴、吉田健二、李林静

大会実行委員

栗林裕（委員長）、宮崎和人、片桐真澄、桐生和幸、堤良一、久保蘭愛、又吉里美、林由華、藤本真理子、鯨井綾希

日本言語学会第171回大会 要旨集

期 日	2025年11月22日・23日
会 場	岡山大学（津島キャンパス）
発行日	2025年11月22日
編集・発行	日本言語学会
連絡先	〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷 学会フォーラム内 電話: 075-415-3661 FAX: 075-415-3662 E-mail: lsj@nacos.com